



ブランウェル・ブロンテ初期作品の世界ーハワースから英国社会と大英帝国を観察した作家

古野, 百合

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2024-09-25

(Date of Publication)

2025-12-17

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8982号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100492491>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博 士 論 文

令和 6 年 7 月 5 日

ブランウェル・ブロンテ初期作品の世界——
ハワースから英国社会と大英帝国を観察した作家

神戸大学大学院人文学研究科博士課程
後期課程文化構造専攻

古 野 百 合

学 位 論 文

ブランウェル・ブロンテ初期作品の世界—— ハワースから英国社会と大英帝国を観察した作家

所属専攻	文化構造専攻
教育研究分野	英米文学
主指導教員	奥村沙矢香准教授
副指導教員	芦津かおり教授
副指導教員	平井 晶子教授
学籍番号	191L103L
氏名	古野 百合

目次

序論	1
第1章 ブランウェルの地理的好奇心——19世紀地政学と植民地主義からの影響	20
1. ブランウェルと <i>Blackwood's Edinburgh Magazine</i>	21
2. 'Branwell's Blackwood's Magazine'	24
3. ブランウェルの地図とマックイーンの地図	26
4. 初期作品におけるアフリカ地理に関する描写	32
第2章 「海賊」——母マライアの文学的遺産と海上情勢への観察力	41
1. マライア・ブロンテとペンザンス	43
2. アングリアの起源を巡って——海賊の歴史的背景	45
3. ブランウェルの「海賊」	47
第3章 弟が姉に与えた影響——兄弟間の確執のモチーフ	56
1. 「羊毛は高騰する」	59
2. 「陸軍元帥アレグザンダー・パーシー閣下の生涯」	61
3. 「呪文」と「ザモーナ公爵」	64
4. 「アッシュワス」	65
5. 『教授』	68
第4章 「羊毛は高騰する」における羊毛投機の表象	73
1. 「羊毛は高騰する」と羊毛梳き職人	74
2. 羊毛産業と羊毛投機	77
3. 語り手の介入	82

第5章 「アングリアとアングリアの人々」——戦争小説の模倣と家畜商に見る 社会変化	88
1. 戦争表象の系譜—— <i>The Subaltern</i> と戦争の娯楽化	89
2. 新国アングリアの誕生——ギボンの『ローマ帝国衰亡史』の模倣	92
3. 従軍詩人の語り手ヘンリー・ヘイスティングズ——戦争手記小説の模倣	100
4. 語りの脱線——家畜商のモチーフ	105
第6章 アングリアの先を目指して——「そして疲れし者は眠りについた」	112
1. アングリアとの決別——断篇「サーストン」	114
2. 戦争小説からの脱皮——「そして疲れし者は眠りについた」	119
3. 偽メソジスト牧師のプロット	124
4. 『嵐が丘』におけるメソジスト風刺	131
結論	135
初出一覧	140
引用文献・参考文献	141

本論で引用される以下の文献の略称は次の通りである。

EW Christine Alexander, *The Early Writings of Charlotte Brontë*.
Basil Blackwell, 1983.

EEW Christine Alexander, Edited, *An Edition of the Early Writings
of Charlotte Brontë*. 3 vols. Basil Blackwell, 1987-1991.

OCB Christine Alexander and Margaret Smith, Edited, *The Oxford
Companion to the Brontës*. Oxford UP, 2003.

Works Victor A. Neufeldt, Edited, *The Works of Patrick Branwell
Brontë*. 3 vols, 1997-1999. Routledge, 2015.

序 論

本研究はブランウェル・ブロンテ (Patrick Branwell Brontë, 1817-48) の初期作品研究であり、その目的は、ブランウェルの初期作品に正当な批評眼を向け、彼の才能や作品の意義を発掘して適切に評価することにある。作品には当時の政治的社会的背景の貴重な洞察が記載されている可能性があるにも関わらず、未だ研究が不十分であることは大きな課題と考える。本研究では、初期作品の精読、ブランウェルと家族に関する伝記資料、また当時彼に影響を与えた雑誌や文学作品の研究を行うことにより、彼の作品に顕示された19世紀初頭のイギリスが抱えた社会問題や植民地主義に対する彼の関心と洞察力を分析する。姉妹らシャーロット、エミリ、アンのお陰で日の目を見ることになった彼の作品は、産業革命や植民地主義がイギリス国内外にもたらした新たな局面を映し出す鏡であり、19世紀初頭の激動の英国社会を理解するうえで貴重な資料として読むことが出来るのである。

ブランウェル研究には3つの壁がある。一つは、「初期作品」というジャンルに対する認知度や信頼度の低さである。日本で「初期作品」や「習作」と訳される *juvenilia* は、*OED* では“Literary or artistic works produced in the author's youth (frequently as a title of such works collected)”と定義され、作家が若い頃に書いた未発表の作品を指す。シャーロットの場合、本格的な小説への移行期の作品として捉えられている中編小説 (*novelette*) を書いた24歳までの全作品、またブランウェルの場合は亡くなる寸前の31歳までに書いた全ての作品が初期作品に含まれる。ブロンテ姉弟の場合、これら習作の原稿量が膨大かつ対象となる期間も長いことが、大きな特徴であるといえよう。

英文学研究において初期作品に特化した学会として、『国際初期作品学会』(*The International Society of Literary Juvenilia*, 2017-) がある。この学会の前身である初期作品学会に長年寄与してきた Juliet MacMaster と Christine Alexander は、ブロンテ初期作品を始めオースティンやディケンズなど、数多くの作家の初期作品について、一般の読者でも読みやすく修正したテキストと解説の出版を手掛けた。2005年には MacMaster と Alexander の編纂により、初期作品に特化した初の研究書 *The Child Writer From Austen to Woolf* (2005) が出版された。この序文において編者は「女性文学 ('women's literature') は女性が書いた文学作品として認識されるが、児童文学 ('children's literature') は子どもの「ために」書かれた作品を指し、子どもに「よって」

書かれた作品として認識されないのは何故なのか、と疑問を呈した (1)。Alexander は「子どもたちは主として大人を模倣して書くことから、彼らの初期作品には大人世界の縮図が投影され、その時代の風潮やイデオロギー、価値観が表出されている」(11) と考察し、文学作品としての研究価値を強調した。とはいえ、juvenilia は出版されることを視野に入れていない、作品としては未完成の文章であるので、研究対象として見なすことに對して抵抗を示す向きもあり、過小評価されがちである。そのため、書物のタイトルや本文においては juvenilia という言葉を敢えて使わず、early writings, childhood writings, child writers といった表現を使い、認知度の向上が図られている。

初期作品研究を行う際の二つ目の壁は、原文の不鮮明さや誤字脱字、文法ミスなどによる、英文解釈の壁である。ブロンテ作品の場合、シャーロットの初期作品を編纂した Alexander は、誤字脱字などを修正してテキスト編纂を行ったが、ブランウェルの初期作品編者である Victor Neufeldt は、修正を極力抑え、スペルミスを含めなるべく原文に近い状態で編纂した。編集の程度に差こそあれ、初期作品を研究するにあたっては編者の修正を全て受け入れ、それが作家本人のテキストであると見なすことが大前提になる。本論文でも、ブランウェルの作品については Neufeldt 編纂の作品集を用いるため、引用する際には、誤字脱字を含んだ部分的に修正されたテキストを使用する。

ブランウェル研究の最後の壁は、伝記作家が残した彼の人物評価にある。シャーロットの伝記を書いたエリザベス・ギaskell (Elizabeth Gaskell, 1810-65) を始め、Winifred Gérin や Daphne du Maurier により、ブランウェルが幼い頃から一家の希望の星としてスキャンダラスな私生活すなわち不倫やアルコール依存に関する史実に読者の関心が寄せられてしまった。初期作品にも触れられてはいるものの、実際のところ、伝記作家自身もごく限られた作品しか読んでおらず、ブランウェルの作品に対する正当な評価の妨げになってきたことは否めない。この3つ目の壁については、彼の伝記的側面を考察する際に避けて通れないことから、序論第4節にて詳解する。

1. パトリック・ブランウェル・ブロンテの生涯

本題に入る前に、まずはブランウェルの生涯についてまとめておきたい。ブランウェルは、1817年6月16日にウェスト・ヨークシャーのソーントンで、父パトリックと母マライアの6人の子供の4番目に生まれた。父から家庭で教育を受け、姉らが教わらなかった

ギリシア語やラテン語も父から学び、ヴェルギリウスやホラティウスなどの作品に幼少期から触れた。また姉妹と共に、12 歳頃から美術と音楽のレッスンを受け、フルートやピアノ、オルガンの演奏方法を学んだ。

母親と二人の姉を失くした後、ブランウェルと 3 人の姉妹たちは、木製の兵隊人形（1826 年 6 月 5 日、父パトリックがリーズの聖職者会議に出席した際に買ったブランウェルへの土産）を使って劇を即興で創作するようになった。シャーロットとブランウェルが中心となり語り始められた「グラスタウン物語」は、西アフリカの架空の国グラスタウン連邦国を舞台に繰り広げられ、後に建国されたアングリシア国を舞台にした作品とともに、総称して「グラスタウン・アングリシア物語」と呼ばれるようになった。

ブランウェルは、家族が愛読していた『ブラックウッズ・マガジン』（*Blackwood's Edinburgh Magazine*）に登場した作家たちに憧れ、11 歳で「ブランウェルズ・ブラックウッズ・マガジン」（‘Branwell's Blackwood's Magazine,’ 1829）を作り、作品世界における雑誌編集者及び発行者、著者、批評家、劇作家などといった数多くのペルソナになりきって、多くの作品を書き綴った。その後 1829 年から 1837 年まで、ブランウェルは膨大な量の詩、詩劇、散文を書いた。

その一方で、1833 年にはプロの肖像画家になる決心をし、リーズ在住の肖像画家 William Robinson に師事し、絵画を学んだ。同年、ブランウェルはロイヤル・アカデミーに入学する準備を始めていたが、実現されることは無かった。一方、1832 年に父パトリックが設立したハワースの日曜学校で助手をしたり、1834 年に設立されたハワースの禁酒協会の事務局長をしたりと、地域社会との様々な接点を持っていた。1836 年にはフリーメイソン団に加わって事務局長を務め、地方政治にも関心を持ち、ハワース保守労働者協会の事務局長や議長を務めた。

その後作家を目指して執筆を行い、1835 年 12 月には、『ブラックウッズ・マガジン』に、ジェイムズ・ホッグ（James Hogg, 1770-1835）の逝去後、ホッグに代わる投稿者として自分を売り込む手紙を書き、1836 年には詩 ‘Misery’を送り、1837 年には再び面接をしてもらえるように懇願する手紙を送った。『ブラックウッズ・マガジン』に送った手紙にも、またその後にウィリアム・ワーズワス（William Wordsworth, 1770-1850）に宛てて送った助言を乞う手紙と詩の草稿（‘Still and Bright in Twilight Shining’）に対しても、

返事は一切送られてこなかった。¹ブランウェルは再び画家を目指すべく、1838 年ブラッドフォードで肖像画家としてアトリエを持ち、芸術や文学の愛好家たちと出会った。その中には、彫刻家 Joseph Bentley Leyland がいた。²しかし、経営が上手く行かず、翌年の 2 月にはハワースに戻ってきた。

1840 年 1 月から半年間、ブランウェルは湖水地方に近いプロートン＝イン＝ファーンズのポスルスウェイト家で家庭教師として雇われ、その間再び詩人として売り込むべく 1840 年 4 月 15 日にトマス・ド・クインシー (Thomas De Quincey, 1785-1859) に、またその 5 日後にはハートレイ・コールリッジ (Hartley Coleridge, 1796-1849) に、自身の作品のサンプルとして詩とホラティウスの翻訳を送った。³ド・クインシーからは返事が無かったが、コールリッジからは返事があり、5 月 1 日にはナブ・コテッジに招かれた。コールリッジに励まされたブランウェルは、その後 6 月 27 日にホラティウスのオード第 1 巻の翻訳を送った。⁴コールリッジは肯定的な手紙を送ろうとしていたようだが、実際には返送されずに終わってしまった。ポスルスウェイト家から解雇された理由は、コールリッジとの対面以降、翻訳に夢中になり家庭教師職に全うしていなかったことが主な原因だと考えられている。⁵

¹ ロバート・サウジー (Robert Southey, 1774-1843) は、同時代の詩人たちを無下にする態度にコールリッジが激怒したと記した (*The Letters Charlotte Brontë*, 171, n.1)。その他ワーズワスが嫌っていた James Hogg の影響が色濃く出ていた点 (Sheerman 96) や、ワーズワスへの過剰なお世辞 (Barker 263) が詩人の反感を招いたと評する。シャーロットもブランウェルに負けじと 1836 年と翌年にサウジーに宛てて二通の手紙を、またブランウェルがコールリッジと面会を果たしたことに励まされ、1840 年にはコールリッジにも手紙と原稿を送った。サウジーが返信において“Literature cannot be the business of a woman’s life”と言い放ったことは非常に有名であるが、その内容はとても親切かつ丁寧であった。

² Joseph の弟 Francis A. Leyland は好古家で父親が出版社も経営していたことから、後にブランウェルの伝記 (*The Brontë Family with Special Reference to Patrick Branwell Brontë*, 1886) を出版する。

³ コールリッジに送った手紙の現物は William Law が所有していたが、2022 年に Friends of the National Libraries が買い取り、現在リーズ大学ブラザートン図書館のウェブサイト (‘Becoming the Brontës’) にて公開されている。ワーズワスに送った手紙については Wordsworth Trust が所蔵しており、2009 年にブロンテ博物館が初めてブランウェルに焦点を当てて企画した展覧会において展示された。ド・クインシーに送った手紙は残っていないが、同封されていた詩とホラティウスのオード翻訳の原稿は、Alexander Hay Japp が編纂したド・クインシーの回想録に掲載された (208-31)。

⁴ 古典文学を専門とする Jim Brown は、ブランウェルのホラティウスのオード翻訳を原文と照らして分析し、ラテン語の翻訳能力を高く評価した (“Branwell Brontë’s Latin and his Translation of Horace”)。

⁵ ブランウェルはポスルスウェイト家で家庭教師をしていた時期に私生児を設け、亡くなった娘を偲んで書いたとされる詩‘Letter from a Father on Earth to his Child in her Grave’が *Halifax Guardian* (1846) に掲載された (Barker 392)。最新の研究では、ブランウェルの娘は父よりも長く生き (Sarah Elizabeth Griffiths)、またブランウェルに孫が存在していた可能性も指摘されている (*The Brontë Society Gazette*)。

解雇されて2か月後の1840年8月末に、リーズ・アンド・マンチェスター鉄道会社が新しく開業したサワビー・ブリッジ駅の補助事務員になり、1841年にはサワビー・ブリッジ駅からさらに1マイル離れたラデンデン・フット駅の主任事務員に昇格した。ブランウェルはラデンデン・フットの酒場に通い、鉄道技術者の Francis Henry Grundy に出会う。Grundy はその約30年後に *Pictures of the Past* (1879) を出版し、ブランウェルとの私的な関係について書簡と共に回想した。Grundy の回想によれば、ラデンデン・フット駅時代、すでにブランウェルは阿片を使用していたようである(76)。その後1842年3月に11ポンド余りの使途不明金が発覚したことから調査が入り、帳簿に書かれた落書きなどから職務を全うしていなかったと見なされ、ブランウェルは解雇された。抱えていた負債を返済するためにも、彼は再び職に就くことが必要であった。

一方鉄道駅の事務員をする傍ら創作活動にも励み、ブランウェルは長年の夢であった詩人への第1歩を踏み出した。1841年6月15日、*Halifax Guardian* 紙にノーザンガーランド(Northangerland)の筆名で、詩‘Heaven and Earth’が掲載されたのである。これを皮切りに、合計18編の詩がヨークシャーの地元紙に掲載された。詩人を目指すべく地元紙に作品を投稿する一方で、収入を得るため1844年1月から、当時すでにアンが家庭教師をしていたソープグリーンのロビンソン家で、長男エドモンドの家庭教師職に就いた。順調に働いていたブランウェルであったが、1845年7月に突然解雇される。彼が解雇される数カ月前にはアンが辞職している。このブランウェルの突然の解雇については、ロビンソン夫人との情事がロビンソン氏に見つかったことが原因だと考えられている。ブランウェルは、ロビンソン氏が亡くなればロビンソン夫人と再婚できると信じていたが、そのわずかな希望は打ち砕かれ、その後の人生は酒や阿片に増々依存することになった。ブランウェルは過度のアルコール依存症に陥り、精神も衰弱し、密かに進行していた結核や家中で蔓延していたインフルエンザの影響もあり、1848年9月24日31歳の若さで、この世を去った。⁶無くなる1年前の1847年6月には、最後の詩 ‘The End of All’が *Halifax Guardian* に掲載されたことから、薬物に体を蝕まれながらも最期まで詩人になる夢を持ち続けていたのである。

⁶ この3か月後の12月19日にエミリが、また翌年の5月28日にアンと共に結核で亡くなり、シャーロットは僅か1年の間に3人の弟妹を亡くした。

2. ブロンテ初期作品と先行研究

ブロンテ姉弟の初期作品はシャーロットが 10 歳から 24 歳まで、ブランウェルが 9 歳から 31 歳までに書いた作品群を指す。彼らは互いの原稿を読み合いながら切磋琢磨して物語を紡ぎだした。アフリカに建国された架空の王国グラスタウン連邦を舞台にした物語は「グラスタウン物語」(‘Glass Town Saga’) と呼ばれ、アングリア王国を舞台にした作品は「アングリア物語」(‘Angrian saga’) と呼ばれている。これらの架空の国に、19 世紀初頭のイギリス社会と植民地主義をそのまま移動させ、空想政治劇を繰り広げた。シャーロットとブランウェルは互いの作品を読み合う事で影響を与え合い、それぞれが新たな登場人物やプロットを加えて物語世界を作り上げていった。⁷

ブランウェルが造形したヒーローはナポレオンをモデルとしたアレグザンダー・パーシー (Alexander Percy)、別名エルリントン卿 (Lord Ellrington)、ノーザンガーランド伯爵 (Duke of Northangerland) であり、もとはロウグ (Rogue)⁸ という名の海賊であったが、地位と共に名称も変遷し、通商大臣や陸軍元帥などに出世した。パーシーのライバルとしてシャーロットは初代ウェリントン公爵 (Duke of Wellington) をヒーローにし、その息子であるアーサー・ウェルズリー (Arthur Wellesley)、別名ドゥアロウ侯爵 (Marquis of Douro)、後のザモーナ公爵 (Duke of Zamorna) を生み出した。パーシーとザモーナはアシャンティ人⁹やフランス人との戦いで共に勝利を収め、パーシーの娘メアリ (Mary Henrietta Percy) はザモーナの妻となり、ザモーナ国王とノーザンガーランド首相が誕生する。その後、アングリア国の覇権をめぐりノーザンガーランドが様々な反逆を企て、ザモーナは一度は窮地に立たされるが、最後にはノーザンガーランドが破れ、ザモーナの慈悲により死刑を免れ生きながらえる。

ブロンテ初期作品の存在について最初に知ることとなったのは、ギヤスケルであった。シャーロットが亡くなって数か月足らず後、パトリックは亡き娘の伝記執筆をギヤスケルに依頼した。承諾したギヤスケルは執筆に際し、寡夫アーサー・ベル・ニコルズ (Arthur Bell Nicholls, 1819-1906) から大量の原稿が入った包みを受け取った。ギヤス

⁷ エミリとアンも当初は「グラスタウン物語」の創作に参加していたが、シャーロットが 1831 年にロウ・ヘッドの寄宿学校に入学したことをきっかけに二人は独立し、1834 年頃から「ゴンダル物語」(the Gondal saga) を書いた。現存する原稿は 4 年毎に書かれた 6 つの ‘Diary Papers’ と詩作品である。

⁸ ロウグ (rogue) は悪漢を意味するが、ブランウェルは一貫して[R]ogue と誤表記している。

⁹ 西アフリカの現在のガーナ地域に住むアシャンティ人は、17 世紀末にアシャンティ王国を築き繁栄したが、1901 年に英国植民地軍に敗れた。

ケルが『シャーロット・ブロンテの生涯』(*The Life of Charlotte Brontë*, 1857)においてシャーロットの初期作品について初めて言及し、その存在が読者に認知されたものの、本格的な学術研究がなかなか進まなかった最大の要因はオリジナル原稿の散逸にあった。1861年にパトリックが死去した後、ニコルズは初期作品及び書簡の束を故郷アイルランドに持ち帰った。その後それらの原稿は収集家たちの目に留まり、中でもジャーナリストの Clement Shorter に購入依頼をした書誌学者の Thomas James Wise は、筆写後に編集した原稿を高額で出版し、オリジナル原稿を切り売りして利益を上げた。その結果、オリジナル原稿は収集家の手によりアメリカやヨーロッパに散逸し、その一部はアメリカの図書館に収められているが、個人が所有する未だ回収不能な原稿が多数存在している。¹⁰

ニコルズから原稿を入手した Shorter は、書簡を中心に編纂した *Charlotte Brontë and Her Circle* (1896) を出版した。その後、ギaskellの『シャーロット・ブロンテの生涯』の版権が切れた後、同書に収められた書簡を新たに加えて編纂を行い *The Brontës: Life and Letters* (1908) を出版した。Shorter が 1926 年に亡くなった後 Wise と John Alexander Symington は、それまで未発表であった書簡をさらに加えて、シェイクスピア・ヘッド版より *The Brontës: Their Lives, Friendships & Correspondence* (1932) を出版した。

Wise は晩年初期作品の編纂に取り掛かるが、編集作業は難航した。原稿の大きさが小さいことに加え、豆粒のような小さな字体でびっしりと書き込まれていたためである。中にはファクシミリ版もあり、原稿の転写は一部に限られた。既出の書簡の他、シャーロットとブランウェルの初期作品を収録した *The Miscellaneous and Unpublished Writings of Charlotte and P. B. Brontë* (1936-38) の編纂に Wise は着手したが、志半ばで逝去し、また編集者の交代もあったため、全 2 巻の約 3 分の 1 がファクシミリ原稿そのままとなってしまう。しかしそこには、姉弟が子どもの頃に書いた目を見張るような生々しい筆跡

¹⁰ 2019 年 11 月にフランスで開催されたサザビーオークションで、ブロンテ博物館はオリジナル原稿を競り戻した。落札したのはマッチ箱ほどのサイズで little book (豆本) と呼ばれ、シャーロットが 14 歳の時に書いた 'Young Men's Magazine' の第 2 シリーズ 6 作品のうちの一つである。所在が不明であった最後の 1 作品については、William Law が所有する Honresfield Collection に含まれていたことが判明し、Friends of National Libraries (大英図書館やスコットランド国立図書館等の国立図書館を支援する慈善団体) が Law のコレクションを 2022 年に買い取った際に、大英図書館、リーズ大学ブラザートン図書館、ブロンテ博物館による 3 館合同所蔵となった。この他にもシャーロットの豆本 ('Visits in Verdopolis') や 18 通の書簡、エミリーによる 31 篇の詩集、ブランウェルがコールリッジに送った 2 通の手紙なども合同所蔵となり、ブラザートン図書館にて 2023 年に一般公開された。

が残されており、一般読者はおろか、研究者にとっても判読が極めて困難な作業であることを如実に物語っていた。

シャーロットの初期作品研究は、Fannie Ratchford が *The Brontës' Web of Childhood* (1941) において初めて本格的に行い、初期作品が後の小説に与えた影響について考察された。日本では和知誠之助が初期作品研究に着手し、1969 年から約 10 年にわたり多くの初期作品に関する論文を発表した。これは世界的に見ても、日本の研究者の初期作品に対する関心が早くからあったことを示している。その後 Alexander がより詳細な研究を行い、イギリス各地やアメリカに渡った多くの初期作品の原稿の所在を突き止め、筆写し、文法や符号を修正し一般読者でも読めるような状態で初期作品集を編纂、出版した。以後現在に至るまで、Alexander が初期作品研究を牽引してきたと言っても過言ではない。Alexander は 1983 年と 1991 年に『シャーロット・ブロンテ初期作品集』全 2 巻 3 冊 (*An Edition of the Early Writings of Charlotte Brontë, 2 vols*) を出版したが、最終巻である第 3 巻 ('The Angrian Legend: 1836-1839') の出版は難航し未だ出版されていない。¹¹日本では、1997 年にブロンテ全集の第 11 巻『アングリア物語』においてシャーロットの初期作品及び中編小説が多数翻訳された。岩上はる子が Alexander の研究書翻訳を手掛け、1998 年に『ブロンテ初期作品の世界』を出版する他、初期作品の翻訳や書簡研究も行い、日本の研究者たちを啓蒙した。2017 年にはブロンテ研究史において初の、シャーロットの初期作品研究のみを扱った研究書 (*Charlotte Brontë from the Beginnings*, edited by Judith E. Pike and Lucy Morrison) が出版され、初期作品研究に対する関心の高まりを示している。

一方ブランウェルの先行研究については、Ratchford がシャーロットの作品を論じる際に副次的に触れたのが始まりであった。その後 Du Maurier (1960) と Gérin (1961) は相次いでブランウェルの伝記を出版し、初期作品の分析も取り入れ、長年にわたる過小評価から彼を救おうと試みた。Tom Winniffrith は 1980 年代に詩作品研究を行い、またブロンテ博物館の館長として長年勤め豊富な知識を持つ Juliet Barker は、『ブロンテ家の人々』(*The Brontës*) を 1994 年に出版し、ブランウェルの初期作品を多角的に捉え伝統的な批判から救った。

¹¹ Alexander によれば、現在詩の編纂が行われており、数年以内に出版される予定である。

シャーロットの作品を論じる際の副次的なテキストとして解釈するのではなく、作家としての彼の作品研究に真正面から取り組んだ Neufeldt は、『ブランウェル・ブロンテ詩集』(*The Poems of Patrick Branwell Brontë*, 1990) を出版した後、書簡を除く 1827 年から 1848 年までの作品を収めた『ブランウェル・ブロンテ全集』(*The Works of Patrick Branwell Brontë*, 1997-99) を出版した。これにより、ブランウェルの初期作品の全貌がようやく明るみになった。また、Robert G. Collins は、*The Hand of the Arch-Sinner: Two Angrian Chronicles of Branwell Brontë* (1993) を出版し、散文 2 点を一般読者向けに校正した clear text を掲載し、ブランウェル作品に登場する悪魔的主人公誕生の背景について論じた。

先述したように Neufeldt の功績は、clear text ではなく diplomatic text、つまり敢えてブランウェルの文体をそのままに出版したことにある。ブランウェルの作品は、その文体に強烈な特徴がある。段落構成と句読点が殆どされておらず、ピリオドと誤解されるようなインクの染みが文中で不自然に現れる。また綴りや語法上の誤りが目立ち、とりわけ文頭が大文字になっていないことが多いため、前後の文の見分けがつきにくい。加えて、膨大な量の単語を用いて冗長的に語る習性があるため、文脈を読み誤りそうになるリスクが高い。これらの特徴が彼の初期作品評価に弊害を与えていることは否めない。しかし、Neufeldt は、綴りの誤りや句読点の癖などを読みやすいように書き換えることは、初期作品の価値を損なうものであるとし、現存する原稿そのままの形で編纂した。本稿でも、Neufeldt の diplomatic text を一次資料として用いた。¹²

日本では岩上が 2002 年にブランウェルを中心としたブロンテ初期作品研究を行い、二つの散文に関する考察及び翻訳を行ったが、これらの研究については大学紀要での論文発表に留まり、ブロンテ研究を専門としない日本の研究者には殆ど知られていない点が悔やまれるところである。ブランウェル作品の翻訳は、散文については先述したブロンテ全集『アングリア物語』において「海賊」(‘The Pirate,’ 1833) が収録され、岩上による「若者たちの歴史」(‘The History of the Young Men,’ 1830-1831) と「侵略戦争」(‘An Historical Narrative of “The War of Encroachment”’, ‘An Historical Narrative of “The

¹² du Maurier は、彼が癩癪もちであったことが文体に影響しているとし(“Second Thoughts” 156)、また Collins はブランウェルの文体を「大酒の一气飲み(‘riotous carousing’)」(*The Hand of the Arch-Sinner* 14)に喩えた。Collins は、「誤読されるくらいなら、読まれない方がまだ(“Better left unread than possibly misread”)」(“Bringing Branwell” 256)として見捨てられてきたからこそ、修正、加筆、削除までして初期作品を出版しなすべきであると訴え、Neufeldt と誌面上で論争した。

War of Aggression”、1833-1834) の翻訳の合計 3 作品のみである。詩作品については、中岡洋により 155 編の詩を翻訳した『ブロンウェル・ブロンテ詩集』(2013) が出版された。ブロンウェルの散文作品においては、その解釈の難しさから、2002 年の岩上による翻訳以降着手されていない。

その後ブロンウェル研究は国内外で下火となり、Neufeldt による全集が出版されたものの、散文に関する研究は 21 世紀に入っても遅々として進まなかった。2017 年の生誕 200 年を迎えてようやく再び論じられるようになり、英国ブロンテ協会の機関誌『ブロンテ・スタディーズ』(*Brontë Studies*) がブロンウェル特集を組み、ブロンウェルへの関心が再び高まる兆しにある。また、リーズ大学ブラザートン図書館はブロンウェルの原稿や書簡をデータベース化してオンライン上で公開しており、研究環境が整備されつつある。オーストラリアを拠点とする *Juvenilia Press* (Juliet Macmaster 設立) は、ブロンウェルの作品“The Pirate” (1838) の clear text と diplomatic text の双方を掲載した叢書を 2018 年に出版し、Emma Butcher は 2019 年に *The Brontës and War: Fantasy and Conflict in Charlotte and Branwell Brontë's Youthful Writings* と題して、姉弟の初期作品における戦争表象に関する研究書を出版した。一方国内では日本ブロンテ協会の機関誌『ブロンテ・スタディーズ』において 2017 年にブロンウェルの特集が組まれ、詩作品に関する論文が二本、散文に関する論文が一本掲載された。また同年の大会では、『ブロンウェルは第四の小説家になりえたか? ——その可能性と不可能性を探る』と題して廣野由美子が講演した。瀧川宏樹は 2019 年に『「ブロンテ・スタディーズ」におけるブロンウェル像の変遷』と題して、*Brontë Studies* に掲載されたブロンウェルに関する論文 (1895 年の創刊から 1999 年まで) の傾向分析を行った。しかし、Alexander 著『シャーロット・ブロンテ初期作品研究』のような包括的なブロンウェル研究の単著は国内外を問わず、未だ発表されていない。本論文は包括的と呼ぶには不十分であるが、ブロンウェル研究のこれからの発展の礎の一つとなるべく、ブロンテ研究史、とりわけ初期作品研究にとって微力ながら貢献できるものと考えている。

3. 伝記作家たちが描いたブロンウェル像とその変遷

ブロンウェル像の変遷について検証するために、まずは現在のブロンウェル像から考察を始めたい。Sally Wainwright 脚本・監督によるブロンテ姉弟妹を描いたドラマ、*To*

Walk Invisible がイギリスで放映されたのは 2016 年 12 月 29 日のことである。2016 年はシャーロット・ブロンテの生誕 200 年であり、それを記念して様々なイベントが催されたが、その締めくくりとして BBC が放映した。このドラマは、1845 年から 48 年という 3 年間に焦点を絞り、ブランウェルの転落と姉妹たちの作家デビューを軸に家族全体を捉えた伝記映画である。この映画の批評を書いた Edwin John Moorhouse Marr は、ブランウェルの演出について、「彼女[Wainwright]はブランウェルを同情の余地が無い怪物に見立てようとはしなかった。＜中略＞アダム・ナガイティス演じるブランウェルは、侮蔑ではなく、ただ憐憫を誘うものであった。」（“Review” 366）と評し、ブランウェルを含んだブロンテ家の描かれ方について、高く評価した。しかし、映画公開から約 4 年後の 2022 年、Sarah E. Fanning と Claire O’Callaghan は、Wainwright の脚本はもとよりブランウェルの描かれ方が、長年にわたり受け入れられてきたブランウェル像、つまり「家族の重荷であったのみならず、彼が触れる物や人すべてに災いや不幸をもたらす厄介者」というギaskell 的言説（Gaskellian narrative）のレプリカ（焼き直し）であったと酷評した（226）。ちなみに、「ギaskell 的言説」という皮肉を込めた表現に込められているように、ギaskell が書いたシャーロットの伝記が原因で、ブロンテ家に関する様々な誤った情報や認識が植え付けられたと考えるブロンテ研究者は、イギリスでは少なくない。また同論文の結論において、「du Maurier はギaskell の描いたブランウェル像を払拭するためにブランウェルの伝記を書き、人生の転落者ではなく、才能に溢れた若者という新しいブランウェル像が今後定着するだろうと希望を託したが、その願いは未だなお実現されていない。」（239）と、訴えた。Fanning と O’Callaghan は、薬物依存症についての医学的認知がされていなかった 19 世紀初頭において、アルコール中毒がどのように芸術において描かれていたのかについて考察し、アルコールに溺れるブランウェルを演出する上で問題点を数多く指摘したうえで、斬新な研究と言える。

最新のブランウェル研究において未だなお幾度となく登場するギaskell、du Maurier、Gérin の 3 人の伝記作家たち。これら伝記作家たちによって植え付けられた、ブロンテ家にとっての厄介者としてのイメージが、ブランウェルの初期作品の研究価値を測る際に弊害だと捉える研究者は少なくない。本節では以下、ブランウェルの受容について考える上で避けては通れない、伝記作家によって描かれてきた彼の人物像について比較考察する。取り扱う作品はギaskell の *The Life of Charlotte Brontë*（1857）、Gérin の

Branwell Brontë (1961) である。¹³彼らが描いたブランウェル像を比較考察し、それぞれの伝記が書かれてから 170 年、また 60 年以上経った現在、ブランウェルの受容がどのように変化しつつあるのかについて考察したい。

(1) Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (1857)

1855 年 6 月、パトリックはギaskellに手紙を書き、自分と義理の息子であるニコルズに代わって娘シャーロットの伝記を書いてくれと頼んだ。シャーロットが同年 3 月末に亡くなってから二か月半後のことである。もともとは、シャーロットの親友 Ellen Nussey が提案したことであった。生前、そして没後もシャーロットを含めたブロンテ姉妹の正体に関する憶測や偏見が後を絶たなかったためである。シャーロット、エミリ、アンが男性の筆名で作品を発表していたことから、この三人は実は一人の作家ではないのか、またシャーロットはサッカレーの娘たちの家庭教師だったのではないかと、といった憶測が雑誌の批評欄に飛び交った (Easson Intro. 7)。『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847) に魅了されたギaskellは、早くから作家カラー・ベルは女性であると断言していた。1850 年 8 月、共通の知人を介して二人は初めて対面し、以来親交を深めた。シャーロットに対する批評家たちの偏見を正し、作家を汚名から救うために、ギaskellは伝記の執筆を承諾し、パトリックから依頼を受けた一か月後にはマンチェスターからハワースに向かい、シャーロットの書簡や日記など、伝記執筆に必要な資料をパトリックから受け取った。

シャーロットは、その文体の荒々しさ (coarseness) や『ジェイン・エア』における性的逸脱に関する批判にずっと悩まされていた。中でも、『クォーターリー・レビュー』

¹³ Daphne du Maurier の *The Infernal World of Branwell Brontë* (1961) も、ブランウェルの真の姿を描き出そうと書かれた伝記ではあったが、裏付けのとれない資料や伝聞、また初期作品と彼の私生活を安易に結び付けた主観的な判断が散見されることから、その目的が達成したとは言い難く、考察から外した。例えば、du Maurier はギaskellとの差別化を図るために、ブランウェルがロビンソン家から解雇された理由を、ロビンソン夫人ではなく、彼の生徒エドモンドとの関係に見出した。ロビンソン一家が避暑に訪れている間、エドモンドがブランウェルと二人で屋敷に残っていたこと、またエドモンドが避暑地に遅れて到着したその日に、ロビンソン氏がブランウェルに解雇通知を出したことから、ブランウェルがエドモンドに不適切な行為を行ったという説を、浮上させたのだ。しかし、エドモンドが避暑地に遅れてやってきたかどうかを示す証拠そのものに、確かな根拠が無いことが後に Barker により指摘された (456)。一方でブランウェルが人妻に恋をし、解雇されたのちもその恋が成就されると信じていたように、シャーロットもベルギー留学時代の恩師コンスタンタン・エジェに恋をし、帰国後も募る想いを赤裸々に綴った手紙を送っていた点を指摘した。既婚者に心を奪われていたのはブランウェルだけではなく、姉のシャーロットも同じであったという点を強調し、姉弟に共通する問題として認識した点は、画期的であったと言える。

(*Quarterly Review*) に『ジェイン・エア』の批判を投稿した Elizabeth Rigby には、シャーロット自身も反論を投稿した。ギaskellは、それまで謎に包まれていたシャーロットの生涯、また彼女が過ごしたハワースの自然環境が彼女の作風に与えた影響を浮き彫りにすると同時に、とりわけ Rigby のシャーロット批判を論破し、作家の名誉を回復しようと努めた。

1857 年 3 月出版当初は称賛されたが、その後ブランウェルを誘惑したとされた女性(ロビンソン夫人)の不適切な扱いに関する記述をめぐり、ロビンソン夫人の弁護士がギaskellを訴えたことから、出版社は独自に調査を初め、翌年には問題となった箇所を削除した第 3 版が出版された。現在 Oxford World's Classics から出版されたものは、第 3 版を元に初版と第 2 版から削除されたものと照らし合わせて編纂されている。しかし Penguin Classics から 1998 年に出版されたものは、削除部分を含めた初版を元に編集されており、現在も流布されている。

ブランウェルのスキャンダルに関して初版で批判を受け、削除された箇所は第 13 章の 2 カ所である。ブランウェルがロビンソン氏から解雇の通知を受け取った時の様子と、ロビンソン氏が亡くなったあとの様子を、ギaskellは想像を交えて語った。ギaskellはシャーロットが弟の問題に苦悩を示す手紙を引用しながら、ロビンソン夫人はブランウェルを苦しめただけでなく、ブロンテ姉弟妹を早世させた原因の一端をも担っているとの見解を示した。実際の記述は以下の通りである。

[Branwell] shocked and distressed those loving sisters inexpressively; the blind father sat stunned, sorely tempted to curse the profligate woman, who had tempted his boy—his only son—into the deep disgrace of deadly crime....The case presents the reverse of the usual features; the man became the victim; the man's life was blighted, and crushed out of him suffering, and guilt entailed by guilt; the man's family were stung by keenest shame....Now let us read, not merely of the suffering of her guilty accomplice, but of the misery she caused to innocent victims, whose premature deaths may, in part, be laid at her door. (*The Life of Charlotte Brontë* 523, n. 225)

ロビンソン夫人の弁護士が出版社を訴えたのも当然のことであっただろう。一方、伝記執筆を依頼したパトリックは、数点の例外を除き、作品における描写は全て真実であると認め、繊細な女性作家のなせる業であると絶賛した。パトリックはギaskellに宛てた手紙の中で、ブランウェルとロビンソン夫人に関する記述は「傑作 (masterpieces)」であると絶賛し、次のように感謝の意を評した。

The pictures of my brilliant and unhappy son, and his diabolical seducer, are masterpieces. Indeed, all the pictures in the work have vigorous, truthful, and delicate touches in them, which could have been executed only by a skillful female hand. There are a few trifling mistakes which, should it be deemed necessary, may be corrected in the second Edition.¹⁴

パトリックの思惑通り、シャーロットの伝記を通して、ブロンテ家の名誉を回復することにギaskellは寄与したのである。また瀧川が指摘するように、ギaskellは「ブランウェルの墮落の一因を、男性に対する当時の周囲の盲目的な信頼や甘やかしに見出しており、この点でブランウェルを社会の犠牲者とみなし弁護している」（『シャーロット・ブロンテの生涯』における男性像」74）点も注目に値する。しかしギaskellが描いたブランウェルの不祥事は、その後の彼の人物評価に影を落とし続けたことは否めない。というのも、ギaskell以降の伝記作家たちは、より詳細な調査や資料をもとに考察を試みて彼の生涯の全体像について迫ろうとしたが、最終的にはギaskellが描いたブランウェル像の誤謬を正すことに主眼が置かれていたからである。ギaskellの『シャーロット・ブロンテの生涯』は、いわばその後続く彼の伝記作家たちにとっての、たたき台であったのである。

ブランウェルに関する新たな証拠が出てくるたびに意見が変わる状況について瀧川は、「何が真実であったのかを断言できないために、様々なブランウェル像が錯綜しているということこそが、人々のブランウェルへの関心を支えてきた」（「ブランウェル像の変遷」34）と考察する。伝記作家によって様々な事実が明らかにされたことにより、彼に対する評価が多少なりとも上がった一方で、逆に彼の波乱万丈な人生、自業自得と一蹴される

¹⁴ Elizabeth Gaskell, "The Reverend Patrick Brontë and Mrs. E. C. Gaskell" p. 126-7.

放蕩や墮落が明るみになり、彼が家族にとっていかに厄介者であったかが強調されることとなった。そしてその状況は、BBC 製作によるドラマ *To Walk Invisible* (2016) におけるブランウェル像においても顕著であるように、今も殆ど変わっていないのである。

(2) Winifred Gérin, *Branwell Brontë* (1961)

イギリス人の両親のもとドイツのハンブルグで生まれた Gérin (1901-81) は、子ども時代をドイツで過ごし、ベルギー人の夫と結婚した。第二次世界大戦中はイギリス外務省の政治情報機関で働いた。1945 年に夫が亡くなったのち、兼ねてから愛読していたブロンテの故郷であるハワースに移り住み、ブロンテ家の 4 人の作家それぞれの伝記を出版した。¹⁵ その伝記作家としての功績が近年注目され、2022 年には Gérin に関する伝記が出版され注目を浴びた (*Winifred Gérin: Biographer of the Brontës*, Helen MacEan)。

Gérin は序文において、ブランウェルの作品の全貌が明らかにされておらず、その一部が出版部数の少ないごく限られた研究書で取り上げられ、しかもそれらが特定の図書館や私蔵のコレクションでしか見ることが出来ないことから、その全体を読者の目に触れさせることが、彼の落胆の人生を理解する上で必須であると考えた。そのため、ブランウェルの作品の引用を数多く用いた。

また Gérin は人生の後半をハワースに住み、ブロンテ家の人々が見た風景やヒースの自然環境に身を置きながら、ブランウェルの初期作品を丁寧に読み解きつつ、その人物像を浮き彫りにした。ブランウェルに特化した伝記としては一番情報量が多いが、それでも du Maurier の伝記と同様、引用参考文献などの基礎的資料の情報が不足し、伝聞による記述が多い点に問題があることは否めない。また、Gérin はギaskell と同様に、あるいはもっと露骨な表現でロビンソン夫人を加害者に仕立て上げ、ブロンテ家に不幸をもたらした悪の根源を招いたのがブランウェルであったことに彼の最後の悲劇があると、ブランウェルを擁護しつつも聊か感情的な結論を導いた。

¹⁵ *Anne Brontë* (1959) ; *Branwell Brontë* (1961) ; *Charlotte Brontë The Evolution of Genius* (1967) ; *Emily Brontë* (1971) また、ハワースで再婚した夫である John Lock もブロンテをこよなく愛し、Canon W T Dixon と共に、パトリックの伝記 *A Man of Sorrow: The Life, Letters, and Times of the Rev. Patrick Brontë, 1777-1861* (1979) を執筆した。

It must remain a moot point whether the Brontës might not have lived into middle age if grief had not stood so early at their door. And it was Branwell's final misfortune that he it was who let the enemy in. (305)

しかし、Gérin は、それまで誰も明らかにしてこなかったブランウエルの新たな側面を数多く提供した点において評価され、その後の研究においても今なお頻繁に引用されている。Gérin は、ブランウエルが住んでいた場所、勤め先、また訪れた場所の全てに足を運び、また親友や雇主の子孫にも直接会い、聞き取りを行った。ロビンソン家で働く使用人や医師に関する新たな史実の他、ロビンソン氏が記録した会計簿から細かな支出項目を全て洗い出し、ブランウエルと夫人との関係に何があったのかについて、客観的証拠となりうるものを入手した。これは現在では *Robinson Papers* と呼ばれており、ブロンテ博物館で保管されている。その他、それまで明らかにされていなかった鉄道駅事務員として働いていた時代の彼の様子を、部分的にはあるが読者に提供したことは、ブランウエル研究史における功績であると言える。

また Gérin は、Layland、Grundy、Wise と Symington が著した回想録に取材し、ブランウエルがラデンデン・フット時代やロビンソン夫人との関係について友人に綴った書簡を引用して、ブランウエルが当時何を考えていたかを知る手がかりを提供した。その一方で、du Maurier と同様に、ブランウエルの初期作品の中に、伝記的事実の説明を求めようとした。彼が最後に書いたとされる未完の作品「そして疲れし者は眠りについた」(‘and the weary are at rest,’ 1845) の粗筋を6頁強にわたり丁寧に解説し、サーストン夫人と彼女を誘惑するアレグザンダー・パーシーに、ロビンソン夫人とブランウエルの姿を見出そうとした。初期作品と伝記的事実は混同されるべきではないが、ブランウエルの作品はその全体が初期作品であり、彼の文体に強烈な個性が現れていることから、作品イコール彼個人の生活や思考を反映したもの、と短絡的に結び付けられる傾向がある。伝記作家が、作品と作家の人生を容易に結び付けられる伝記的題材が「そして疲れし者は眠りについた」にはあったという点と、伝記的事実と書かれた時期が重なり合っていたことも、関係していたのであろう。

Alexander は、「シャーロットの原稿を彼女の人生の解説書として読むことは、事実ではなく、空想を生み出す」と指摘する一方で、伝記的な題材が初期作品および後の作品に

果たす大きな役割についても無視することはできないと付け加える（*EW* 186）。同じことがブランウェルの作品についてもいえるだろう。初期作品の中に、ブランウェルの私的な心情を読み取ることは危険ではあるが、作品を理解するうえで、伝記的側面を完全に無視することもできない。そのことを踏まえて、ギヤスケル、du Maurier、Gérin ら三人の伝記作家が残した負のイメージを払拭し、長年にわたる過小評価からブランウェルを救ったのが、長年にわたりブロンテ博物館の司書、及び館長を務めた Barker であった。岩上が指摘するように、ブロンテ家を個々の孤立した存在としてではなく、固く結ばれた家族集団として見たのが Barker の『ブロンテ家の人々』であり、ブロンテ家の伝記の決定版と称賛された。ブランウェルについては、特にロビンソン夫人との関係の真相究明に力を注ぎ、親友 John Brown に宛てて書いた手紙など新たな証拠を入手するなどし、du Maurier や Gérin の主張の誤謬を証明しながらも、擁護すべき点は援用し、ページ数をかなり割いて分析を行った点が評価されている。

しかし、ブランウェルを擁護する研究者は現在も一部にとどまっている傾向がある。ブランウェルのように一度も作家として作品を出版できなかった（地元新聞紙への詩の掲載を除いて）無名の青年が書いた初期作品に対する軽視、またその青年を風評から救おうと試みた伝記作家たちにより、なお一層明るみにされた彼の私生活に関する様々な事実や憶測、これらがブランウェルの作品研究が遅々として進んでいない最大の理由である。その一方で僅かながらではあるが、彼の作品について論じた論文件数が国内外において増加傾向にあることも確かである。ブランウェル研究は、ブランウェルの擁護と同一視されがちであるが、人物に対する擁護を行うのではなく、彼の作品分析を通して妥当だと思われる評価或いは批判を下すことが、本研究の主眼である。

4. 各章の構成

第1章「ブランウェルの地理的好奇心——19世紀地政学と植民地主義からの影響」では、ニジェール川の流路解明が英国植民地主義にもたらす意義について、19世紀初頭の人々が高い関心を寄せていたことが、ブランウェルの物語における地理的造形と作図した地図に表出されていることを明らかにする。グラスタウン物語を構築する際にブランウェルが描いたアフリカ西海岸を基にした架空の地図は、1826年6月号の『ブラックウッズ・マガジン』に掲載された地図に起源があると考えられている。机上の地理学者と呼ばれる

ジェイムズ・マックイーンの西アフリカの地図と、ブランウェルのグラスタウン連邦国の地図とを比較考察することにより、ニジェール川の流路解明が 19 世紀地政学また英国植民地主義にとっていかに重要な課題であったかが、ブランウェルの地図に表出されていることを明らかにする。

第 2 章「「海賊」——母マライアの文学的遺産と海上情勢への観察力」では、海賊表象の過渡期にあった 19 世紀初頭に、ブランウェルが海上情勢に思いを馳せていたことを明らかにし、その想像力がイギリスから海を隔てたアフリカ大陸に留まらず、さらに遥か向こうのインドにまで及んでいた可能性について示唆したい。ブランウェルの母マライア・ブロンテの出身が海賊の巣窟とも呼ばれたペンザンスであることから、マライアの父母やペンザンスの風土、読書歴などの伝記的事実や彼女が書き残したものにも触れながら、ブランウェルが 15 歳の時に書いた作品「海賊」を母が息子に残した文学的遺産の一つとして捉える。海賊表象の転換期に書かれ、英国帝国主義を海上で支えた海賊船や私掠船の役割や違いについて、当時の書物や雑誌に取材した本作品の根底には、海上情勢に対するブランウェルの鋭い観察力や洞察力があったのである。

第 3 章「弟が姉に与えた影響——兄弟間の確執のモチーフ」では、ブランウェルの「羊毛は高騰する」に描かれた兄弟間の確執のモチーフを、姉弟が共に物語を紡ぎ合った初期作品時代の証として捉え、モチーフの変容を考察することにより、ブランウェルが姉に与えた最も顕著な影響の表れであることを明らかにしたい。扱う作品は、ブランウェルの「羊毛は高騰する」及び「陸軍元帥アレグザンダー・パーシー閣下の生涯」の 2 作品、またシャーロットの「呪文」、「ザモーナ公爵」、「アッシュワス」及び『教授』の 4 作品である。ブランウェルとの共作時代に生れた廃嫡する父親像に端を発し、兄弟間の確執のプロットをシャーロットが大切に育み続け、作家として成功した後の作品においても、これら一連のプロットを描き続けた理由は何であったのかについて迫る。

第 4 章「「羊毛は高騰する」における羊毛投機の表象」では「羊毛は高騰する」についてさらに深く考察していくことにする。本章では、「羊毛は高騰する」とその草稿の断篇を分析することにより、ヨークシャーの羊毛産業に早くから着目し、羊毛業に携わる職人の労働環境や、原料である羊毛の調達方法や高騰する羊毛への投機熱というミクロな視点から、当時の人々の暮らしを描き出そうとしたブランウェルの着眼点を明らかにする。また、信憑性の高い語りを目指しつつ、読者の「読み」を軌道修正するために作品に介入す

る語り手についても考察し、シャーロットの小説『シャーリー』の語り手と酷似する箇所を比較検討する。語りの不安定さがあるものの、本作品は初期作品の中でも簡潔で分かり易く、一般受けしうる娯楽性の高い作品であることを明らかにしたい。

第5章「「アングリシアとアングリシアの人々」——戦争小説の模倣と家畜商に見る社会変化」では「アングリシアとアングリシアの人々」の戦争小説としての側面と、語りの脱線に潜むものについて迫りたい。「アングリシアとアングリシアの人々」は、ブランウェルが書いた散文の中で最も長文の作品である。先行研究を踏まえ、当時隆盛していた戦争手記小説の模倣として読み解くだけでなく、ブランウェルの戦争小説の娯楽的側面についても明らかにし、戦争について語りまた読むことがイギリスの中流階級の人々にとって娯楽の一種として捉えられていたことが、本作品に表出されていることを明らかにしたい。また語りの脱線についても触れ、19世紀初頭の農業革命により社会に変革が起きた様を、家畜商の表象を通して物語に描いたこと、そしてその表象がエミリの『嵐が丘』のプロットにも影響を与えていた可能性についても示唆する。

第6章「アングリシアの先を目指して——「そして疲れし者は眠りについた」」では、ブランウェルが、アングリシアの世界から決別するべく書いた「サーストン」と最後の散文「そして疲れし者は眠りについた」を比較考察し、とりわけエミリの作品にブランウェルの文学的遺産が垣間見られる点について示唆したい。また家畜商については、アングリシアの世界から現実世界にまで及ぶブランウェルの作品の重要なモチーフであり、産業革命や農業革命による職業の変化について、ブランウェルがどのように捉えていたかが作品に反映されている点について考察する。さらに「そして疲れし者は眠りについた」では、偽牧師によるメソジスト説教の語りの脱線が物語の重要部分を占めていることから、メソジスト宗教運動が社会に与えた影響と、ブランウェルがそれをどのように風刺の対象として扱っていたかについても明らかにする。

これらの考察と分析を通して、ブランウェルの作品を、激動する19世紀の社会、経済、また宗教における変革を映し出す鏡として捉え、彼の作品の文学的価値について証明する。

第1章

ブランウェルの地理的好奇心——19世紀地政学と植民地主義からの影響

本章では、ニジェール川の流路解明が英国植民地主義にもたらす意義について、19世紀初頭の人々が高い関心を寄せていたことが、ブランウェルの物語における地理的造形と作図した地図に表出されていることを明らかにする。

ブランウェルとシャーロットが創作過程において、『ブラックウッズ・マガジン』や『フレイザーズ・マガジン』(*Fraser's Magazine for Town and Country*)などの雑誌から影響を受けていたことは、Alexander や Carol Bock により既に指摘されてきた。¹⁶ またブランウェルは、先述したようにホッグの逝去後『ブラックウッズ・マガジン』の投稿者を志願して手紙を送るほどに、同誌に傾倒していた。創作のごく初期から『ブラックウッズ・マガジン』の記事をパロディ化し、その熱愛ぶりは、‘Branwell’s Blackwood’s Magazine’を創作するほどであった。

グラスタウン物語を構築する際にブランウェルが描いたアフリカ西海岸を基にした架空の地図は、1826年6月号の『ブラックウッズ・マガジン』に掲載された地図に起源がある、と最初に指摘したのはGérinである。この地図の作図者は、西インド諸島の農場経営者、奴隷制度支持者、またコロニアル銀行やロイヤル・メール・スチーム・パケット・カンパニーの設立の貢献者であるジェイムズ・マックイーン (James MacQueen, 1778-1870) である。彼は、机上の地理学者 (armchair geographer) と呼ばれ、自らは実際に現地へ足を運ばず、探検家たちの報告書や自身が経営していた農場で働くアフリカ人からの聞き取りをもとに、ニジェール川の流路をかなり正確に表した地図を描いた。¹⁷ また、『ブラックウッズ・マガジン』を始め、雑誌や新聞に数多くの論評や意見書を投稿し、掲載された。¹⁸

¹⁶ Christine Alexander, “Readers and Writers: *Blackwood’s* and the Brontës”; Carol A. Bock, “Authorship, the Brontës, and *Fraser’s Magazine*: “Coming Forward” as an Author in Early Victorian England” and *Charlotte Brontë and the Storyteller’s Audience*.

¹⁷ マックイーンがニジェール川の流路解明にエネルギーを注いだのは、奴隷制度廃止論に揺れ動く中、奴隷貿易に依存した農場経営に代わるビジネスモデル、つまり西アフリカ内奥における商業上の利点について広く世間の注目を集めようとする思惑があったと考えられている。(Withers 178)

¹⁸ 『ブラックウッズ・マガジン』に掲載されたマックイーンの記事の数は12、その他の出版物は地図も含めて25に上る (Lambert 274-6)。

Gérin の指摘以降、ブランウェルの地図に影響を与えたのはマックイーンであるとこれまで考えられてきたが、マックイーンの地図の中に描かれたニジェール川の二つの流路について、ブランウェルの地図にも描きこまれている可能性があることについては、これまで指摘されてこなかった。¹⁹ニジェール川の流路についてはマックイーンの流路に疑問を抱き、地理学者であり当時のアフリカ探検の指揮者でもあったジョン・バロー (John Barrow, 1764-1848) の流路をブランウェルが採用していた可能性があることを検証し、ニジェール川の流路解明が 19 世紀地政学また英国植民地主義にとっていかに重要な課題であったかが、ブランウェルが作図した地図に表出されていることを明らかにする。

その次に、‘Angria and the Angrians’を中心に、ニジェール川が初期作品においてどのように描きこまれているかについて考察する。バローに対するマックイーンの勝利宣言が『ブラックウッズ・マガジン』に掲載された後の 1831 年以降、ブランウェルの散文や詩にニジェール川が何度も登場することから、彼の作品におけるニジェールを含めた川の表象を検証し、作品におけるその役割について分析する。探検家や地理学者が流路解明に多大な労力と時間を要したニジェール川が、最終的に大西洋に流れ出る様は、ブランウェルの途切れることの無い文学的想像力が、大海へと流れ出る様子と重なり合うのである。

1. ブランウェルと *Blackwood's Edinburgh Magazine*

1817 年に創刊された『ブラックウッズ・マガジン』は、『エディンバラ・レビュー』(*Edinburgh Review*) のライヴァル誌として、若手トーリー党派たちからの寄稿を多数掲載し、ホイッグ党に対する辛辣な批判や風刺が話題を呼んだ。1825 年以降は連載小説や文学批評も多数掲載し、スコット、ホッグ、ド・クインシーらの寄稿によって、文芸雑誌としての地位も確立した。ブロンテ家では、シャーロットが‘History of the Year’で書き記したように、1825 年頃からハワースで医師をしていたドライバー氏からブラックウッズを借り始め、1818 年にまで遡って読む機会があったものと考えられる。²⁰

¹⁹ Alexander は、“Imagining Africa: The Brontës’ Creations of Glass Town and Angria” (1995) において、姉弟がグラスタウン世界を構築する際に影響を受けたであろうマックイーンの記事について詳細な考察を行い、ニジェール川の流路について当時意見が分かれていたことについても言及するものの、異なる二つの流路がブランウェルの地図に認められることについては指摘していない。

²⁰ Carol Bock, “Our Plays”: The Brontë Juvenilia.” p. 47.

Papa and Branwell are gone for the newspaper, the *Leeds Intelligencer*, a most excellent Tory newspaper edited by Mr Wood [for] the proprietor Mr Henneman. We take 2 and see three newspapers a week. We take the *Leeds Intelligencer*, party Tory, and the *Leeds Mercury*, Whig, edited by Mr Baines and his brother, son-in-law and his 2 sons, Edward and Talbot. We see the John Bull; it is a High Tory, very violent. Mr Driver lends us it, as likewise *Blackwood's Magazine*, the most able periodical there is. (*EEW*1, 4)

シャーロットが“the most able periodical”と形容した『ブラックウッズ・マガジン』に、ブランウェルがどれほど傾倒していたかを示す手がかりは、マーガレット・オリファント (Margaret Oliphant, 1828-1897) が偶然見つけた手紙にある。自身もブラックウッズの寄稿者であったオリファントは、ブラックウッズ社の社史を編纂するために、同社で資料を収集していた時に、偶然ブランウェルがブラックウッズ社に宛てた 6 通の手紙を発見した。ブランウェルが送ってから 60 年もの間ブラックウッズ社に眠っていたこの手紙を読み、オリファントはひどく感銘を受けたと同時に、ブランウェルに対する同情の念に駆られた。ブランウェルが同社に宛てた手紙と一片の詩について、オリファントは 3 巻本からなる社史の 9 ページ分を割いて掲載した。オリファントは次のような書き出しでブランウェルの手紙を紹介する。

[W]e may glance aside for a moment at an unfortunate, already too sharply indicated in literature, who was never, I think, a contributor, though this was no fault of his, since he did all that was in his power by frequent missives and impassioned appeals to become so. His poems, alas! were neither printed nor returned. I find them pathetically imploring a hearing, folded up in the old covers, post paid, and costing—it is difficult to make out how much: 2s. 2d., 1s/11d.—more than poor Branwell Brontë could afford to pay. I hope they were at least read, and that he was informed of their rejection; but even this is not sure...; but the whimsical yet tragical letters which accompanied them must, I fear, have appeared ridiculous to our clear-headed publishers. (177)

オリファントが発掘したブランウェルの手紙は、ブランウェル研究にとって大発見であったが、その一方でブランウェルに対する偏見や誤解を招くこととなる。オリファント自身も、彼が出版社に送った詩作品については多少なりとも評価を示しつつも、「ブランウェルの気まぐれで且つ悲哀さえ感じる手紙は、聡明な出版者たちには馬鹿げていると思われたのではないか」と述べている。ブランウェルは『ブラックウッズ・マガジン』の投稿者になりたいとの一心から、ホッグの逝去後に自己推薦文と詩‘Misery’を始め、複数の手紙をブラックウッズ創始者の息子に送った。それらの一部抜粋は以下の通りである。

Now, sir, to you I appear writing with conceited assurance: but I am not; for I know myself so far as to believe my own originality, and on that ground to desire admittance into your ranks....All, sir, that I desire of you is: that in answer to this letter I would request a Specimen or specimens of my writing, and I even wish that you would name the subject on which you would wish me to write. (December 1835)²¹

The affair which accompanies my letter is certainly sent for insertion in ‘Blackwood’ as a Specimen which, whether bad or good, I earnestly desire you to look over.... (8th April, 1836)²²

Now, sir, all I ask of you is to permit this interview, and in answer to this letter to say that you will see me, were it only for one half-hour. (9th January 1837)²³

残念ながらこれらの手紙に対して採用の可否を示す返信もなく、また彼の原稿も返却されなかった。これらの手紙のトーンについて、Alexander は“bombastic [or] swaggering tone” (“Readers and Writers” 55) であるとし、そのトーンこそが、『ブラックウッズ・

²¹ Oliphant 178-9

²² Oliphant 180

²³ Oliphant 181

マガジン』からの影響そのものであり、また同誌が読者との一体感を産むことに成功した証であると述べた。裏を返すと、彼の手紙は投稿者として自己推薦するには余りに不適切な文体であり、現実世界と仮想世界が混在する彼の語り口は、皮肉なことに『ブラックウッズ・マガジン』の否定的な影響の表れであるとした。彼の願いが叶えられることはなかったが、『ブラックウッズ・マガジン』はブランウェルにとって想像力の源であり、外の世界に対する多大な好奇心を生み出し、その好奇心が彼の想像力を掻き立て、初期作品を書き続ける原動力となったのである。

2. 'Branwell's Blackwood's Magazine'

『ブラックウッズ・マガジン』の記事から受けた影響が顕著に表れている初期作品について、Neufeldt 編纂のブランウェル全集第 1 巻を中心に考察してみたい。そもそも、ブロンテ姉弟妹が物語を創作するきっかけは何だったのか。それは、先述したように 1826 年 6 月 5 日、9 歳の誕生日をまもなく迎えるブランウェルに父パトリックが贈った 12 個の兵隊人形にあった。4 人の子どもたちはそれぞれが演じる人形を選び、「若者たちの劇」('Young Men's Play') という劇を即興で演じて遊んだ。「若者たちの劇」に登場する 4 人の英雄たちは、西アフリカに架空の国グラストウンを建国し、統治者となって国を分割した。統治者は歴史上の人物をモデルとしており、シャーロットはアーサー・ウェリントン、ブランウェルはナポレオン・ボナパルト (Napoleon Bonapart)、またエミリとアンは二人の探検家、ウィリアム・パーリー (William Parry) とジョン・ロス (John Ross) を演じた。即興劇から始まった創作活動は、やがて、物語へと発展していき、紙に記録された。これらの初期作品の原点ともいえる作品は、小さな兵隊人形のために創作、また製本されたことから、後に通称「豆本」('miniature books' または 'little books') と呼ばれた。²⁴

現存するブランウェルの最初の物語は、1827 年 3 月 12 日に書かれた「バテル・ブック」('Battell Book') だと考えられている。この物語は 8 ページからなり (5.8cm×6.8cm)、戦闘場面を描いた 5 枚の水彩画と 1 枚のアメリカ地図を含む。「Battle of Washington (1814 年 8 月末のワシントンの戦い) は、9 月 12 日に戦われ、イギリス率いる連合軍

²⁴ 当初は切手ほどの大きさであった豆本は、やがて四つ折り版へとサイズが変わったが、豆粒のような文字の大きさは変わらなかった。

221,000 人の兵士はアメリカ率いる連合軍 304,000 人の兵士と戦った。イギリスの将軍は「スニーキーとウェリントン」とのみ書かれたこの物語は、1821 年 4 月に『ブラックウッズ・マガジン』に掲載された“Campaigns of the British Army at Washington, &c.”の記事に影響を受けて創作された（*Works* 1: 1）。

その後ブランウェルは 10 歳から 11 歳にかけて‘Branwell’s Blackwood’s Magazine’を書いた。1829 年 1 月、5 月、6 月、7 月と 4 冊書いたとされるが、現存するのは 3 冊のみである。これらの 4 センチ四方ほどの豆本には表紙や目次また広告まであり、仮想の出版、販売者名まで記載されている。6 月号の目次は 7 項目から構成され、その中には‘The Nights’という連載劇があった。‘The Nights’は、『ブラックウッズ・マガジン』に 1822 年から 1835 年にかけて連載された‘Noctes Ambrosianae’と呼ばれる、4 人の批評家たちによる文芸討論のパロディだと考えられている。‘Noctes’に登場する 4 人とは、Christopher North こと John Wilson、The Ettrick Shepherd こと James Hogg、The Opium Eater こと Thomas De Quincey、Timothy Tickle こと Robert Sym である。彼らは Ambrose’s Tavern と呼ばれる酒場でテーブルを囲んで車座に座り、それぞれが役割を演じながら文芸討論やゴシップを繰り広げる。それはまるで、ブロンテ家の 4 人の子どもたちが兵隊人形を使って役を演じながら、即興で物語を創作した様子と似ていると Bock は指摘する。²⁵

さて、ブランウェルが書いた‘The Nights’では、『ブラックウッズ・マガジン』の‘Noctes’と同じく、Braveys Inn という酒場を舞台に、ワインを飲みながら作家たちが政治経済などの社会情勢について議論を交わす。6 月号掲載の第 1 幕で登場するのは、ウェリントン卿や酒場の主人ブレイヴ（Brave）、「若者たちの歴史」でエミリが演じるパーリー、アメリカ第 7 代大統領アンドリュー・ジャクソン（Andrew Jackson）、ナポレオンの息子ルシアン・ボナパルト（Lucien Bonaparte）などであり、ブランウェル自身もヤング・スール（Young Soult）²⁶という名の詩人で登場する。第 1 幕では、男たちが集うテーブルに新聞各紙が届くところから始まり、パーリーが‘Young Man’s Intelligencer’を読み上げる。そこには、ベイニー・ライトニング（Bany Lightning）からの脅迫宣言があった。5 億ポンドを支払わなければ魔人（genii）を世界に放つというものであった。

²⁵ Carol Bock, *Charlotte Brontë and the Storyteller’s Audience* 15

²⁶ スールは「若者たちの劇」において、ナポレオンの指揮官マーシャル・スールの息子として登場する。現実世界の Marshal Soult は、半島戦争においてウェリントン将軍と戦った。

ベイニーまたはブランニイ (Brannii) はブランウェルの守護神であり、シャーロットにはタリイ (Tallii)、エミリにはエミイ (Emmii)、アンにはアニイ (Annii) という守護神がいて、物語の中で主人公を支え助ける役目を担っていた。²⁷守護神の中でも、ベイニーは破壊的な行動が目立ち、物語世界においてプロットを揺るがした。また党の抑圧をめぐる法案が可決されなかったことや、ジョンソン大統領がウェリントン卿に羊毛貿易の状況について尋ねる場面では、ナポレオン戦争後の不況で羊毛貿易が打撃を受けていた状況から、ウェリントン卿が怒りをこらえている様子が描かれている。卿の専属医師であるベイディ (Bady) は、ジョンソン大統領を殺せ、殺せ、とヤジを飛ばす。この後、第 2 幕ではウェリントン公爵の長男であるドゥアロウ侯爵や、弟のチャールズ・ウェルズリー (Charles Wellsley)、弁護士で出版社のバッド (Bud) が加わり、ドゥアロウが“The Downfall of The Genii” (魔人に滅亡を!) と叫び乾杯する。9 人が盃を飲み干し、大喝采が起こる。

その後、ジョンソン大統領が「数多の蒸気船と発明をもたらした、アメリカの自由に乾杯!」と再び乾杯をしようとするが、一同はこの祝杯には応じようとしない。最後は、魔人のタリイがバッドに送った Ossian の詩が話題になり、その一説が朗唱されて幕が閉じる。以上のように、‘The Nights’には酒を交わしながら時の政治を担う男たちが、自由に意見を交わし互いに嘲笑しあう様子が描かれている。11 歳の少年は、時の権力者の社交生活を‘Noctes’に読み取り、それを模してこの劇を書いたものと考えられる。そのほか、『ブラックウッズ・マガジン』から得たパーリーとロスによる北極探検、アメリカにおける英軍の軍事行動、フランスの政治やナポレオンの死、といった様々な話題に関するニュースを作品に取り入れ、雑誌の体裁や編集、製本も模して「ブランウェルズ・ブラックウッズ・マガジン」を作った才能は、評価されるに値するだろう。²⁸

3. ブランウェルの地図とマックイーンの地図

²⁷ ブロンテ姉弟妹は『千夜一夜物語』 (*Arabian Nights*) やリドリー・スコット (Ridley Scott) の『魔人の物語』 (*Tales of the Genii*) に登場する魔神たちから着想を得て、自らを *genii* と称し主人公たちを動かした (OCB 206)。

²⁸ ブランウェルは、詩の創作に関心が移り ‘Branwell’s Blackwood’s Magazine’ 7 月号をもって編集長を降板すると突然宣言し、シャーロットを次期編集長に任命する。この後、弟の意思を引き継ぎ、シャーロットによる ‘Blackwood’s Young Men’s Magazine’ の第 1 シリーズが、1829 年 8 月から 12 月まで毎月発行された。

1830 年 12 月から 1831 年 5 月にかけてブランウェルが書いた‘The History of Young Men’は、シャーロットの「12 人の冒険者たち」(‘The Twelve Adventurers,’ 1829) のリテリングである。シャーロットの作品と大きく異なる点は、約 3 倍の文量と、国名や領土面積などを含む、地理的な情報が多く盛り込まれている点にある。12 人の若者たちは、イギリスからアフリカへと航行し、オランダ人やアシャンティ人と戦い、奥地探検を進めながら Great Glass Town を首都にグラスタウン国を建国し、ヨーク公に代わってウェリントン公爵がグラスタウンの統治者となる、という物語である。ブランウェルは「若者たちの歴史」を書く際に、グラスタウン国の地図も描き、これによってグラスタウンの歴史的また地理的な背景を確立させた。16 ページからなるこの物語の、表紙裏に挟まれているこの地図は、色鉛筆で描かれ、現在は大英図書館に所蔵されている。

先述したように、「グラスタウン物語」を構築する際にブランウェルが描いたアフリカ西海岸を基にした架空の地図が、1826 年 6 月『ブラックウッズ・マガジン』に掲載された地図に起源があると最初に指摘したのは Gérin である。

Frequent references to Mungo Park occur in Branwell’s juvenilia. More contemporary still were the explorations in northern and central Africa of Major Denham in 1822, 1823 and 1824, of which a detailed report appeared in the June issues of Blackwood’s in 1826, accompanied by a map of the district – so far as it had yet been charted – which may indeed be said to be the deciding factor in relating the “Young Men’s Play” for, as examination of the original manuscript of Branwell’s “History of the Young Men” shows, he very closely copied the map from Blackwood’s. (Gérin 31)

Gérin は、1826 年に『ブラックウッズ・マガジン』に掲載された探検報告書の書評と北アフリカ地図が、「若者たちの劇」を創作する決定的な要因であったと推論した。また、「若者たちの歴史」には、『ブラックウッズ・マガジン』に掲載された地図を詳細に模写したことが顕著に表れていると指摘した。

マックイーンの地図が『ブラックウッズ・マガジン』に掲載されたのはたった 1 度である。1822 年から 1824 年にかけてアフリカ探検に派遣されたクラッパートン、デナム、

オードニーの3人による探検報告書が1826年に出版されるや否や、マックイーンはその書評と、自作地図を同誌に投稿し、記事は同年6月に掲載された。マックイーンはこの記事において、ニジェール川とナイル川が繋がっているとするバローの見解を否定するとともに、デナムら3人の探検家たちが、ニジェール川の流路について明らかにしていないことを指摘し、自らが作成した地図を基に、ニジェール川の流路について詳細な解析を行った。

マックイーンは書評記事の中で、イギリス軍が当時拠点を置いていたシエラレオネから撤退し、ニジェール川河口にあるフェルナンド・ポーに新たに拠点を置き、そこをアフリカ植民地政策の中心にするべきである、との見解を述べた。

We have spent millions in our attempts to civilize and to benefit Africa, and hitherto we have failed, TOTALLY FAILED....Teach us to remove for that fatal spot[Sierra Leone], to a place like FERNANDO Po, where health and safety dwell, and where, commanding the outlets of the *Niger*, Great Britain would COMMAND the trade, the improvement, and the civilisation of all Northern Central Africa. (MacQueen, 708)

当時シエラレオネでは地理的、気候的な悪条件から疫病が流行し、多くの兵士が命を落としていた。それに比べて、フェルナンド・ポーは気候もよく、ニジェール川河口から内奥に向けて航路が確保されていることが大きな利点であった。一方、ブランウェルが描いたグラスタウンの首都ヴェルドポリスは、まさにニジェール川の河口に位置している。このことから、姉弟が創作したグラスタウンは、マックイーンが記事において主張したアフリカ植民地政策を物語世界で実践したものであるとして、オックスフォード・ブロンテ事典は次のように述べている。

The author of a Blackwood's article for June 1826 recommended that the British move their unsuccessful settlements at Freetown and elsewhere on the Gold Coast to Fernand Po at the mouth of the Niger (still disputed at the time), so that they would command the trading routes of the river and its tributaries into central Africa (Alexander *ER*, p.30). The young Brontës, not

the British Government, agreed and established Verdopolis. The map associated with this article became the blueprint for the Glass Town Federation. (344)

「イギリス政府ではなく、若いブロンテ姉弟がマックイーンの主張に同意し、ヴェルドポリスに首都を置いた」と、時の政治に姉弟が子どもながらに立派に意見したことが、誇張気味に称賛されている。マックイーンの地図がまさに、グラスタウン連邦国を生み出す際の青写真であったことを裏付ける箇所は、ブランウェルの「若者たちの歴史」の冒頭部分である。アシャンティ国とその周辺の地理的情報は、マックイーンの地図を準えた内容となっている。²⁹

ここで、二つの地図に描かれたニジェール川の流路について比較してみたい。ブランウェルの地図には、マックイーンの地図上のニジェール川の流路と同じ位置に川が描かれて、北西の方角から湾に流れ込んでいるように見える。その一方で、地図右上端には、東西に蛇行する線が書き込まれ、薄く‘Niger’と書き込まれている（図1）。³⁰緯度は異なるが、マックイーンの地図上にある、東西に流れる流路、つまりバローが示したニジェール川流路と同じルートのようなのである（図2）。つまり、この地図には二つの流路が描きこまれ、興味深いことに、ニジェール川の流路についてはマックイーンの流路を採用せず、記事においてマックイーンが批判したバローの見解を踏襲していた。海軍提督であり、『クォーターリー・レビュー』の地理部門の担当論者でもあったバローは、ニジェール川の流路をめぐり、マックイーンと紙面上で激しくやりあった。ブランウェルは、グラスタウンの地図を作製した時にはバローの考えるニジェール川の流路に軍配を上げていたのである。

²⁹ 「ギニアまたはアシャンティは、東西 1700 マイル、南北 500 マイルに及ぶ大国、あるいはいくつかの国々からなる。東はアフリカの奥地まで続く広大な砂漠に囲まれ、西方には北大西洋の海が横たわっている。南はギニア湾に面し、北ははるか彼方まで続くジブル・クマイ（月の山々）に囲まれている。」（*Works* 1: 139）

³⁰ この書き込み（‘Niger’）の筆跡鑑定について、2023 年 9 月 6 日にブロンテ博物館（ヨークシャー州ハワース）を訪ね、館長の Ann Dinsdale 氏に依頼したところ、同時期に書かれたブランウェルの初期作品原稿と照らし合わせ、ブランウェルの筆跡（姉妹のものではなく）であると証明された。



図 1. Branwell Brontë, Map of “Glass Town Federation,” 1830-1831.³¹

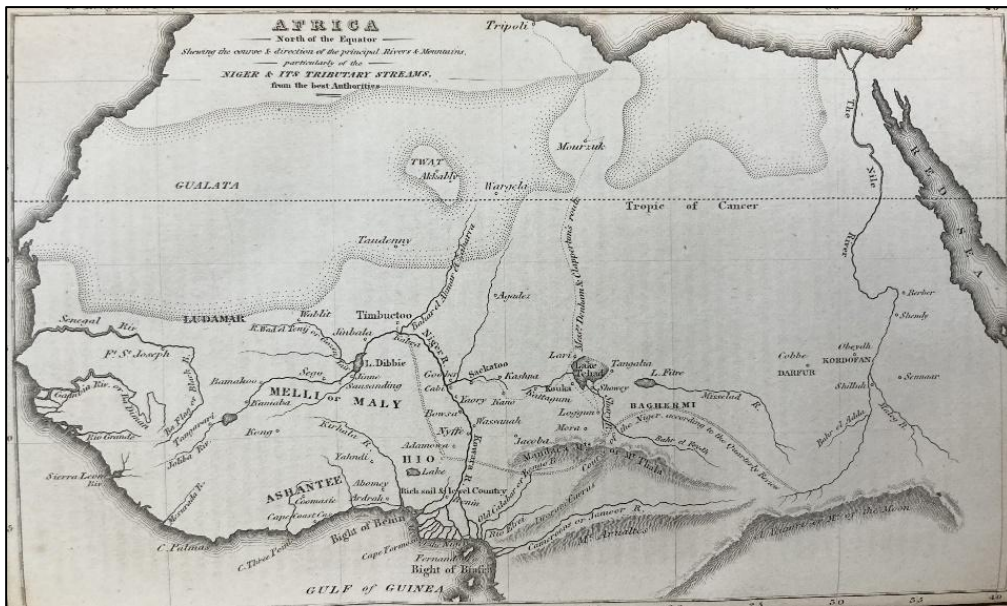


図 2. James MacQueen, Map of “Africa North of the Equator,” *Blackwood’s Edinburgh Magazine*, 1826.³²

³¹ 右側にある一番大きな島（Frenchy Land）の対岸の入り江付近にヴェルドボリスがあり、その入り江に向かって北西の方角から蛇行しながら下りてくる流路が、マックイーンが主張するニジェール川流路である。他方、地図上左上の隅に、鉛筆で‘Niger’と書き込まれ、東西に延びる川が書き込まれている。

³² バローが主張したニジェール川の流路は薄い網掛けで示され、流路の下に“*Course of the Niger, according to the Quarterly Review*”と書き込まれている。バロー案の流路は東西に蛇行しながら伸び、地図上右上のナイル川と最終的に繋がっている。

しかし、ブランウェルは 1831 年以降の作品において、マックイーンの示す流路、すなわちギニア高地から始まり大小さまざまな川と合流して、大西洋へと流れ出る流路を作品に取り入れ、ニジェール川と呼んだ。実にニジェール川は 50 回近く初期作品に登場するのである。この背景には、1831 年 7 月号の『ブラックウッズ・マガジン』においてバローの敗北宣言、つまりマックイーンの事実上の勝利宣言が述べられたことがあると推察される。バロー自身がニジェール川の終着点が大西洋であったことを認め、またマックイーンの「卓越した先見性 (extraordinary sagacity of our correspondent)」を讃える記事が『ブラックウッズ・マガジン』に掲載されたことが、ブランウェルにマックイーン的主張を信じさせる決定的な要因になったと考えられるのである。³³

マックイーンは 1826 年に発表した地図をさらに正確な地図に改変させ、1841 年に完成させた地図は、英国地理協会からアフリカ内奥を正確に示した最初の地図と称され、マックイーンの長年の宿敵であり、奴隷制度廃止論者のファウエル・バクストン (Fowell Buxton, 1786-1845) が派遣したアフリカ探検にも使われた。机上の地理学者マックイーンの偉業について、地理学者の Charles Withers は、「マックイーンは、他の証言を信用、信頼することにより、精度の高い地図を作成することに成功した」と分析し、「謂わば地図は信頼と証言の具現である」と結論付けた (189)。ブランウェルは、『ブラックウッズ・マガジン』の社会的地位と、その信憑性の高さから同誌の記事内容に信用を置き、そこから得た知識を基に自らの想像力を膨らませた。その結果、1826 年に掲載されたマックイーンのアフリカ地図をもとに物語世界における架空の地図を作成し、そこで現実世界のパロディを繰り広げたのである。しかし、『ブラックウッズ・マガジン』の投稿者自身もまた、現地調査ではなく、証言による知識を基に地図を引いた。事実、マックイーンの地図は、他の地図や報告書、また証言をもとに作られたことから、信用するに足りないと思われていた。ブランウェルが作成した架空のアフリカ西海岸の地図は、「他者の証言によって得られた知識の合成」(Lambert 25) であるマックイーンの地図から得た知識と、彼自身の想像力との融合によってできた第二のアフリカ地図なのである。ブランウェルの

³³ James MacQueen “The River Niger—Termination in the Sea.” *Blackwood's Edinburgh Magazine*. June 1826, pp. 687-709. Bock によれば、ブロンテ家は何らかの理由で 1831 年以降『ブラックウッズ・マガジン』を読むのを止め、代わりに同居していた叔母エリザベスが 1832 年から『フレイザーズ・マガジン』を講読するようになった (“Our plays” 49)。

アフリカに向けられた熱い視線には、大英帝国の海外への拡大に対する期待が反映されているのだ。

4. 初期作品におけるアフリカ地理に関する描写

先述した通り 1831 年 7 月、『ブラックウッズ・マガジン』の編集者はマックイーンの先見性を「有能な我らが投稿者の卓越した判断力」(709) と呼び、マックイーンが訴え続けたニジェール川の終着点が正しかったことを公に認めた。筆者はこの宣言の後、ブランウェルがアフリカ地理、とりわけニジェール川とその流路に対して並々ならぬ関心を寄せ、その結果、自身の地理的好奇心を彼のペルソナにも与え、アングリア物語でニジェール川に対する言及を繰り返し行っていると推察する。オックスフォード・ブロンテ事典には、ブランウェルが描いたグラスタウン連邦国に、後に建国されたアングリア国、また初期作品に登場する町や川などの名称をも書き加え、「グラスタウン・アングリア物語」の地理的イメージを視覚的に捉えた地図が掲載されている(図3)。

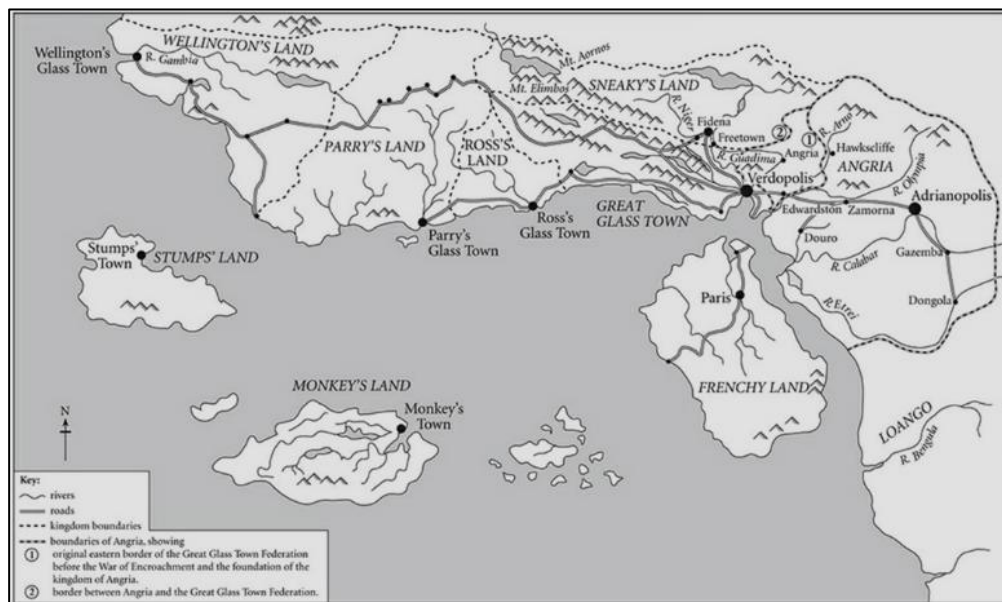


図3. Map of “The Glass Town Federation and the kingdom of Angria,” *The Oxford Companion to the Brontës*, 2006.

地図からもわかるように、ニジェール川はグラスタウン連邦と新国アングリアを隔てる境界に位置する(OCB 344)。¹ ‘Niger’という言葉は、Neufeldt が編纂したブランウェル

初期作品集の第 1,2 巻合わせて 45 回以上登場する。「イギリス人からの手紙」(‘*Letters From an Englishman*,’ 1830-1832) では、マックイーンに似たペルソナが登場する。³⁴語り手のジェイムズ・ベリンガムは、Robbers Hill (「山賊の丘」) から湧き出た源流がアフリカの殆ど全ての川と合流しながら大海と見間違えるほどの巨大な川と化し、大西洋へと流れ出る有様を説明しながら、ニジェール川の規模 (magnitude) に感嘆する。マックイーンのカニエール川の支流と規模に関する説明箇所と、ブランウェルのペルソナであるベリンガムのニジェール川の説明箇所を比較してみる。

The Niger, according to Major Laing, rises in the mountain of LOMA...it continues its course nearly east, and afterwards in a northeast direction through Lake DIBBIE....Here it is joined by a river from the north-east. From *Timbuctoo* the *Niger*...pursues its course generally south-easterly, passing *Cabi*, where it turns more to the south, passing in its course *Yaoora Boussa* (where Parl was lost), and afterwards Nyffe, and from thence downwards, as we conceive, to the Atlantic, in the Delta of Benin....[A]ll travellers describe it as a sea.

The magnitude of the rivers which enter the sea in the Delta of Benin, next deserves our attention...above TWENTY RIVERS enter the sea, all of them large, but several of them of surprising magnitude....The natives on the coast informed ROBERTSON, that “*the Bonny River* came out of a large river in the interior, which made *all the rivers* in that country.” (MacQueen 703-4)

マックイーンの記事では、Loma 山から湧き出た水が Debbie 湖を通過して北西に流れ、古代都市 Timbuctoo を通過してから東南に湾曲し、Cabi や Yaoora Boussa, Nyffe を通り抜けて南下し、デルタ地帯であるベニン湾から大西洋へと流れ出る雄大なニジェール川の流

³⁴ 「イギリス人からの手紙」は、ブランウェルが本格的に散文に取り組んだ最初の作品で、14 通の書簡で構成されている。この作品は、銀行家のベリンガムがドゥアロウ侯爵 (後のザモーナ) と共にグラスタウン連邦国を旅した時の様子を、ロンドンにいる親戚に語るという体裁の旅行記である。死体を盗んで解剖する Dr Hume Badey や牛尾棒 Pigtail などの一風変わった登場人物に加えて、Alexander Rogue が初登場する。ロウグはウェリントン公爵の軍に反乱を起こすが、処刑されるところをベリンガムが目撃する。この作品を境に、ブランウェルの関心がロウグとドゥアロウ (ザモーナ) へと移行し、ロウグというブランウェルが生涯にわたり描き続けるヒーローが生まれる。

路が描写されている。20 以上もの川が海へと流れ出る様子、また「国中の河川が集められたのがニジェール川である」と述べる現地の人々の言葉からは、想像を絶するような広大な地形や川が読者の心を掴んで離さなかったことだろう。

「イギリス人からの手紙」では、先述したアフリカの広大な地形を目の当たりにした語り手ベリンガムがニジェール川を眼前に次のように称賛する。

[M]y love of Geographical and tophographical[sic] Knowledge continued so strong that I could not pass this Noble stream without gaining some account of it from those around me. I learned that it rises in the wild regions of Robbers hill. from thence it runs 30 miles eastward to the Bloody Lake....Flowing out of this Lake it proceeds in its course to the same point. till it receives the Silsden. a river 90 miles long which runs ... to the Large City of Fidenaz. below which. it receives the Fidenaz flowing from Greygarach. From hence it takes a South East direction to its junction the fine River Denard nearly 200 miles long They two united run rapidly for 40 miles in to the all absorbing NIGER. its whole course is 352. miles & where we saw it (300 miles from its source) it was of the noble breadth of 900 yards. (*Works* 1: 197, Italics mine.)³⁵

ブランウェルは、Loma 山の代わりに Robbers 山、Debbie 湖の代わりに Bloody 湖というように架空の名前を当て、グラスタウン上にニジェール川を描いた。山や湖や都市名は変えても、ニジェール川という名前は変えなかったことから、この川に対する強い思い入れがあったことが窺い知れるだろう。また全長や川幅などに数字を加え、より具体的に描写している。この引用箇所には、語り手の地理的また地政学的な好奇心が明確に表れており、その好奇心の根底に、ブランウェル自身のニジェール川の流路解明にかける情熱が垣間見られるのである。

1833 年に書かれた‘Real Life in Verdopolis’では、暴動の血なまぐさいシーンから逃れるために、語り手はグラスタウン溪谷を横切るニジェール川に言及し、入り組んだ川べり

³⁵ 本論文で引用するブランウェル・ブロンテの作品は、すべて Victor A. Neufeldt 編纂の *The Works of Patrick Branwell Brontë* (1997-99) である。また、本稿で扱う初期作品は全て未発表作品であるため、英題についてはイタリックにせず、一重引用符、また邦題については一重鍵括弧を用いた。

まで聳え立つヤシやカシ、キラキラと輝く水面はまるで海の湾のように見えるが、実はアフリカの全ての水流が集められた川であった、と感嘆する。この箇所も、先ほど引用したマックイーンの描写における現地人の言葉 “[The Niger]made all the rivers in that country.”と相通ずる。

[W]hat at first looks like an arm of the sea but its pure glassy surface and the lofty palms and oaks intermingled feathering down to its margin at once destroy that likeness it is a vast river it is the NIGER. rolling to the Glass town the collected waters of Africa,... (*Works* 1: 276)

デルタ湾すなわちアフリカ西海岸に流れ出るニジェール川のダイナミックな地理と地形への賞賛や感嘆は、語り手ベリンガムによる散文作品だけではなく、登場人物が詠んだ詩にも存在する。同じく‘Real Life in Verdopolis’では、キャッスルリーが‘Serenade’という詩でジュリア・ウェルズリー夫人への想いをニジェール川の雄大さに喩える。

The Niger is broad and its waters unruffled.

Far through broad Afric its waves wind along

A thousand wide Kingdoms it[s] billows have watered

In history renowned and immortal in song

Rage then O Ocean and hurl thy white billows

high oer the rocks of this desolate shore

Drive shower on shower oer temple and tower

And down each dark valley thy sleety storm pour

Plains may be flooded and roads may be broken

And torrents may burst oer the travellers way

But Never O Never

Can Nigers vast river

Fall. Like, a roadbank. or rise like a sea. (*Works* 1: 313-4)

この後、別の男性が恋人にあてた詩の中でも、ニジェール川が詠われる。

Why need we fly oer Nigers. stream.

Or wander through the storm.

When I may enter, quickly here.

And clasp thee in my arm. (*Works* 1: 314)

これら詩の引用箇所では、ベリンガムが形容したように「広大で (“vast”) 高貴な (“noble”)」ニジェール川が、愛する者への愛の永続性やその大きさを譬えるのに用いられている。ブランウェルがこの川に対して特別な思いを抱いていることを示す箇所であるといえよう。

ブランウェルの作品において、ニジェール川は豊かなアフリカの自然に読者の注意を向けるために使用された。ニジェール川は、“infant fountains” (「幼子のような源泉」) (*Works* 1: 265)、“broad, unruffled” (「広大で、波立たず」) (313)、“mighty” (「力強く」) (192)、さらには “noble” (「高貴な」) (197, 328) と表象される。ブランウェルは、ニジェール川だけでなく、他の川もマックイーンの地図や記事から取り入れ、名前と地形に変化を加えて物語に取り入れた。これはブランウェル版のアフリカ西海岸の地理であり、Neufeldt はブランウェルの想像力を “fanciful” (「空想的」) (*Works* 2: 305) と呼び称賛した。

The marshes of the Benguela are the low flat swampy grounds which lye round the mouth of that almost unknown desart River 15 miles South East of Dongola. and constantly overflowed either by Tide or by River water they are nearly impassable to all but the native Aborigines and except to them Dreadfully pestilential and destructive to human life. All the Rivers of Angria East of the Calabar empty themselves into the sea in this manner and among these Dreadful wildernesses of canes and reeds and lakes and mudd and water

there are the Marshes of the Calabar and the Marshes of the Etrei the
marshes of the Benguela and the marshes of the Cameroons. (*Works* 2: 304-5)

「現地の人々以外では渡ることが不可能であり、疫病をもたらす破壊的な Benguela 湿原」とあるが、グラスタウン物語では川や湿原を舞台とした戦闘シーンが多く、大小さまざまな河川においてグラスタウンの英雄たちと現地人との間で戦いが繰り広げられる。河川での決戦では天候も重要であり、重要な戦闘シーンでは“the torrents of rain”（「激流の雨」）がハリケーンや嵐に伴って頻繁に発生する（*Works* 1: 157, 212; 2: 317）。この激流の雨は時として川を氾濫させ、登場人物たちに逆境が襲い、戦闘の流れを左右する。³⁶一方、テキストの筆致に目を向けた時、“torrents of rain”はブランウェルの言葉の激流を想起させる。先述したように、ブランウェルのテキストはパンクチュエーションに乱れがあり、文の区切りが判読できないまま書き綴られることが多々ある。ブランウェルの、時として当て所もなく際限なく続くと思われるような書き方は、アフリカの奥地に端を発し大小さまざまな支流を受け入れて、最終的に大西洋に流れ出るニジェール川を彷彿させるのである。ニジェール川が注ぎ込む大西洋は、ブランウェルの文学的想像力の捌け口とも重なり合うだろう。「アングリアとアングリアの人々」（‘Angria and the Angrians,’ 1834-1839）では、ヘクター・モンモレンシー（Hector Montmorency）は次のようにスピーチを締め括る。

And if River of my oratory did not flow onward so smoothly as you could have wished Remember that it did not bring down in its own course the rocks and stones which have chafed its waters but that they were hurled into its channel But men who would right willingly see that channel parched dry with Drought and those waters all vanished away—you have Now Heard expressed as well as I could express them my opinions upon the scenes and the events which are so constantly changing and thickening round us.... (*Works* 2: 367)

³⁶ Butcher はこのような戦闘シーンの描写を、fog of war と呼び、スコットの小説からの影響を指摘した。（本論文 103 頁、脚注 106 参照）

ブランウェルの言葉は、彼の文学的な地形が示すようにスムーズに流れるわけではない。「干ばつで川底が干上がり、水が全て消えて欲しいと願う」ように、大言壮語を聞いたがらない聴衆に対して、モンモレンシーはさらに言葉を浴びせ続ける。言葉は水に喩えられ、川は言葉である水を失うと、その存在が消えることが示唆されている。川の水が枯渇しないように、また止めどなく流れ続けられるように、ブランウェルが言葉を紡ぎ続ける様子が推し量られるのである。

* * * * *

ブロンテ家の子どもたちは『ブラックウッズ・マガジン』のみならず、J. Goldsmithによる *A Grammar of General Geography for the use of Schools and Young Persons with maps & engravings* (1823) からも、外国の地理や風土について知識を得ていた (図 4)。この本はイギリスの学校で地理の教科書として使用され、世界各国の気候や人種、地理的情報についての説明と、偏見の入り混じった概況がある。³⁷ブロンテ家の子どもたちにとって、『ブラックウッズ・マガジン』で報じられたニュースについて理解を深め、世界を知るための貴重な資料であったと言える。

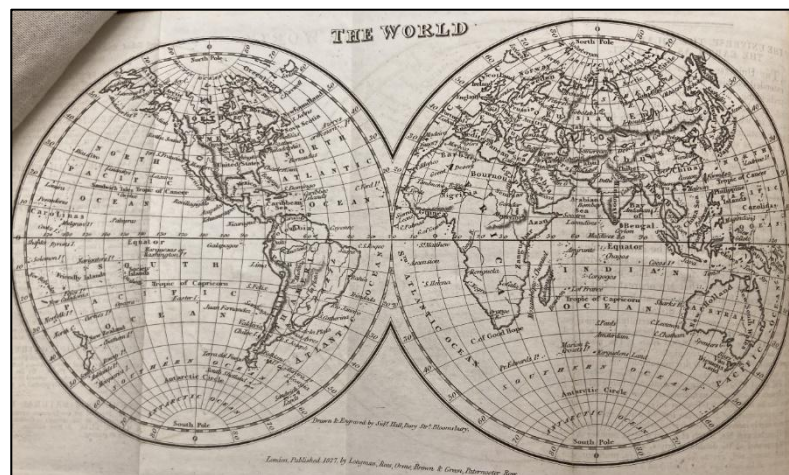


図 4. Map of “The World,” *A grammar of general geography for the use of schools and young persons*, Longman, Rees, Orme, Brown and Green, 1827.³⁸

³⁷ 例えば、「世界において最も文明と知性が発達した地域はヨーロッパであり、最も野蛮な地域はアフリカである」(79) というような英国中心的な (“Anglocentric perspective”) 記述があった (Alexander, “Imagining Africa” 203)。

³⁸ この地図の他、アフリカ大陸だけの地図も掲載されたが、ニジェール川流路の終着はベニン湾ではなく、大陸の内陸部にあった。

子どもたちがアフリカに魅了された理由のもう一つは、父パトリックがブラッドフォード教会宣教協会（Bradford Church Missionary Society）の創始者の一人であったことにある。アフリカ出身者に対する布教活動を行っていたこの協会は、アフリカに宣教師を派遣したり聖書を送ったりしていた。父がアフリカでの布教活動に従事していたことは、子どもたちがアフリカという未知の国に関心を持つきっかけになったことであろう。また、『ブラックウッズ・マガジン』が度々記事として取り上げたアフリカ探検を派遣した African Society も、同じくキリスト教の布教活動を行っていたことから、子どもたちは同誌のアフリカを庇護する運動に感化されたのである。

『ブラックウッズ・マガジン』は、ナポレオン戦争終結から 2 年後、またブランウェルが誕生した 1817 年に創刊され、ナポレオン戦争、アフリカ探検、奴隷制度を巡る論争、アフリカ原住民との戦争など、ブロンテ家の子どもたちに想像力の源となる異国のニュースを供給し続けた。同誌が無ければ、初期作品がここまで発展することは無かったであろう。『ブラックウッズ・マガジン』を読み始めた 1825 年をきっかけとして、また父パトリックが兵隊人形をブランウェルに贈った 1827 年 6 月を境に、子どもたちのその豊かな想像力の捌け口が、イギリスではなく異国の地アフリカに向けられたのは、至極当たり前のことであり、必然であったとも考えられるのである。

ブランウェルは『ブラックウッズ・マガジン』に投稿された記事から、西アフリカの地理のみならず、現地でイギリス軍が抱えていた様々な問題についての知識を得た。とりわけ 19 世紀初頭に地図を雑誌に寄稿することは非常に革新的なことであり、マックイーンの地図は当時の読者に様々な反応を引き起こし、アフリカに対する想像力を掻き立てたことであろう。ブランウェルも子どもながらにハワースに住む地理学者そして歴史家として、他者の証言や他者が作った地図や報告書を合成して得られた知識の集積であるマックイーンの記事と地図に啓蒙されたのである。マックイーンの記事には当時のイギリス植民地政策への批判、またアシャンティ人などアフリカ原住民に対する偏見が散見されることから、Alexander の論考（“Imagining Africa”）以降、マックイーンの地図とブランウェルの地図との比較分析は等閑に付されていた。地図を比較した後で改めて作品を読むと、ニジェール川の流路にブランウェルが多大な関心を抱いたことが明らかになった。ブラックウッズが「卓越した判断力」と称賛したマックイーンに感化され、地理的好奇心を掻き立

てられたブランウェルは、地理や歴史に関して得られる最新の情報や知識に想像力を加えて、物語を紡ぎ続けた。ブランウェルの地図は、SF 小説の萌芽とも捉えられる一連の初期作品の世界観を具現化したものなのである。³⁹

西アフリカを模した架空の地図に描きこまれた地理を物語に取り入れた「イギリス人からの手紙」では、グラスタウンを訪れたイギリス人銀行家による旅行記の体裁で、新たにロウグという名の主人公が誕生する。物語の結末でロウグは一度死ぬが、そのロウグを生き返らせて主人公に描いたのが、「海賊」である。次章では、海賊表象の過渡期にあった 19 世紀初頭に、ブラウエルが海上情勢に思いを馳せていたことを明らかにし、その想像力がイギリスから海を隔てたアフリカ大陸に留まらず、さらに遥か向こうのインドにまで及んでいた可能性について示唆したい。

³⁹ 2011 年に大英図書館で開催された企画展 ‘Out of This World: Science Fiction But Not as You Know It’では、ブロンテ姉弟妹の初期作品を SF 小説の萌芽として捉え、仮想世界に住む様々なキャラクターを生み出し、彼らが住む空間を詳細に捉えたブランウェルの地図は、当時としては非常に珍しいものであったと紹介された (Mike Ashley, *Out of This World* 65-6)。

第2章 「海賊」——母マライアの文学的遺産と海上情勢への観察力

2017 年、生誕 200 年を機にブランウェルに注目が集まり、初期作品研究者である Alexander らは、ブランウェルが 15 歳の時に書いた「海賊」のテキストを編纂し、詳細な解説付きで広く一般の読者にも読みやすい形式で 2018 年に出版した。それから 3 年後の 2021 年は、ブランウェルの母マライア・ブロンテ (Maria Bronte, 1783-1821) の没後 200 年の節目の年であった。それに合わせ、マライアに関する伝記が相次いで出版され、それまで等閑に伏されていたマライアの生い立ちや両親の家系までが明らかにされた。マライアの出身はコーンウォールのペンザンスである。マライアは町でも有数の商家に生まれたが、実はペンザンスは、デボンシャー、ドーセットシャーと並び、海賊の巣窟と呼ばれた場所であった。また、コーンウォールの海岸では密輸船が遭難することも多く、幽霊船や海賊の亡霊に纏わる伝説が多々あるという。マライアから、密輸船が隠れることのできるたくさんの入り江に囲まれたペンザンスの風景や、海賊に関する話をブロンテ家の子どもたちが聞いていた可能性は否めないであろう。本章では、マライアの父母やペンザンスの風土、彼女の読書歴などの伝記的事実やマライアが書き残したものにも触れながら、ブランウェルが残した作品「海賊」(‘The Pirate’) をマライアが子どもたちに与えた文学的遺産の一つとして捉え、ブランウェルの海賊表象の中に、英国帝国主義時代の海上情勢が色濃く反映されていることを明らかにしたい。

ブランウェルと海賊。その関係を読み解く鍵の一つは、初期作品に登場する架空の国の名前にある。姉のシャーロットと共に書き綴った「グラスタウン・アングリア物語」の舞台となった架空の国の一つである「アングリア」という名前は、18 世紀に実在したインドの海賊カナージ・アングリア (現地語ではカンホジ・アングリ) の名前から取ったものであると考えられている。しかし近年のインド史研究では、アングリアは、イギリスから自国の貿易を長きにわたり守った英雄として見なされている。このことに注目した Joetta Harty は、ブランウェルは自身の主人公を海賊の出身に設定し、且つ西アフリカを舞台にした架空の国の名前を、インドで実在した海賊に因んで名付けることにより、植民地主義的また帝国主義的な文化に潜在する欠陥を表したのではないかと考察する (44)。この Harty の革新的な考察の是非については、今後緻密な検証が求められるであろう。

Grace Moore は、文学における海賊のイメージは、19 世紀に入り大きく転換したと指摘する (2)。海賊小説と言えば誰もがロバート・ルイス・スティーブenson (Robert Louis Stevenson) の『宝島』(1883) を思い起こすであろう。しかし 16 世紀初頭から 17 世紀にかけて海上を席卷した、強奪や虐殺をものともしない海の盗賊が、文学におけるヒーローへと転換するきっかけを作ったのは、チャールズ・ジョンソンの筆名で出版され、一説ではダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1660-1731) が書いたとされる『海賊列伝』(A General History of the Robberies and Murders of the Most Notorious Pyrates, 1724) であった。⁴⁰『海賊列伝』は、実在した海賊たちの血生臭い悪事や海賊の文化、また海事裁判の様子などが詳細に記録されたことから増版されるほどの人気ぶりであり、その後に誕生する様々な海賊物語の原型となった。それから約一世紀後、すでに『海賊列伝』に登場するような野蛮な海賊たちが大海から消えた頃に、イギリス文学を代表する二人の作家 (バイロンとスコット) が海賊を主人公とした作品を執筆した。バイロンとスコットは、ブロンテ家の子どもたちが愛読していた作家であり、姉弟妹の作品において多大な影響を与えたと考えられている。

バイロンが書いた叙事詩『海賊』(The Corsair, 1814) では⁴¹、愛する妻と生き別れ憂愁を帯びたロマンチックな海賊が誕生し、またスコットの『海賊』(The Pirate, 1822) では『海賊列伝』に登場する海賊をモデルに、恋人と結ばれるために海賊から足を洗おうとする紳士的な海賊が描かれ、海賊のイメージは大きく変化した。二作品に共通する点は、『海賊列伝』に描かれる海賊へのノスタルジアとロマンスとの融合である。このような文学における海賊表象の転換期に執筆されたのが、ブランウェルの「海賊」である。Moore はブランウェルの描く海賊は、まさにバイロンの新しい海賊像であると指摘する (4)。本稿では、母マライアが息子に残したペンザンスの残影を辿るとともに、カナージ・アングリア一族の海運歴や、英国帝国主義を海上で支えた海賊船や私掠船の役割や違いにも焦点をあてながら、商人と海賊が紙一重の存在であった当時の海上情勢に対する鋭い観察力が、ブランウェルの「海賊」から読み取られることを明らかにする。

⁴⁰ 『海賊列伝』の作者は長らくデフォーだと考えられてきたが、複数の研究者が誤りであったと指摘する (Moore 17)。

⁴¹ バイロンのタイトルにある Corsair (コルセア) は、主に地中海で活動していたイスラム国の海賊を指す。

1. マライア・ブロンテとペンザンス

この節では、マライアの短い生涯について思いを馳せながら、母から息子へ紡がれたであろうブランウェル家の歴史やペンザンスの風土について考察したい。

ブランウェルの母親[旧姓マライア・ブランウェル]の出身地であるコーンウォール地方ペンザンスは、複雑な入り江や断崖の窪みが多い地形から、密輸船、海賊船が寄港しやすく、18世紀には密輸貿易が盛んな地域であった(加藤 263)。マライアの父方のブランウェル家はペンザンスでは有名な商家で、貿易業、醸造業、不動産業などで財を築いた。母方のカーン家もまた炭鉱業で財を築いた由緒ある一族で、ブランウェル家に勝るとも劣らない資産家であった(Hardie 12-3)。父トマス・ブランウェルは、食料品店の他、ニシンの卸売店や地所を市の彼方此方に所有し、1790年には市長補佐の一人に選出され、ペンザンスの名士となった。ちょうどマライアが生まれて間もない頃、家族は食料品店の二階を引き上げ、美しいペンザンスの港が見渡せ、市場へと直結するチャペル・ストリートに建つ、テラスハウスに移り住んだ。正面を飾る美しいオランダ産の赤煉瓦からロッテルダム・ビルディングと呼ばれており、この建物は地域における歴史的建造物として保存され、幼少期から結婚するまでのマライアが実際に過ごした貴重な史料となっている(Wright 5)。トマスはまた、1794年に自宅裏の土地の一部を市に売却し、そこにペンザンスで最初の小学校が開校された。すでに家庭で教育を受け11歳になっていたマライアは、姉のエリザベスと共にこの学校で補助をしていたと考えられている(Hardie 77)。

度重なる戦争による赤字を補填するため、特に酒類やタバコといった贅沢品には高額な税が課せられ、税関の役人たちは申告漏れや脱税に目を光らせていた。密貿易(free trade)は、18世紀後半から19世紀初頭にかけてペンザンスでは横行していた。マライアが生れた頃には手口は大胆かつ巧妙になり、チャペル・ストリート界限にある税関の真下には、密輸商人たちがくぐり抜けられる地下道があった。トマスのような貿易商は通常、共同名義で商船を所有していたが、当時の貿易商にとって密輸は日常茶飯事であった。ハワースに近いブラッドフォード出身のジャーナリストである Sharon Wright はマライアの伝記を執筆し、トマスが密輸商人の一人であったことを示す証拠を、ペンザンス税関所の公文書から発掘した。そこにはマライアの父が営んでいた商店が、密輸摘発に関わる役人からの捜査を巧妙に免れた経緯が記録されている(10-13)。

一方、ペンザンスは読書家の町としても知られている。ペンザンス・レディーズ・ブッククラブは 1770 年に設立され、マライアの親戚が歴代の会長を務めた。マライアとエリザベスが入会していた記録は残っていないが、その可能性は大いにある。このクラブに本を納品していたのは、マライアの一番上の姉マーガレットの夫であるチャールズ・フィッシャーが経営する書店であったため、少なくとも、彼が所有していた書籍を読む機会があったと考えられている。クラブが注文した本の納品記録には、マリア・エッジワース、ルソー、ゴールドスミス、メアリ・ウルストンクラフト、ヘンリ・フィールドイングらの他、フランス語の書物、また『レディーズ・マガジン』(*Ladies' Magazine*) を含む 3 つの雑誌があった。これらの本を、マライアが読んだ可能性は非常に高い (Hardie 80-81)。

1820 年にソーントンからハワースに赴くまでの 5 年間は夫妻にとって最も幸せな時期であり、シャーロット、ブランウェル、エミリ、アンを授かったのもソーントンであった。妊娠と出産を繰り返す中、マライアは自身の作品の出版も試みた。宗教パンフレットに掲載されることを目的に、およそ 1500 語で書かれた布教のためのエッセイ、「宗教における貧困の利点 ('The Advantages of Poverty in Religious Concerns')」を 1815 年に投稿したが、残念ながら採用されなかった。執筆年については定かではないが、結婚後だと考えられている (OCB 2-3; Wright 112)。「一般的に貧困は、普遍的にとまでは行かないが、悪とみなされ貧困そのものだけでなく、一連の他の様々な悪を招くと考えられる。しかし、この考え方は間違っていないだろうか」(Wise and Symington 1: 24) という出だしで始まるこの宗教メッセージには、彼女が貧困者を理解しようとする真摯な姿勢が読み取れる。

先述したように、マライアはペンザンスでの恵まれた環境のもと多くの文学作品に触れ、そこで培われた豊かな文化的教養は、ソーントンで享受した知的な社交生活においても育まれた。⁴²しかし、ハワースに転居して半年余り後の 1821 年 1 月、突然病に倒れた。病名は膀胱がん (Barker 102) あるいは子宮頸がん (Wright 142) と考えられている。8 ヶ月の闘病生活の後 1821 年 9 月 15 日、パトリックと 6 人の子どもたち、姉エリザベスに見守られてこの世を去った。長女マライア 7 歳、エリザベス 6 歳、シャーロット 5 歳、ブランウェル 4 歳、エミリ 3 歳、アン 1 歳 7 ヶ月であった。

⁴² ソーントンでマライアは、ジョン・ファース医師の娘で読書家のエリザベス・ファースと出会い、彼女との交流を通して知的な社交生活を享受したものと考えられている (Wright 108-9)。

ブランウェルが母親と過ごした4年足らずの間に、彼女が読んだ文学作品やペンザンスの海賊に纏わる話、あるいは地元屈指の貿易商、また市長永久補佐としてペンザンス自治体の経営を担っていた祖父トマスが、密輸商人という別の顔を持っていたことについて、母親から直接聞いたのか、或いは姉らや叔母エリザベスから間接的に聞いたのかについては、想像の域を超えない。しかし、後述するようにブランウェルが15歳という多感な時期に書いた「海賊」という小説には、ペンザンスの港に密輸船が寄港する風景や祖父トマスの生涯を彷彿させるような描写があり、そこにマライアが子どもたちに与えた文学的遺産が残されているのである。

2. アングリアの起源を巡って——海賊の歴史的背景

序章で紹介したように、シャーロットとブランウェルが共に書き綴った初期作品のうち、アフリカ西海岸に建国された架空の王国グラスタウン連邦を舞台にした物語は「グラスタウン物語」と呼ばれ、後にグラスタウン東部に建国されたアングリア王国を舞台にした作品と合わせて「グラスタウン・アングリア物語」と呼ばれる。Collinsは、「アングリア」という名称の起源はインドの海賊カナージ・アングリアにあるとし、アングリアは海賊王国の建国者且つ、インド軍提督であったと指摘した(19)。⁴³実際彼は、*The Hand of the Arch-Sinner: Two Angrian Chronicles of Branwell Brontë* (1993)において次のように述べている。

The word 'Angria' is traceable to a pirate kingdom on the Malabar coast of the Indian Ocean, long forgotten today but famous for its successes at the end of the seventeenth and during the first half of the eighteenth century; it took its name from its founder, Kanhoji Angria, an Indian admiral who organized a powerful pirate fleet which for many years not even the European powers could defeat, a corsair who reared a city state which became legendary in its wealth. (18)

⁴³ ちなみにコリンズは、エミリとアンが作った王国 Gondal も、インド中央に実在した国の名前であると指摘した。

この記載から 10 年後の 2003 年に出版されたオックスフォード・ブロンテ事典において、Alexander は Collins の見解を踏襲したものの、Collins の説明には明記されていた admiral という単語が欠落した。

The name is traceable to a pirate kingdom on the Malabar Coast of India, named after its founder Kanhoji Angria and famous in the late 17th and early 18th centuries for its successful repulsion of European powers until its defeat by Clive in 1756. The Brontës' Angria has some of the same legendary wealth and dubious notoriety as this Indian kingdom. (*OCB* 12)

Alexander の説明では、悪名高き海賊王国であった点のみが強調されている。架空の国アングリアの巨額の富と悪評が、インドの海賊王国と安易に結び付けられている印象も与えかねない。

日本人には聞き慣れないこの海賊は、17 世紀末から 18 世紀初頭にかけてヨーロッパの勢力を牽制し、1756 年にロバート・クラιβ率いるイギリス軍が討伐するまで猛威を振るい、イギリス東インド会社の貿易にとって有害、且つ A Compendi 驚異的な存在であったことでイギリス海軍史上にその名を刻んだ。前述したジョンソンの『海賊列伝』や、クレメント・ダウニング (Clement Downing) の『インド戦争史：海賊アングリアの勃興、成長、国力及び軍事力』(1737) でも、その圧倒的な強さが記録されている。また、『ジェントルマンズ・マガジン』では 4 ページにわたり、ジョン・ワトソン提督が難攻不落の要塞ゲリアを陥落させた記事が掲載されている。⁴⁴悪名高きインドの海賊アングリアがイギリス軍に長年にわたり苦戦を強いたことは、同時代の作家たちにより誇張され語り継がれた。しかし、イギリス側から最高の海賊の烙印を押されたアングリアは、インドでは東インド会社の貿易船から西インドのマラバー海域を長きにわたり護った英雄としてみなされている。

ブランウェルの母親がペンザンス出身であったことを鑑みると、遠く離れたインドの海賊アングリアに対して一種のエキゾチシズムを感じていたことは偶然ではないかもしれない。興味深いことに、ペンザンスの海岸はアングリアが活躍したコンカン地域の海岸と地

⁴⁴ "History of the Angria, the pyrate." *Gentlemen's Magazine*, vol. 26, 1756, 619-22.

形が非常に似ているとも指摘されている (Keay 260)。またペンザンス出身＝海賊という偏見もあいまって、これまでマライアの先祖は海賊出身、と安易に想像されることもあったようだ。しかし Wright が強調するように、マライアの父親が従事していたのは、あくまで密輸業であった。また、ペンザンスは何世紀にもわたりイスラム国から海賊が奇襲し、1625 年には白人奴隷として地中海や北アフリカに拉致された住民もいた。1760 年にはアルジェリアの海賊が西アフリカ沿岸と勘違いしてペンザンスを奇襲したこともあり、当時十代であったマライアの父母の脳裏にも、異国の海賊に対する強烈な印象が焼き付いたと想像されている (Hardie 3)。

一方、密輸商人と海賊の定義は非常に曖昧で、マライアが生きていた頃はその曖昧さが特に顕著であった。また海賊船の他にも、私掠船 (privateer)、つまり海上で遭遇した海賊船や敵国船に対し、武力で奪い返してもよいとする私掠許可状を得た民有武装船があった。私掠船と海賊船の違いは非常に曖昧で、私掠許可状を持っているかどうか、言い換えれば、国から雇われているかどうかが鍵となる。イギリスでは 13 世紀初頭、ヘンリー 3 世が最初に私掠許可状を発行したとされ、私掠船が奪還した財貨から高率の手数料が徴収され、国家財政に利潤をもたらした。また、スペインの無敵艦隊を破るため、エリザベス 1 世治下で多くの私掠船が活躍し、海軍力を増強したことは有名である。私掠船はやがて「17 世紀よりヨーロッパ列強間で繰り広げられた植民地戦争において、敵国の海上輸送を妨害する私的海軍」(稲本 48)、つまり正規海軍の補助としての役割も担った。イギリス南西部のデボン、コーンウォールを拠点とする私的海軍力は、イギリス近海における海上覇権の確立において大きな役割を果たしたのである (46)。

アメリカ独立戦争 (1775-83) やナポレオン戦争 (1799-1815) においても私掠船が軍備に貢献した。しかし戦争後は私掠行為を非難する世論が高まり、また国際貿易が発展するにつれ商船による海上輸送の重要性が増し、海上交易を乱す私掠船は有害視された (稲本 50)。ナポレオン戦争終結の一年前に書かれたバイロンの『海賊』において、謎めいたバイロニック・ヒーローとしての海賊が生まれたのには、以上のような歴史的背景があったと考えられる。海賊のイメージが大きく変遷する過渡期において、複雑な海上模様を映し出したのがブランウェルの「海賊」であった。

3. ブランウェルの「海賊」

「ブランウェルズ・ブラックウッズ・マガジン」(1829)以降ブランウェルは、へぼ詩人ヤング・スール (Young Soult the Ryhmer[sic]) のペルソナで実験的な詩を数多く書き、‘Laussane’ (1829) , ‘Caractacus’ (1830) , ‘The Revenge’ (1830) などの誌劇も手掛けた。それと並行して、スールの筆名を捨て、ジョン・フラワー大尉 (Captain Sir John Flower)、ジョン・バッド大佐 (Captain John Bud)、ヘンリー・ヘイスティングス (Henry Hastings)、チャールズ・ウェントワース (Charles Wentworth) などの語り手を用いて ‘The Liar Detected’ (1830) , ‘Letters From An Englishman’ (1830-32) を書き、後々描き継がれる主要な登場人物が誕生した。‘The Liar Detected’で“Young R—e”という表記でブランウェルの物語に初めて登場するロウグを最初に描いたのはシャーロットであり、ザモーナに対抗するヒーローとしてブランウェルが用いた。⁴⁵

ブランウェルの新しいヒーローであるロウグは、「イギリス人からの手紙」においてグラスタウン連邦国を揺るがす市民戦争の革命的な扇動者となり、首都であるヴェルドポリスにおいて反逆を企てる。1789年のフランス革命を模した暫定政府を立てるが、スニーキー国において謀反を繰り返し、ウェリントンに敗北し処刑される。その後生き返り、海賊船ローバー号の船長としてヴェルドポリスの町に返り咲いて登場するのが、本作品である。ロウグを初めて主人公にして描かれた「海賊」は、ブランウェルのヒーローが扇動者、商人また海賊から、エルリントン卿即ち貴族へと進化を遂げる重要な分岐点となる散文である。この後、「羊毛は高騰する」(‘The Wool Is Rising,’ 1834)においてノーザンガーランド伯爵へとさらに進化を遂げるが、そのことについては第4章で触れる。

「海賊」を書いたフラワー大尉はグラスタウンに住む政治家であり、学者、歴史家、作家の肩書を兼ね備え、「ヴェルドポリスの政治」(‘The Politics of Verdopolis,’ 1833)や「羊毛は高騰する」の作者でもある。物語は語り手であるジェイムズ・ベリンガム (James Bellingham) が、知人であるロウグを訪ねるところから始まる。⁴⁶先述したようにロウグは海賊、デマゴグ、革命者、政治家であり、ウェリントン公爵の次男であるザモーナの友人かつライヴァルでもある。⁴⁷ロウグの心理と多様な人格は、ブランウェル

⁴⁵ ロウグというキャラクターを最初に作ったのはブランウェルではなく、シャーロットが「現代の名士たち」(‘Characters of the Celebrated Men of the Present Time,’ 1829)において初めて登場させた。

⁴⁶ 第1章で紹介したように、ベリンガムは「イギリス人からの手紙」の語り手である。(本論文 33 頁、脚注 34 参照)

⁴⁷ シャーロットのヒーローは、ウェリントン公爵から息子のザモーナへと移る。ザモーナはロウグ改めノーザンガーランドの娘と結婚するため、ノーザンガーランドはザモーナにとって義理の父でもある。

が愛してやまなかったホッグの『義とされた罪人の手記と告白』(*The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner*, 1824)におけるドッペルゲンガー・モチーフを反映していると考えられている(OCB 345)。

ロウグの知人である語り手のベリンガムは、巨額の富を得て帰郷したロウグの豪邸を訪問し再会するところから物語は始まる。邸宅の前にはグラスタウンの港が広がり、航行する夥しい数の船舶や、着岸した船でゴった返している波止場が眼下に広がっている。はるか彼方には、スタンパス国やマンキーズ国の島々が広がっている美しい光景がある。この光景は、母マライアの故郷ペンザンスから見渡せるマウンツ・ベイや、イギリスのモン・サン・ミッシェルとも呼ばれるセント・マイケルズ島の地形と重なりあう。ベリンガムが通された部屋では、蛇のような狡猾な顔つきのロウグが彼を迎えた。商人をやめ海軍に入り、今や提督あるいは海賊であると名乗り、ブランデーを煽り海を眺めながら怪しげな独り言をつぶやく。船を略奪する計画の中に、ベリンガムの所有する船の名前も入っていたので、ベリンガムは度肝を抜かれる。

Sir I have this Morning received information from several persons that a number of armed Vessels carrying scarlet colours have been recently infesting these Seas and committing the most violent and wanton aggressions upon the vessels carrying the Flags of this Nation as also upon those of France Parrys Ross's and my own. (*Worls* 1: 243)

そこへウェリントン公爵がやって来て、フランス船をはじめ多くの船を襲っている海賊船は、ロウグ・スデス会社の船であると宣告し、ロウグに対して海軍法廷に出頭して証言するように命じた。ロウグは自分の会社に着せられた汚名を晴らし潔白を証明すると誓うが、一転逃亡を図る。

ロウグはベリンガムを口封じするために道連れにし、海軍法廷への出頭から逃れるため船で逃亡を企てる。ベリンガムが「海賊船か私掠船 (Pirate or privateer)」(244) と形容するこの船が、グラスタウンを離岸し遠く離れていく風景描写では、次のように語られる。

[N]o trace of the Glass town remaining save the great Tower of Nations standing black and huge against the long red lines of light wich stretched in the west betokened the early dawn, The fast receding shores looked dark and gloomy in the Twilight while a cold raw breeze swept over the Ocean. raising long undulating ridges of waves and howling with a mournful cadence amid the lofty masts and cordage of the gallant ship.... (*Works* 1: 245)

「風が、勇敢な船の聳え立つマストや索網（さくもう）から、陰鬱で哀れを誘う死体のような調べを吹きすさびながら」航行する様子が描かれ、ローバー号で散った幾つもの罪なき商人あるいは海賊たちの遺体やその亡霊を彷彿させる筆致には、目を見張るものがある。ハワースは海から遠く離れており、執筆当時まだ実際の海を目にしたことが無かったことを考慮すると、ブランウェルが海上や船に対して多大な関心を寄せていたことが窺えるだろう。グラスタウンを離れた海賊船は船に遭遇すると、「紅色の旗の代わりにウェリントンの緑の旗を揚げ、海賊用の短刀や短剣を捨て、頭に巻いた赤い海賊のハンカチを外し、貿易商が着る青いジャケットとアザラシの毛皮製の帽子に着替えて」登場する。

They all went below. stripped their daggers & cutlasses coming up again. transformed into. plain merchant seamen with blue jackets. and seal skin caps instead of their red pirate handkerchiefs on their heads. I observed that the scarlet flag had been taken down in the darkness while the green colours of Wellington were waving aloft in their stead. (*Works* 1: 245-6)

船旗を付け替えることにより海賊船（或いは私掠船）から商船へ、またその逆になります。行為は、商船と海賊船（或いは私掠船）は紙一重ほどの隔たりしかなく、容易になります。ことが可能であった当時の複雑な海事活動を色濃く反映していると言えよう。ロウグの逮捕令状を携えた軍人を偽物の船長であるスデス（Sdeath）が迎え、捜索に協力すると見せかけて、ローバー号の海賊たちは次々と士官らを倒し、相手の船の前に犠牲者の首を並べた。その後銃撃戦が繰り広げられたが、相手の船の乗組員たちはすべて惨殺され、ロウグが勝利した。

本作品の翌年に執筆された「羊毛は高騰する」では、アレグザンダーは貴族であるノーザンガーランド伯爵として登場し、海賊であった頃を回顧して「海賊船ローバー号」という詩を書く。“Sail fast sail fast my gallant ship thy ocean thunder round thee”で始まるこの詩では、海賊船が無防備な商船を襲う様子がよりリアルに描かれる。

Lo! yon feirce blast hath swept the seas and covered them with foam

Yet shall it force the[e] on thy way wherever thou mayst roam.

The rich but feeble Merchant ship may quiver to this gale.

For it shall guide thee to thy prey and swell thy eager sail

When Night and tempest gather up to shroud the stormy sky

The timid sheep may look to heaven with an imploring eye.

But while they flock. in frightened. haste and. crowd the narrow way

What cares the lordly Lion then who pounces on his prey.

The storm has but his reaper been to gather in his grain.

And thus to thee my ship shall be this hoarse resounding main. (*Works* 2: 28)

荒れ狂う海原を震えながら航行する裕福な商船は羊や雁に譬えられ、獲物に飛び掛かろうとする海賊船はライオンに喩えられる。ロウグ率いる勇敢な海賊たちとの血しぶき舞う乱闘の末、商船は燃やされ「血のような赤い月となり海墓へと沈む（‘like a bloodred Moon it sets behind its watery tomb.’）」（*Works* 2: 30）。Stoneman が指摘するように、執筆当時まだ海を一度も見たことがなかったブランウェルが、嵐海で海賊船に遭遇した商船が子羊のように海路に迷い、ライオンの餌食と化すように海原に飲み込まれる様子を鮮明に描写した点は、称賛に値するであろう（60）。⁴⁸

「海賊」に話を戻すと、再び紅色の旗を掲揚し航行していると、今度はグラスタウン連邦国の旗を掲げ、エルリントン伯爵とその家族を乗せた船に遭遇した。そこで再び商船を表す緑色の旗を掲げ、先ほど奪った逮捕令状をかざして相手の船に乗り込み乗っ取ろうと

⁴⁸ 滝川は、『ブランウェル・ブロンテの詩作品における海の表象』（2017）において、「海はパーシーの背後に常に連想される、ブランウェルにとってお気に入りの自然のモチーフの一つであった」（35）とし、ハワースは海から遠く離れていたが、ブランウェルにとっては「絶えず詩的創造力を刺激する媒体であった」と分析する（44）。

したが、伯爵の娘であるゼノビア・エルリントンは紳士的なロウグに好意を抱き、ロウグもゼノビアを絶賛した。やがて二隻の船は向きを変え、グラスタウンに帰航した。その途中、一隻目との戦いで相手の船員を虐殺したスデスとロウグは衝突し、スデスはロウグを襲うが、反対にロウグに銃で撃ち殺され、その死体は海へ投げ捨てられる。すると、その時稲妻のように火がぱっと燃え盛り、そこから巨大な守護神（Genius）が現れた。この守護神は雲を掴んだかと思うと、「愚か者よさらばじゃ」と叫びながらその中へ消えていった。消える瞬間、三つの稲妻のような炎が出て、タリイ、エミイ、アニイの三つの守護神が現れた。実はスデスの正体は、守護神ブラニイであったことが明かされる。

[W]hen it touched the water a bright flash of fire darted from it it changed into a vast GENIUS of immesurable and indefinable height and size and seizing hold of a huge cloud with his hand he vaulted into it crying “and I’ve done with thee thou fool” dissapeared among the passing vapours. Ere he departed 3 vast flashes of fire came bursting a round They were the Chief Genii TALLI EMII & ANNII He that. ere this little hideous & bloody old Man was the CHief Genius BRANNII. (*Works* 1: 249)

先述したように、ブロンテ姉弟妹たちは初期作品の物語世界において作家であり、またそれぞれの主人公を守る主要な守護神（Chief Genii）の役割も演じた。タリイ、ブラニイ、エミイ、アニイの4人の守護神は、登場人物として物語に登場したり、キャラクターを戒めたり救済した。超自然的な出来事は初期作品には付き物で、守護神たちは物語中で一度死んだ登場人物たちを生き返らせる役割も担った。ブランウェルの書いた「海賊」において、スデスの正体がブランウェルの守護神ブラニイであったことに関連して、Stoneman はスデスの残虐性とブランウェル自身の人生を結び付ける（61）。また Collins はブランウェル自身がスデスであると同時にロウグでもあるとし、ブランウェルにとって海賊は、現実世界における悪魔のアヴァター（avater）であると分析した（*Arch-Sinner* Intro. xxx）。しかし、彼の小説における登場人物の残虐性や悪魔性を、ブランウェルの人となりそのものに結び付けるのは、短絡的であり、ブランウェルの作品研究が行き当たる

壁であるように思われる。スデスの残虐性は、作家本人と結び付けるのではなく、テキストにおける登場人物の性格や個性として捉えられるべきである。

また、スデスの性格の変容について Everard Flintoff は、「海賊」を境に、スデスの残虐性が生まれ、以後ブランウェルの初期作品において重要な脇役として登場し続けることを指摘した。⁴⁹本稿でも、最終章でブランウェルが最後に書いた散文「そして疲れし者は眠りについた」において、スデスがどのように変化し、また、『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847) のジョゼフと重なり合うかについて考察する。

スデスが亡くなった後、ロウグはベリンガムを解放しゼノビアの夫となり、身を入れ替えてエルリントン子爵になると宣言した。二隻の船はグラスタウンへ戻り、ロウグはウェリントン公爵の屋敷へ急行する。ウェルズリー公爵、海軍大佐、ベリンガムらを前にして、ロウグはこれまでの海賊行為が直ちに赦されることを条件に、被害者に対する賠償をすると申し出た。この申し出は受理され、彼の海賊行為に対する制裁は賠償金により免除された。ゼノビアとエルリントン子爵となったアレグザンダー・ロウグとの結婚式が執り行われ、その祝賀会に出席するために語り手ベリンガムが筆を置いたところで物語が終わる。本作品の書かれた翌年 1834 年にアングリア国は建国され、ブランウェルは 1839 年にかけて長編「アングリアとアングリアの人々」を執筆する。

結末で注目すべき点は、ロウグが海賊行為を繰り返しながらも賠償して無罪放免されることであろう。1718 年にイギリス国王により出された恩赦により、投降した海賊は罪を許された。Harty は、既婚者は海賊になれなかったことから、ゼノビアと結婚することにより海賊から投降し恩赦を受けたと考察する (56)。先述したように、「海賊」の執筆年である 1833 年当時は海上から海賊船や私掠船が姿を消しつつあったが、その存在意義を変容させ活動していた。バイロンやスコットと同様に、ブランウェルもまた『海賊列伝』に登場するような海賊たちの悪漢ぶりに一種のノスタルジアを感じていたのかもしれない。⁵⁰

⁴⁹ “Branwell at the Heights: an Investigation into the Possible Influence of Branwell Brontë upon *Wuthering Heights*” 329

⁵⁰ ブロンテ家が愛読していた『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』には、ブランウェルが「海賊」を執筆する少し前の 1829 年から 1833 年にかけて、『トム・クリングルズの航海日誌』(*Tom Cringle's Log*) という海賊小説が連載されていた (Harty 46)。

* * * * *

商人あるいは海賊、そして提督。この三つをブランウェルは、キリスト教の三位一体説に準える。「海賊」の冒頭でロウグは、「商人、提督、そして海賊三つの顔をもち、それらが合わさって一つの顔である」(*Works* 1: 241)と自嘲しながら呟く。父、子、聖霊の三つそれぞれが神であり、また一体の神でもあるというキリスト教の根幹をなす三位一体説の揶揄である。英国国教会牧師の息子であったことを考えると、アイロニーを感じずにはいられない箇所であろう。ロウグは本作品以降の物語において無神論を唱え、非国教会を揶揄する性格を帯びるが、それについては次章及び最終章にて考察する。他方注目すべきは、ロウグが持つ三つの顔が、驚くほどカナージ・アングリアが持つ顔と重なり合う点である。イギリス側から最高の海賊の烙印を押されたアングリアは商船を数多く所有し、彼の率いた艦隊がインドにおける海軍創設の礎となったことから、現在ムンバイのインド海軍造船所には彼の功績を讃えるための記念碑が建立されるほどである。ブランウェルが創造した西アフリカの架空の国アングリアには、インドの愛国主義的な海軍国家が見え隠れする。

マライアの長男にして唯一の男子であるブランウェルが、15歳の時に書いた「海賊」という小説に、マライアの生まれ故郷であるペンザンスの港の風景やペンザンスを奇襲したイスラム系の海賊たち、また祖父トマスの生涯を透かして見ることも、可能であろう。海賊表象の転換期に書かれた本作品には、母が息子に残した文学的遺産が垣間見られる一方で、英国植民地主義政策がインド西海岸に及んだことにより生まれたインドのヒーロー、カンホジ・アングレの歴史に、思いを馳せることができるのである。英国帝国主義を海上で支えた海賊船や私掠船の役割や違いについて『海賊列伝』を始めとした書物や雑誌に取材した本作品の根底には、当時の海上情勢に対するブランウェルの鋭い観察力や洞察力があったのである。

ブランウェルは、「イギリス人からの手紙」において誕生し、一度は死んだロウグを「海賊」において返り咲きさせ、新たに貴族の身分を帯びたアレグザンダー・パーシーに進化させた。以降、アレグザンダーはブランウェルのヒーローとして初期作品に数多く登場し続け、物語を席卷する。このアレグザンダーを主人公に据えた散文の中でも「羊毛は高騰する」は、シャーロットの初期作品及び小説に大きな影響を与えたと考えられている。

次章では、ブランウェルの「羊毛は高騰する」に描かれた兄弟間の確執のモチーフを、シャーロットが晩年に至るまで描くことに固執し続けた理由に迫ると共に、姉弟が共に物語を紡ぎ合った初期作品時代の証として捉え、ブランウェルが姉に与えた最も顕著な影響の表れであることを明らかにしたい。

第3章 弟が姉に与えた影響——兄弟間の確執のモチーフ

「グラスタウン・アングリア物語」を創作していた頃のブランウェルはシャーロットのアイデアの供給源であり、彼が姉に創作上与えた影響の軌跡は、1829年から1838年までの10年間に及んでいる。⁵¹中でも、「兄弟間の確執」のモチーフに姉弟は固執し、とりわけシャーロットが初期作品を離れてから挑んだ小説世界においても描き続けたことは非常に興味深い。このモチーフの原型はブランウェルの「羊毛は高騰する」(1834)に認められ、その後彼の「陸軍元帥アレグザンダー・パーシー閣下の生涯」(‘The Life of Field Marshal the Right Honourable Alexander Percy’, 1835-36)において発展を見ることになる。⁵²弟との初期作品世界から離別を決意し取り組んだ未完の書「アッシュワース」(‘Ashworth,’ 1840)や、小説家の道を歩み始めたシャーロットが最初にした作品『教授』(‘The Professor’, 1857 没後出版)、小説家として成功した後に書かれた『シャーリー』(‘Shirley’, 1849)にも、この兄弟間の確執のモチーフが繰り返し登場することからも、このモチーフがシャーロットの小説作品における重要な要素の一つであったことは自明である。したがって、姉弟の作品において、このモチーフがどのように描かれ、また変遷しているのかを考察し、ブランウェルとの共作(あるいは競作)時代に生れたモチーフをシャーロットが大切に育み続けたことが、ブランウェルがシャーロットに与えた最も顕著な影響の表れであることを明らかにしたい。

シャーロットのテキストにおける兄弟間の確執のモチーフとその変容については、ブロンテ初期作品を初めて体系的に論じた Ratchford や、シャーロットの初期作品群を編纂し、膨大なテキストを緻密に解析した Alexander が考察を試みた。⁵³このモチーフの起源は弟

⁵¹ シャーロットとブランウェルは、1829年に豆本を作り始めた当初から創作活動を共にし、シャーロットがロウ・ヘッドの寄宿学校で教師として働いていた期間(1835-1838)を除き、共作し続けた。Alexander は、ブランウェルが戦争や議会の討論、商業取引等の背景を指揮したのに対し、シャーロットは寝室の劇を受け持ったと分析する(EW2)。シャーロットは長きにわたりブランウェルのプロットに頼ってきたが、「ヘンリー・ヘイスティングス」(‘Henry Hastings,’ 1839)を境に、ブランウェルの影響を受けずに独自色を出すことに成功した(EW212)。

⁵² シャーロットの‘Tales of the Islanders’ (1829)において、不仲な兄弟(ウェリントン公爵の二人の息子ドゥアロウ侯爵/ザモナ公爵とウェルズリー卿/タウンゼント)はすでに登場していたが、ブランウェルは「父親から捨てられた兄弟間の確執」というプロットの原型を作った。

⁵³ Alexander は、‘The Early Writings of Charlotte Brontë’ (1983)において、『敵対する兄弟』(‘Two Rival Brothers’)というタイトルで1章分を割き、「生まれてすぐ親から絶縁され、自分たちの才覚だけで生き抜くことを余儀なくされた、反発し合う二人の兄弟」(219)のプロットについて考察を行い、シャーロットが亡くなる2年前に書いた断章‘Willie Erin’にも、このプロットが描き継がれたことを詳解した。しかし、その理由についての分析は行っていない。

ブランウェルの初期作品「羊毛は高騰する」に登場するアレグザンダー・パーシーの二人息子である繊維業を営む兄とその下で酷使される弟にある (Ratchford 190, Alexander 219, Monahan 14)。反発し合う二人の兄弟のモチーフは、父親による息子の廃嫡または絶縁と密接に関係している。父が息子たちを異常に憎むプロットについてはシャーロットが考案したと考えられているが、⁵⁴何故父が実の息子を疎んじるのかについては、動機は不明であった (岩上 107)。姉弟は共に敵対する兄弟のモチーフを好んで作品に取り入れ発展させたが、とりわけシャーロットが後期小説や、亡くなる 2 年前に書いた未完の原稿に至るまでそのモチーフに固執し続けた事は余り知られていない。その理由として考えられるのは、初期作品そのものに対する関心が低く、前述した先行研究以降、等閑に伏されていたためであった。⁵⁵そのような状況の下、シャーロット生誕 200 年を記念して出版された初期作品研究書 *Charlotte Brontë from the Beginnings* (2017) では、父から息子への理由なき嫌悪と敵対する兄弟について二つの論文が掲載され、初期作品における本テーマが研究者の間で高い関心を集めていることを示している。Valerie Sanders と Emma Butcher は、シャーロットは初期作品の出発点から歴史上の人物であるウェリントンモデルに物語を書くだけでなく、「国家の父 (‘Father[s] of the nation’)」(60) としての責務を家庭より優先させていた彼の「父権的軍国主義 (‘Fatherly militarism’)」(65) の価値観をも、作品に取り込んだと分析した。ブロンテ家の子どもたちは父親像を描き続けることによって、植民地主義や国家、男らしさといった、より広いテーマについて問題提起をしたという、ポスト・コロニアリズム批評である。⁵⁶また Tamara Silvia Wagner は、兄弟間の確執は、幼児期の教育や育児、また家族内の偏愛 (依怙最眞) といった要素と密接に絡み合い、シャーロットの全作品に通底していることを明らかにした (127)。初期作品において残忍な父親から捨てられた息子は孤児を表し、また暴力的な兄とその兄から虐げられる弟は主従関係を表していることから、シャーロットの作品にお

⁵⁴ シャーロットは、「秘密」(‘The Secret’, 1833)において、男児を忌み嫌う夫の手から子供を守る母親を描いた。

⁵⁵ Tom Winnifrith は、*Charlotte Brontë: Unfinished Novels* (1993) の Introduction において、兄弟間の確執のモチーフの系譜について簡潔であるが的確な分析を行った。しかし後述する Dew Lamonica が脚注において触れた以外に、この考察について先行研究で言及されていない。

⁵⁶ ウェリントン公爵とその息子のザモーナは、それぞれクオシャとフィニックを養子にするが、アシェンティ人の血が流れる彼らを嫌い虐待することから、シャーロットが描いたウェリントンとザモーナには、「植民地化する父親たち」が描かれていると、Sanders と Butcher は分析する (64)。

ける三つのモチーフ（孤児、主従関係、兄弟間の確執）は全て密接に絡み合っているのである（133）。

ブランウェルは「海賊」の結末でアレグザンダー・ロウグを貴族に昇格させ、「羊毛は高騰する」において新国アングリアの動乱の幕開けを描く一方で、アレグザンダー・パーシーが廃嫡した二人の息子のうち、長男エドワードが羊毛の梳き手から通商大臣にまで上り詰める成功物語を詳述した。続いて書き始めた「陸軍元帥アレグザンダー・パーシー閣下の生涯」（‘The Life of Field Marshal the Right Honourable Alexander Percy,’ 1834-35、以後「閣下の生涯」と略す）では、パーシーの生い立ちに遡り、彼の祖先が如何に犯罪や放蕩に塗れていたかという家系的な背景を付け加えると同時に、パーシー自身も父と不仲であることから、物語は父親殺しの計画にまで発展していく。⁵⁷ブランウェルは創作過程において、シャーロットのヒーローであるザモーナとのライヴアル関係が対等になるように、自らのヒーローであるパーシーの社会的地位も悪漢から貴族へと昇格させた。その際見栄えが良くなりすぎないように、彼の先祖に難癖をつけて敢えて見劣りさせることにより、ブランウェルが自分らしさを出そうとしたのではないかと、Neufeldt は分析する（203）。⁵⁸

ブランウェルが「羊毛は高騰する」において用いた兄弟における確執のモチーフを、シャーロットは「呪文」（‘The Spell, An Extravaganza,’ 1834）や「ザモーナ公爵」（‘The Duke of Zamorna,’ 1838）において取り入れ発展させた。また、空想的なアングリアの世界と決別し、リアリズム小説へと移行する過渡期に書かれた未完の書「アッシュワス」にも登場する。その後、父親に捨てられるという不自然な部分がそぎ落とされ、兄弟間の確執のみ引き継がれたのが、没後出版された『教授』である。本章では、姉弟の初期作品の中から兄弟間の確執を描いた作品に焦点を絞り、その粗筋を紹介しつつ姉弟が繰り返し描いた兄から弟への暴力について概観した上で、とりわけシャーロットがこのモチーフに執着した理由について考察する。扱う作品は、ブランウェルの「羊毛は高騰する」及び「閣下の生涯」の2作品、またシャーロットの「呪文」、「ザモーナ公爵」、「アッシュワス」及

⁵⁷ 片山美穂は、「羊毛は高騰する」における、父親による息子の殺人未遂（嬰兒遺棄）と「閣下の生涯」における父親殺しに加担する息子の語りとの連続性を指摘し、アレグザンダー・パーシーの造形について、悪魔的存在の父親と守護天使のような母親像という構図から論じた（54）。

⁵⁸ Neufeldt は、「閣下の生涯」に描かれているパーシーの音楽に対する芸術的才能や無神論的思想は、多くの点でブランウェル自身と共鳴しており、パーシーの人物造形がブランウェル自身と密接に関係していることを示唆した（‘Alexander Rougue/Percy. Part 1’ 206）。

び『教授』の4作品である。父が息子に対し下した「邪悪で不当な裁き（‘rank, black, unnatural injustice’）」⁵⁹、また兄が弟に対して行った「残忍な蛮行（‘savage, hard, calculating barbarity’）」⁶⁰は、現代風に言うならば、育児放棄された子ども（実際に行われたのは嬰兒遺棄であるが、死なずに生き延びた子ども）に対する強い関心を表している。ハワースの牧師館という狭い限られた空間の中で幼い頃からブランウェルと共に創作活動に励んだシャーロットにとって、育児放棄された子どもの兄弟関係、また彼らの成長について描くことは、作品を生み出す原動力となり、そこから物語が大きく発展していく礎のようなものだったと結論付ける。そしてこのことこそが、ブランウェルがシャーロットに与えた文学的影響の証であるのだ。

1. 「羊毛は高騰する」

ブランウェルによって書かれた「羊毛は高騰する」はアレグザンダー・パーシーによって捨てられた長男エドワード・パーシーを主人公とし、彼が羊毛業で身を立て、政治家にまで出世し、アングリシア国の通商大臣となるまでを描いた物語である。父親が息子を捨てる場面は、物語の第3章に登場する。アレグザンダーは長男に続いて次男も、手下であるスデスに殺すように命じるが、スデスはその二人の息子連れ去り、殺さずに生かした。⁶¹

...the moment he was born that strange Nobleman delivered him to Old Sdeath his Lieutenant with strict injunction for his death instantly and decidedly Old Sdeath for motives known only to himself. did convey him away but. secreted him. and. caused his life to be preserved. and when upon the birth of another son....the Earl also gave him to Sdeath to destroy but the old fellow also conveyed him away. with life. (*Works* 2: 46)

⁵⁹ ‘The Spell,’ *Tales of Glass Town* (137).

⁶⁰ ‘The Duke of Zamorna,’ *Tales of Angria* (181). Sanders と Butcher は、「ヘンリー・ヘイスティングズ」ではウィリアムが父を表す際に、心理学用語である “insane scoundrel”、さらに英語の言説において当時まだ定着したばかりの “monomaniac” が使われていることに触れ、シャーロット自身が狂気に囚われていた可能性について指摘した (“‘Mortal hostility’” 67; 70, n. 4)

⁶¹ このスデスは「海賊」において誕生したキャラクターで、以後、ブランウェルの散文において主人公パーシーの手下として常に登場し、エミリの『嵐が丘』に登場するジョゼフの原型とも考えられているが、その点については第6章で考察する。

その後苦難を乗り越え、兄のエドワードは羊毛の梳き手として働き、弟のウィリアムとティモシー・スティアトン（執事の息子で、同じく捨てられた）と共同して羊毛梳き商會を始め、財を築いて繊維工場を買い取り、従業員を雇うまでに成功した。エドワードは工場長として市場に羊毛の買い付けに行くようになり、気鋭の若手商人として業界で名を馳せるまでになった。一方、共同経営者である弟ウィリアムとティモシーはエドワードの部下として酷使された。ティモシーと違い、兄の命令に抵抗を示すウィリアムに対し、エドワードはこめかみを殴り、さらに息が出来ず絨毯に倒れるほどまで殴り続ける。

Edward stood with a cold smile and as he passed him dealt him such a blow on the temples as felled the young man like a shot. and gave ample evidence of the power of the dealers arm. Tim was already busy plodding at the desk. William lay almost breathless on the carpet. and Edward shutting the door with a scornful laugh strode along the passage to the door.... (*Works* 2: 50)

また別の場面では、ウィリアムが書いていたオクタボ（八折判）の紙を暖炉の火の中に放り込み、怒りに耐えきれず立ち上がる弟に兄はなおも怒りを爆発させ、弟の抵抗は挫かれる。

Walking up to the confused William he turned over these papers took therefrom a small. blue and white post Octavo and hurled it with a laugh of scorn into the warm blazing fire William half choked with awe and anger rose and spurned his seat from him but his Tyrannical superior at once opened against him all that full torrent of. threats and hectoring and. fury.... (*Works* 2: 58)

これらの場面は、後述するようにシャーロットが後に『教授』で描くクリムズワス兄弟（エドワードとウィリアム）の暴力的なシーンと重なり合う。ブランウェルが姉のシャーロットに与えた影響として最も顕著なものと言えるであろう。これらの暴力的なエピソード

ドのみならず、繊維工場やその会計事務所といった舞台設定も、後にシャーロットの初期作品や小説において描き継がれることとなるが、これら「羊毛は高騰する」におけるヨークシャー州羊毛産業の歴史的側面については、次章で考察する。

2. 「陸軍元帥アレグザンダー・パーシー閣下の生涯」

「閣下の生涯」は、「羊毛は高騰する」の翌年 1835 年から 1836 年にかけて書かれた。

「羊毛は高騰する」が息子のエドワードを主人公に描いているのに対して、父親であるアレグザンダー・パーシーの生い立ちに遡り、アレグザンダーと彼の父エドワードとの確執を中心に描いている。「閣下の生涯」の語り手は「海賊」の語り手と同じくジョン・バッド大尉で、アレグザンダーの幼い頃からの家庭教師であり、彼が出世するまでの道のりを具に見てきた人物である。パーシー家はもともと略奪行為を行って一族から追われた家系であり、父親エドワードは貧しい小作農から年貢を搾り取り、自らは贅沢な生活をする暴君である。⁶²そのような父の元へ、アレグザンダーは一人息子として生まれた。アレグザンダーに愛情を降り注ぐ母ヘレンとは対照的に、父エドワードは息子に対して常に冷徹で厳しい。アレグザンダーが父親殺しに加担するまでの道のりは、以下の通りである。

18 歳になったアレグザンダーは海をこよなく愛し、悪天候の中でも航海できるようにとある時家を飛び出し、嵐の海を放浪する。⁶³数週間後に帰ってきたアレグザンダーを父親は酷く叱り、今度許可なしに家出をした時は命がないものと思え、と息子を脅す。息子の反抗的な態度に顔面を殴りかかろうとした父親に腹を立てたアレグザンダーは、もう一人の家庭教師で悪党のスデスから、「父親を殺せ」と扇動され、父の屋敷を抵当にキャバシム卿から多額の借金をし、家を出てスデスと共に放蕩生活を送る。しかし、了承を得ずにオーガスタと結婚した息子を、父は裏切り者のスデスと共に謀して力づくで馬車に乗らせ拉致し、「哲学者の島」(Philosophers Isle) に送り込み、無理やり大学に入学させる。⁶⁴優秀な成績を修めた後に何とか島を脱出したアレグザンダーに、オーガスタ、ス

⁶² ブランウェルの父方の祖父 (Hugh Brunty) は文盲の労働者で小作の時期もあり、大家族を養っていた (Collins 213, n. 6)

⁶³ 執筆年は前後するが、「海賊」においてアレグザンダーは海賊を生業としていることから、彼が航海に長けていた理由が、ここに描かれている。

⁶⁴ アレグザンダーが大学からオーガスタに宛てて送った長文の手紙には大学の様子が描かれており、ブランウェルが父パトリックから聞いたケンブリッジ大学での厳しい学業生活が反映されている。またアレグザンダーが結成した秘密組織の誓約には「すべての宗教的信条と信仰様式の完全な絶滅」が掲げられていることから、アレグザンダーの学生運動は「教会と国家の破壊」に捧げられていたと Neufeldt は分析する (“Alexander Rougue/Percy. Part1” 208)。

デス、キャバシム卿らは父エドワード殺害の計画を持ち出す。キツネ狩りで落馬し負傷したエドワードを殺害すると言うのだ。オーガスタにとっては表向きには夫の多額の借金を返済するための、遺産金目当ての殺害であるが、本心は結婚を反対した義父エドワードへの復讐である。

殺人の実行犯はスデスであり、看病をするアレグザンダーの母親に気づかれないように寝室に侵入し、父エドワードは絞殺される。アレグザンダーの母は、息子による父親殺しを疑っているが、息子への愛情によってその疑念は抑えられる。一方、借金返済を巡って妻オーガスタを毒殺されたアレグザンダーは、それ以来、冷淡な無神論者でメランコリックな性格に変化する。「羊毛は高騰する」に父親として登場するアレグザンダー・パーシーのメランコリックな性格と一致するのである。

最終章ではアレグザンダーが再婚し、最愛の妻マライアとの間に生まれた子供が、両親から引き離され頼るすべもなく困難と病苦に苦しむ姿が、衰弱で死にゆくマライアの言葉で語られ、「羊毛は高騰する」に登場する父から捨てられた兄弟（エドワードとウィリアム）のエピソードへと繋がっていく。⁶⁵

And at other times she would waste herself in tears of bitterness over Her children whom she should never see again and who in all the storms and dangers of life would be tossed and threatned without a Mother or any knowledge of one—without a father or with one worse than the bitterness for she pictured them in distress and sickness but there was none to help them and the heart of this Dying Mother yearned in vain toward those who thought not of her and who she felt would if they lived look upon her grave as if no Mother lay buried there[.] (*Works* 2: 187)

マライアを亡くした後、アレグザンダーはより陰鬱で邪悪な性格になり、賭博や家畜商で稼ぎ放蕩生活を送る。前章で考察した「海賊」に既に描かれたように、アレグザンダーは海賊として 16 年間過ごしたのちゼノビア・エルリントンと結婚し、エルリントン卿と

⁶⁵ アレグザンダーとマライアの間には 3 人の息子エドワード、ウィリアム、ヘンリーと娘マライアが授かるが、ヘンリーは早くに亡くなり物語の舞台から消える。

して貴族の仲間入りを果たし、物語が円環的に繋がる。グラスタウン・アングリヤ物語において姉弟が生み出したキャラクターの人物造形や相関関係は作品を追うごとに肉付けされ、時には時代を遡って新しい歴史的背景が書き加えられながら、物語世界は膨張し続けたのである。

このようにブランウェルの 2 作品では、2 世代にわたり父の息子嫌いが受け継がれ、そのことが兄弟間の確執へと繋がっていることが示されている。Ratchford は、パーシーが息子を嫌う動機として、「息子二人が自分の悪魔的特徴を受け継いだと信じていた」(142)と推論する一方で、Melodie Monahan は「父と息子の間における権力闘争はギリシア神話のオイディプスを彷彿させる」(16)とした。また片山は、ソポクレスの劇『オイディプス王』に取材し、アレグザンダーが息子たちを捨てて殺そうとしたことは、オイディプスが赤ん坊の時に遺棄されたことが父親殺害へと繋がっていくことを想起させると分析した (59)。

「閣下の生涯」における父から息子への憎悪は、息子から父に対する憎悪を招き、アレグザンダーの悪魔的性格の土壌を形成した。⁶⁶アレグザンダーは「哲学者の島」からオーガスタにあてた手紙の中で、父親を悪魔と呼び、心の底から嫌っており、自らもまた Lucifer つまり悪魔であると打ち明ける。

Augusta—I HATE, my Father. I hate him he is a demon....I have beheld nothing about him but his Black Billious passion Brutal temper and base crafty dishonesty....I am—Alexander Percy...a Bodily incarnation of Lucifer himself! Augusta if there be a Satan I am He!! (Works 2: 131-5)

Neufeldt と Collins は共に、ブランウェルの散文や詩においてパーシーが Lucifer と形容される箇所が他にもあることや、atheism という言葉が実際に使われていることから、パーシーの無神論をブランウェルの無神論と同一視した。一方 Barker も同様にパーシーの無神論と悪魔的化身の関係性を見出したが、ブランウェル自身が無神論者であったことを示すものではないとした (205)。ブランウェル研究を代表する 3 人のうち、男性二人

⁶⁶ Collins は *The Hand of the Arch-Sinner* (1993) において、ブロンテ姉弟妹はミルトンの『失楽園』を熱心に読んでいたことに触れ、アレグザンダーは闇の大天使 (the Dark Archangel) の役割をしており (Intro. 29)、またブランウェル自身が Lucifer に関心を持っていたことを示唆した (Intro. 32)。

はパーシーと同様にブランウェルも無神論者と見なしたが、女性である Barker がそれを否定したことは大変興味深い。⁶⁷ブランウェル自身が無神論者であったかはさておき、「羊毛は高騰する」においてアレグザンダーは、父と同じ名前であるエドワードと長男を名付けることから、悪魔的父性の息子への遺伝が暗示されている。この悪魔的特徴が、パーシーの息子たち、とりわけ兄のエドワードに引き継がれ、兄弟間の確執がシャーロットの初期作品にも取り入れられたのである。

シャーロットは「呪い」(1834)において、エドワード・パーシーとウィリアム・パーシーが父親から忌み嫌われて捨てられたというプロットを下敷きに物語を進めている。また、4年後の1838年に書かれた「ザモーナ公爵」においても兄による弟いじめを描いた。中でも、兄の虐待に耐え忍ぶ弟の姿は、『教授』のウィリアム・クリムズワス (William Crimsworth) が兄からの虐待に耐える心情と重なる。その後、1840年頃に書かれたとされる「アッシュワス」において、兄弟間の確執のモチーフは肉付けされて新たな様相を呈することになるのだ。

3. 「呪文」と「ザモーナ公爵」

ここからは、シャーロットの初期作品及び後期小説における、兄弟間における確執のプロットの変遷を辿る。シャーロットが最初に描いた兄弟は、「若者たちの劇」や「島人の劇」において、ウェリントン公爵の二人息子として登場するアーサー（後のザモーナ）とその弟のチャールズである。チャールズはシャーロットの物語のペルソナとして後にチャールズ・タウンゼントという名前に変わるが、兄の私生活を詮索して暴くことから、兄弟の関係は不仲になる。⁶⁸「呪文」もチャールズの詮索好きが高じて書かれたもので、ザモーナには実は双子の兄ヴァルダセラがいて時々入れ替わっていたことを、語り手のチャールズが暴くというものであるが、シャーロットは、「羊毛は高騰する」で描かれたエドワードとウィリアムが父親から忌み嫌われ捨てられたというプロットを前提に物語を進めている。「邪悪で不当な裁き」により父から絶縁された兄弟たちは、それぞれが結婚し子どもを持ちヴェルドポリスで社交生活を送る。兄エドワードは雄弁で超人的な運動能

⁶⁷ パーシーあるいはブランウェルの無神論については、偽説教師によるメソジストの風刺とも関係することから、第6章にて扱う。

⁶⁸ シャーロットのペルソナであったチャールズが、弟の立場を利用して兄の私生活を物語にする、という創作上必要な前提条件であっただけで、ライヴァル関係は認められない。

力を備えており、弟ウィリアムは知性と教養を備えた若くてエレガントな商人という特徴もこの小説において肉付けされた。また、ウィリアムは「一人でいる時はその才能や教養が光るのに、いつも兄と一緒にいる時しか現れないので、存在感が殆どない」と語り手は述べる (*Tales of Angria* 138)。語り手は物語の最後に脇役たちに触れ、兄の下で働くことをやめ、軍人となったウィリアムはセシリアと結婚し、またヤング・ロウグ (エドワード) は東の商人として成功を収めたことを付け加える。

4年後の1838年に書かれた「ザモーナ公爵」では、エドワードとウィリアムの関係は顕著に悪化しており、兄による虐待に耐え忍ぶ弟の姿が描かれる。兄エドワードからの残酷な扱いに死ぬまで無関心さを装い、苦しさを胸の内に封じ込めようとする弟の悲痛な叫びは、『教授』のウィリアム・クリムズワスがエドワードからの虐待に耐える心情と重なる。

Edward overwhelmed me by his strength and bulk. He used his power coarsely, for he had a coarse mind....I always affected indifference to his savage, hard, calculating barbarity, and I always will affect indifference to it to my dying day. But if there be a power superior to humanity, that power has witnessed feelings wringing my heart in silence which will never find voice in words. (*Tales of Angria* 181-2)

先に考察したブランウェルの2作品が暴力的な兄、また父に焦点を当てていたのに対し、シャーロットは兄からの虐待に耐え忍ぶ弟の姿に視点を移し、力により押し殺され言葉にされなかった彼の声について初めて言及した。シャーロットが兄と弟の主従関係において虐げられる弟の側を描き出すことにより関心を示し、そこからプロットを発展させようとする模索が見られる箇所であろう。この虐げられる側の弟は、後に『教授』において主人公にまで昇格するのである。

4. 「アッシュワス」

アングリア物語におけるシャーロット最後の中編物語「キャロライン・ヴァーノン」 ('Caroline Vernon,' 1839) と『教授』の間に書かれたとされている「アッシュワス」

(1840-41) は、Monahan が博士論文において初めて分析を行った。彼女は、ハーヴァード大学やニューヨークのピアポント・モーガン図書館が所有していた‘Mr. Ashworth and Son’というタイトルの断章を探し出し、それらを繋ぎ合わせ、詳細な解説と共に修正および無修正テキストを編纂し学会誌にて論文を発表した。⁶⁹

こうして初めて研究者の目に触れることとなった物語は、Monahan によって通称‘Ashworth’と呼ばれるようになった。物語は、ヨークシャー州ウェスト・ライディング地区に住むアレグザンダー・アッシュワース卿についての伝聞をもとに、語り手が回想するという形式をとっている。アッシュワースという名前は、アレグザンダー・パーシーの別名でもある。彼には一人息子がいたが、父と息子の間には常に誤解が生じ、教育を与えるためにではなく、息子を遠ざけるためにイートン校、そしてオックスフォード大学にやる。

ロンドンでの長年にわたる放蕩生活を終えた息子のヤング・アッシュワース (Young Ashworth) は、アッシュワース卿が亡くなったため、後継者となるべく屋敷に戻り結婚する。その後二人の息子を儲けるが、赤ん坊は家畜小屋にやられ、粗野な田舎の子どもらと一緒に育てられた。アッシュワースは存在すら忘れたかのように息子たちに興味を示さず、またその振る舞いに対する周囲の非難も気に留めなかった。母親だけは時々様子を見に行ったが、いつも涙を浮かべて二度と会うまいと悲嘆にくれた。そのうち屋敷の使用人たちの間で、アッシュワースは二人の息子に嫌悪感を抱いていると噂される。語り手はこの嫌悪感について、「キャサリン妃 (ロシアのエカテリーナ女帝) が息子であるパウロ (パーヴェル) を嫌ったのと同じ理由によるものである」との見解を示す。

By degrees, it began to be whispered amongst the servants and tenantry that Mr. Ashworth had an antipathy to his children, and it was said that he had resolved never either to own them or see them....Mr. Ashworth's feelings must, I should think, have resulted from the same principle which caused the Empress Catherine's hatred of her son, Paul. Whatever was his motive, it was one which influenced him through his whole life: he never owned his sons, he

⁶⁹ この論文 (“*Ashworth: An Unfinished Novel by Charlotte Brontë*”) は長らく学会誌に埋没されていたため研究者たちの目に留まらず、ブロンテ研究者の間でも殆ど知られていなかった。「アッシュワース」の論考が開始したのは、オンラインで閲覧できるようになった 21 世紀に入ってからである。

never spoke to them, he never extended to them the aid of a farthing.

(Monahan 87)

この「息子であるパウロを忌み嫌うキャサリン妃」に関する史実について、シャーロットがどこから情報を得たかについては明らかにされていないが、Monahan はパウロの容姿と性格が父親と似ていた点を指摘する (qut. in *EW* 291, n. 6)。舞台をアフリカからイギリスに移し、「子を忌み嫌う親」の根拠について、史実に基づいているかのようなエピソードを挿入することにより、空想的な初期作品世界から移行して現実世界で物語を紡いでいこうとする姿勢が窺える。

その後女兒が誕生するとアッシュワスは喜び、屋敷で育てることにするが、出産して間もなく妻メアリは病気で他界する。独身時代からの借金を返済することできず、破産勧告を受けたアッシュワスは屋敷を手放し行方をくらます一方で、存在を忘れ去られた二人の息子の面倒はアッシュワスの母親が見ることになる。この後アッシュワスは「扇動者、牛の仲買人、騎手 (“demagogue, cow-jobber, and horse jockey”）」(Monahan 93) の三つの職を掛け持ち、家畜商で大儲けし 16 年のブランクを経て帰郷した後、議員になって議席を勝ち取るという最後の野心に燃える。

その後エドワードとウィリアム兄弟は、祖母によりハロー校に通わせてもらうが、祖母が亡くなったために大学へは行けなくなる。好戦的で喧嘩好きな兄に対して、弟ウィリアムは感情を表に出さない性格であった。エドワードはウィリアムと喧嘩する際、相手を手中に収めてもなお、口と鼻から血が噴き出すまで殴り続けることさえあった。先述したように、ブランウェルの「羊毛は高騰する」で描かれた兄弟の暴力的なシーンがここでも描き継がれている。エドワードが 18 歳、ウィリアムが 17 歳になった時、彼らの祖母が亡くなり、経済的支援が絶たれハロー校を退学する。天涯孤独になった彼らは貧困と握手し、食べる物、着る物もままならず苦境の道を歩むこととなる。この後物語は、父親から愛情を受け、ロンドンの私立寄宿学校に通う妹、アッシュワス嬢の話に移る。⁷⁰

シャーロットは「アッシュワス」の草稿の一部を 1840 年にハートレイ・コールリッジに送り、助言を求めた。コールリッジからの返事は残っていないが、シャーロットの書簡

⁷⁰ アッシュワス嬢は寄宿学校で、貧しさゆえに使用人として働きながら寮生活を送るエレン・ホールと出会う。彼女は孤児であり、ジェイン・エアの原型の一つと考えられている。

において「過剰に複雑な物語の発展と人物造形を批判し、雑誌向けの物語というよりは、本格的な小説に適している」という内容の返答であったことが記されている (Smith and Rosengarten, Intro. VIII, n.7)。その後本格的な小説に挑むべく 1844 年から 45 年の間に執筆された『教授』は、6 つの出版社から断られ、7 度目に送ったスミス・エルダー社からは採用不可の理由を説明する丁寧な手紙が送られた。出版交渉が難航する中、『教授』の執筆後に書かれた『ジェイン・エア』の交渉はスムーズに行き、1847 年 10 月に出版されるや否や、ベストセラーとなった。一方再び出版社から『教授』の書き直しを求められたシャーロットは、1847 年 12 月に新しい序文を次のように修正した。主人公クリムズワスの知人である語り手が、様々な出版社から断られたクリムズワスの原稿を譲り受け、その最初の 7 章分を挟みで切る。そしてクリムズワスの生い立ちを簡潔に説明する、という大胆な改変である (Smith and Rosengarten, App. 295)。兄弟間の確執が描かれた小説の冒頭部分を全て削除する行為は、拒み続けられた作家の出版社に対する抗議活動とも解釈できる。この出版社に対する当てつけのような序文に、シャーロットが兄弟間の確執だけはアングリヤ物語の遺産として小説に持ち込みたかった、というこだわりが色濃く表れているように思われる。その後もシャーロットは序文の書き直しに取り組み続け、紆余曲折を経て『教授』は 1857 年に出版された。実に、シャーロットが最初に出版交渉を始めてから 11 年後、没後 2 年後のことである。

5. 『教授』

『教授』では、全 25 章のうち最初の 6 章を割いて兄弟間の確執が描かれ、7 章からはシャーロットのベルギー留学体験、中でも特に恩師 Constantin Heger との交流を下敷きに物語が展開する。主人公のウィリアム・クリムズワスの父は工場経営で巨額の富を築いたが、亡くなる前に破産する。母親は貴族の出身であったが、父との結婚を反対していた兄たちは妹に手を差し伸べることなく、母はウィリアムを産み落として亡くなる。その後、10 歳年上の兄と一緒に父方の親戚に育てられるが、ウィリアムが 9 歳の時に母の兄に引き渡され、イートン校に通う。兄のエドワードは工場主の娘と結婚し、工場の経営者として成功する。やがてイートン校を卒業したウィリアムは、母の兄から屋敷での生活や教区牧師としての仕事を提案されるも拒否し、母が死に瀕している時に一切援助しなかった叔父のシーコムらとも縁を切り、商売で身を立てるべく、工場長である兄に職を求める。

2 章から始まる兄の工場での事務員生活において、ウィリアムはエドワードから度重なる言葉の、或いは身体的な暴力を受ける。宴会で知り合った工場主で起業家のハンズデンは、兄からの虐待に抗わずに耐えているウィリアムのことを ‘*automaton*’あるいは‘*fossil*’ (*Professor* 30) と呼び、彼の中に眠る貴族的な気質を目覚めさせ、知的向上心を掻き立て、商売人として身を立てることを諦めさせようとする。兄からの虐待をウィリアムが吹聴していると勘違いした兄は、弟を呼んで暴力を振るう。

He took down the heavy gig-whip hanging beside his Mackintosh....He flourished his tool—the end of the lash just touched my forehead. A warm excited thrill ran through my veins, my blood seemed to give a bound, and then raced fast and hot along its channels; I got up nimbly, came round to where he stood and faced him....‘Sirrah! Sirrah!’ reiterated Crimsworth, and to complete his apostrophe, he cracked the whip straight over my head.

A minute sufficed to wrest it from him, break it in two pieces, and throw it under the grate; he made a headlong rush at me, which I evaded, and said:

‘Touch me, and I’ll have you up before the nearest magistrate.’ (35-6)

エドワードが振りかざした‘*gig-whip*’（一頭立て二輪馬車の鞭）の先端は、ウィリアムの額にあたる。なおも頭から突進して来ようとする兄を躲し鞭を二つ折りにして火床にくべ、「今度触れたら判事をよぶぞ」とウィリアムは言う。この後、ウィリアムはようやく兄への隷属から逃れることを決意し、ハンズデンの助言を受け入れ、ベルギーで英語教師としての道を歩む。

シャーロットがこだわり続けた冒頭の6章が出版者たちにとって目障りであったことは否めないであろう。⁷¹また当時彼らがブロンテ初期作品について知る由もなく、工場主である兄とその下で酷使される教養のある弟とのライヴアル関係について描き置くことがどれほどシャーロットにとって重要であったかについては、初期作品が編纂され流布される

⁷¹ Barker は、非難された冒頭部分は最も欠陥の多い箇所であり、ブランウェルの「羊毛は高騰する」の単なる改作 (adaptation) にすぎないと断言した。また引用した兄から弟への暴力を描いた箇所については、アングリシア世界からの束縛を払拭できずゴシック風の大袈裟な表現を使うという、いつもの悪癖に陥ったとまで酷評した (500)。

ようになった 1990 年代以降の読者にしか理解されないのである。最新の研究では、エドワードとウィリアムとの間に同性愛を読み取るクィア批評もある。たとえば Deborah Denenholtz Morse は先ほど引用した箇所において、兄からの暴力にウィリアムが男性として興奮し (“warm excited thrill”)、二つ折りにされた鞭に去勢された兄を読み取った。ウィリアムにベルギーでの職を紹介するハンズデンに両性具有的な特徴を読み取る論文はこれまでもあったが、⁷²敵対する兄弟の側にも同性愛を読み取る研究は初である。⁷³いずれにせよ、シャーロットは『教授』において、アングリシアの世界を抜け出て現実世界を描こうとするだけでなく、ブランウェルが十分描き尽くさなかった虐げられた弟の側に焦点を当てることでブランウェルとの差別化を図り、新しい男性像を描くことに挑戦しようとしていたのである。

* * * * *

シャーロットは、「アングリシアの最後に」(‘Farewell to Angria’, 1839) という短い随筆において、アングリシアの世界との決別を表明し、慣れ親しんだ登場人物を自分の作品から幕引きさせ、新しいもっと「涼しい」地方を描くことを決意した。にもかかわらず、シャーロットにとってエドワード、ウィリアム・パーシー兄弟のテーマはお気に入りを通り越してオブセクション（呪縛）であった (Ratchford 185)。このことについて Alexander は、プロットにおいて自信や興味がなかったシャーロットは、プロットの発案においてブランウェルが先導してきたアングリシア世界に頼るしか術がなかったと分析する (EW 210)。しかし、『ジェイン・エア』で小説家としての地位が確立した後に書かれた『シャーリー』においても、エドワードとウィリアムの関係には、工場経営者であるロバート・ムーアとその弟で元家庭教師のルイ・ムーアに置き換わり、暴力を伴う対決は無いものの、結果的に兄が求婚した女性と弟が結ばれることから、ライヴァル関係が認められるのである。

⁷² Sandra Gilbert と Susan Gubar の *The Madwoman in the Attic* (332) 、Patricia Ingham の *The Brontës* (148) を参照。また渡千鶴子は、ハンズデンが性的マイノリティ (LGBTQ+) であった可能性についても示唆する (14) 。

⁷³ Morse は、序章にも着目し、イートン校時代の友人チャールズに宛てて書いたウィリアムの手紙の中に同性愛的関係を、ウィリアム、ハンズデンとフランシスの間に三角関係を認めた。また物語のエンディングにも着目し、息子をイートン校に送ることにより、息子もまた同性愛を感じる友人と出会うかもしれないことを示唆していると分析した (123) 。

兄弟間の確執を、ブロンテ姉弟の間の作家としてのライヴァル関係に求めようとする試みも考えられよう。たとえば Drew Lamonica は、シャーロットはブランウェルとの個人的かつ芸術的な関係の本質を問うために、兄弟のライヴァル関係を用いたと分析する(43)。そもそも、初期作品のきっかけとなった 12 個の兵隊人形の中からシャーロットとブランウェルが選んだ兵隊に、それぞれウェリントン、ボナパルトと名付けたことから、姉弟の創作世界における出発点は、歴史上のライヴァル関係にあったことがわかる。以来、姉弟は互いの作品を読み合いながら次々と新しい登場人物やプロットを産み、発展させ、また互いの作品に触発され、競い合いながら物語を書き続けた。この姉弟間の創作活動上のライヴァル関係が、結果として長期間にわたって二人が共作して物語を書く原動力になったことは自明であろう。Neufeldt は姉弟が物語を書き進める上で筆を奪い合う様子を競馬に喩えて、ユーモアを込めて“jockeying for control of the narrative”と表した(“Alexander Rouge/Percy. Part 1” 191)。さらには、作家同士のライヴァル関係もまた、彼らのコラボレーションの醍醐味であった(Lamonica 46)とする見解にも、至極納得がいくのである。

先述したように、「グラスタウン・アングリア物語」を共作していた時代は、プロットの発案においてブランウェルが先導し(Alexander 210)、彼はシャーロットの文学的成長に形成的な影響(“formative influence”)を与えた(Lamonica 43)。また父パトリックは、娘たちには家庭で教育を与えながら寄宿学校にも通わせたが、ブランウェルにだけは自らが教鞭を取り、娘たちには教えなかったラテン語を教え、ホラティウスやヴェルギリウスを読ませていた(Gérin 21)。パトリックは美術や音楽といった芸術教育にも力を入れ、とりわけブランウェルに優先的にレッスンを受けさせた。これらのことからシャーロットが、才能に恵まれ優遇されていた弟に嫉妬していた可能性もあるのではないかと、Morse は推察する。しかし、シャーロットとブランウェルは互いの才能を認めつつ、切磋琢磨しながら初期作品を紡いできた。物語の中のペルソナを通じて互いに批判しあうことはあっても、それは確執や嫌悪といったものではなかった。⁷⁴したがって、伝記的事実と兄弟間の確執との関係性を認めることは難しいのである。

⁷⁴ Sanders は、ブランウェルの非現実的な野心と抑えきれない性格に魅了されながらも、シャーロットの後期小説に登場するヒロインには男兄弟がいないと指摘する(*The Brother-Sister Culture* 46)。

一方親から捨てられた子供、と言う観点から考えると、母親と二人の姉を幼い頃に亡くし、叔母エリザベスが育児の応援に来てくれたとはいえ父親も教区牧師として多忙な日々を送る中、ブロンテ家の子どもたちが多少なりとも不安を感じながら幼少期を過ごしていたことは容易に想像される。また、母親の不在と父から理由なく捨てられた赤ん坊のモチーフには、生育過程において全般的に子どもたちが感じる存在的不安（‘ontological insecurity’）が投影されているとも考えられよう。⁷⁵ 当時はナポレオン戦争の影響や貧困などから、孤児が社会問題となっていたことも関係しているだろう。こうした様々な要因が重なり合った結果、父性も母性も知らずに育った兄弟とその確執を深堀りすることに、シャーロットは並々ならぬ関心を寄せた。赤ん坊を遺棄し、育児を放棄してその養育を親戚や他人に任せる姿を描くことを通して、子育てを問うているのである。ブランウェルとの共作時代に生れた廃嫡する父親像に端を発し、兄弟間の確執のプロットをシャーロットが大切に育み続け、作家として成功した後の作品においても、これら一連のプロットを描き続けたことは注目に値すると同時に、ブランウェルがシャーロットに与えた最も顕著な影響の表れであると言えよう。一方ブランウェルはというと、「閣下の生涯」以降の作品に兄弟間の確執のテーマを登場させてはいない。その理由は「羊毛は高騰する」において兄エドワードの出世物語を描き上げることによって、兄弟間の確執のプロットはブランウェルにとっては役割を終えたからだと考えてよいだろう。彼の関心は以後、長編「アングリヤとアングリヤの人々」に見られるように、戦争や陰謀を如何に長く描き続けるかに向けられたのである。

兄弟間の確執のモチーフの原点となった「羊毛は高騰する」には、『教授』や『シャーリー』に登場するような繊維工場やその会計事務所といった舞台設定の他、ヨークシャー州の羊毛産業といった歴史的側面も描かれている。これらを踏まえて、次章では「羊毛は高騰する」についてさらに深く考察していくことにする。

⁷⁵ Carol Bock, “Our Plays” 51

第4章 「羊毛は高騰する」における羊毛投機の表象

「羊毛は高騰する」(1834)には、前章で扱ったようにシャーロットが作家としてこだわり続けた兄弟間の確執のモチーフの起源とされる、父親が遺棄した二人の息子が反目し合う兄弟へと発展するプロットがある。この兄弟間の確執の観点から本作品に言及する研究はあっても、羊毛投機を通して描かれる社会状況や、本作品における語りの構造については論じられてこなかった。⁷⁶Neufeldt は、ブランウェル全集第2巻の序論において、ブランウェルが羊毛産業に関する知識を豊富に持ち、紡績工場や工場事務所を物語に取り入れていた着眼点について評価した。⁷⁷また、2017年と2018年の二度に分けて英国『ブロンテ・スタディーズ』に論考“Branwell Brontë’s Alexander Rougue/Percy. Part 1, 2”を發表し、「羊毛は高騰する」についてパーシーの無神論 (atheism) とブランウェルの無神論との関係性から論じた。「羊毛は高騰する」の草稿とされる断片は題名が特になく、Neufeldt 版では‘meeting of some of our liberal and moderate. Members of Parliament’、また Bob Duckett が編纂し Mary Butterfield が写本を行ったブランウェル作品集では、‘The Combing Shop’と呼ばれている。⁷⁸2021年に Duckett は、‘The Combing Shop’の clear テキストを再び編集し、解説と共に *The Bradford Antiquary* に掲載した。この中で Duckett は、ハワースの住人の多くが従事していた羊毛梳き (combing wool) の劣悪な労働環境について指摘し、ブランウェルがその状況を具に見て作品に取り入れたと再評価した (62)。また、ハワース在住のブランウェルの知人の中には羊毛業を営んでいた者も複数いて、中でも繊維工場主の兄弟である Hartley and Michael Merrall が、エドワードとウィリアム・パーシーのモデルである可能性について示唆した (63)。

本章では、「羊毛は高騰する」とその草稿の断篇を分析することにより、ヨークシャーの羊毛産業に早くから着目し、羊毛業に携わる職人の労働環境や、原料である羊毛の調達

⁷⁶ ブランウェルの初期作品における語りは非常に不安定であり、視点も途中で変わることがある。シャーロットに関しては、初期作品における「信頼できない語り手」について分析がされている (岩上 264)。

⁷⁷ 「羊毛は高騰する」の4年後にシャーロットが書いた「スタンクリップ・ホテル」(‘Stancliffe Hotel’, 1838)において、衣服商を意味する“closiers” (77) エドワードの工場の細長い煙突を指す“Edward’s tobacco-pipe” (116)、酒場の名前には“Woolpack” (77) “mad mechanics and desperate operatives” (115) といった紡績産業を指す言葉が使われている。また、シャーロットの小説『シャーリー』には、1811年から1812年にかけて実際に起こったラッドライト運動 (機械打ち壊し) に取材した紡績工場の襲撃が描かれる。

⁷⁸ Duckett が編纂した *Brother in the Shadow: Stories and Sketches by Patrick Branwell Brontë* (1988) は、Neufeldt 版と違い、修正して読みやすくした clear テキストである。

方法や高騰する羊毛への投機熱というミクロな視点から、当時の人々の暮らしを描き出そうとしたブランウェルの着眼点を明らかにする。また、信憑性の高い語りを目指しつつ、読者の「読み」を軌道修正するために作品に介入する語り手についても考察し、シャーロットの小説『シャーリー』の語り手と酷似する箇所を比較検討する。語りの不安定さがあるものの、本作品は初期作品の中でも簡潔で分かり易く、一般受けしうる娯楽性の高い作品であることを明らかにしたい。

1. 「羊毛は高騰する」と羊毛梳き職人

本作品の正式名称は‘The Wool Is Rising or The Angrian Adventurer: A Narrative of the proceedings of the Foundation of the Kingdom of Angria’であり、副題が示すように冒険物語と、アングリア国の建国物語の二つのプロットからなる。内容としては、ブランウェル全集第1巻の最後に収められた「侵略戦争」の続きとなっている。⁷⁹本作品の語り手はリチトン城主ジョン・フラワー男爵（Baron Flower）で、この語り手は登場人物でもあり、物語の最後では栄爵に昇任される。フラワーは物語の随所で介入し読者に語り掛け、ストーリーテラーとして自己主張する中に、ブランウェルの遊び心と、語りの技法を鍛錬しようとする試みが見え隠れする。

物語の冒頭は、ノーザンガーランド伯爵が自邸のエルリントン・ホールの書斎で物思いにふけるところから始まる。階下では宴会が催され、その喧騒を逃れるために書斎に引きこもっている。後に語り手は、登場人物がいる場所について詳しく説明しなければ読者は曖昧模糊とした状態に陥ると述べ、ここでも書斎の内装について詳細に語る。エルリントン・ホールは貴族らしい荘厳さと田舎の落ち着いた心地よさを併せ持っており、トルコ製の絨毯が敷かれニューファウンドランド犬が暖炉の前で心地よさげに暖を取っている書斎で、ノーザンガーランドは本を取り出し、海賊船ローヴァー号の船長であった頃を回想し詩をしたためる。詩を書くという行為も貴族の特性を示しており、「海賊」の主人公ロウグが貴族へと変化を遂げたことが冒頭で強調されている。

⁷⁹ 「侵略戦争」は2巻からなり、第1巻ではグラスタウン連邦へのフランスの侵攻とドゥアロウ侯爵とエルリントン卿の軍事的指導力に対する反乱、グラスタウン連邦国民のアングリア州への撤退や、国王たちによる国防に必要な資金提供の拒否などが描かる、第2巻では、首相の処刑や閣僚の追放と国王の投獄が行われ、ドゥアロウとエルリントンの功績によりフランス軍が撤退する。これを境に、グラスタウン連邦から新国アングリアへと物語の舞台が移行する。

詩を書き終わったところへザモーナ公爵が書斎を訪れ、アングリア新国を建国する意思を伝えるや否や、ノーザンガーランドはすぐさま議会に急行し、ザモーナを新国の国王に推挙する演説を行う。この後ザモーナも義理の父であり協力者であるノーザンガーランドを讃える演説を行い、他の議員による演説も続き、新しい国家の建国に関する投票が行われ、可決される。これによってヴェルドポリスは無政府状態を免れ、アングリア党は惨敗と流血による勝利を免れる。

ザモーナ新国王が国民から歓声を浴びせられる一方で、義父であるノーザンガーランドは突如として不吉な面持ちになり、「ヴェルドポリス人よ、お前たちは奴隷だ。」と罵り、出エジプト記に登場するユダヤ人に喩え、暴言を吐く。夫の心に潜む闇（darkness）に常々慣れている妻のゼノビア（Lady Zenobia）も、夫が *demonical despair* に襲われたことに驚く。これを境に、ノーザンガーランドは、物思いにふけて自分の世界に引きこもる幾つかの場面を除いて、物語の本筋から姿を消す。さて、アングリア国建国の場面の最後は、事の成り行きに不満を示す暴徒がフィデナ卿を襲撃するも、エドワード・パーシーと、スデスによって卿が一命をとりとめる場面で幕を閉じる。

ここでようやくこの物語の主人公である、アレグザンダー・パーシー（ノーザンガーランド）によって捨てられた長男エドワード・パーシーとその弟が描かれる。父アレグザンダーは、彼の手下であり軍人のスデスに、息子二人を殺すように命じるが、スデスは兄弟二人を連れだし、殺さずに生かした。この場面は前章で既に引用したが、ブランウェルはこのエピソードについて、後に書いた「アングリアとアングリアの人々」においても繰り返し説明していることから、父により廃嫡された息子たちが逆境の中、自活し生きながらえるプロットに執着していたことは自明であろう。⁸⁰兄弟らはその後様々な困難をくぐり抜け、兄のエドワードは羊毛梳き商会を始め、その下で弟のウィリアムと監視役のティモシー・ステイトン（Timothy Steaton）は働いた。この羊毛梳き（comber）という職種について、「羊毛は高騰する」の草稿である「寛容で謙遜な国会議員たちの会合」においてどのように描かれているのかを見てみよう。ここでは、ある夜フラワーが議員に会いに行く途中薄汚れた路地で道に迷い、エドワードが営む羊毛梳き商会だけが明かりを灯していたことから、立ち寄って道を尋ねようとする。

⁸⁰ '[H]is capricious temper hated the idea of looking on men as his children so he commissioned the hoary Bloodhound 'Sdeath to destroy them, but the villain only secreted them[.]' (*Works* 2: 660)

[C]arts and lumber. passed upward allong a narrow filthy lane till I reached a comparitively wide. courtyard formed by. the Back settlements of a tavern. the end of an old wall. the rear. of a desolate factory and the front of a ruinous combing shop. above amid the dark murky air the vast chimneys of. half a dozen old mills puffed out their black smoke against. the yellow stifled heavens. through the whole of the humble. square. no human being scarcely a trace of one existed. and. in the combing shop I above mentioned alone did the light of lamp or candle. brighten the poverty of all around me unhappily.

(*Works 2*: 17)

荒れ果てた工場や、廃墟と化した羊毛梳き商店。暗く濁った空気の上空では、半ダースの古い工場の巨大な煙突が、黄色い息苦しい天に向かって黒い煙を吐き出していた。これらの情景に続けて、さらに羊毛梳き商店の中の様子も描かれる。

[T]ubs of wool ranged on each hand. formed a passage into the middle of a confined heated and dilapidated apartment. the slates almost of[f] the rafters almost rotten in the roof and every inch of plaster. departed from the walls. 3 combing pots filled the chief part of the place and. the. sickly light of the lamps the close air of the apartment and the. stinking smell of wool and oil. made no pleasant impression on the olfactory nerves of one just entered from the fresh moonlight air. (*Works 2*: 18)

屋根のスレートはほとんど腐りかけ、漆喰は隅々まで壁から剥がれ落ちていた。3つの櫛入れ (combing pots) がこの場所の大部分を覆っており、羊毛と油の悪臭は、月明かりの下、新鮮な空気の漂う戸外から入ってきたばかりの人の嗅覚神経に心地よい印象を与えなかった。嗅覚とあることから、匂いも凄かったようである。E. Lipson が著した *A Short History of Wool and Its Manufacture* (1953) によれば、羊毛を梳く作業は炭火の上で行われ、炭酸ガスが大量に発生するため、どんな天候でも換気をする必要があった。炙られる

ほどの熱さの炎と外気の冷たい空気に晒され、彼らは青白く死体のようで、寿命も短く 50 歳に達する者はほとんどいなかったという (*Works* 2: 17, n. 4)。

このように過酷な職業であった背景には、梳毛は機械化が困難であったことから、繊維業の他の工程が機械化された後もずっと手作業で行われ続けていたことがあった。1850 年に Samuel Lister (1815-1906) が Bradford で梳毛機械の開発に成功してから手作業による羊毛梳きは急速に衰退し、10 年で職人はいなくなったという。⁸¹ハワースからも近く、後にブランウェルもアトリエを構えて芸術家仲間と交流を持った Bradford は、産業革命から恩恵を受けて急速な発展を遂げ、「世界の羊毛の首都」とも呼ばれ、「ウールポリス」や「ウール・シティ」というニックネームで知られた町である。

つまり本作品が書かれた 1834 年当時、既に繊維工場は多く存在していたが、手作業で羊毛梳きを行う職人はブランウェルの周囲にも数多くいたのである。⁸²Neufeldt はブランウェルが羊毛梳きについて直接情報を仕入れたと考え、Duckett は、ブランウェルが羊毛業者の間で使われていた専門的な用語(‘sheets’, ‘stuff’, ‘pieces’)に言及し、外交的で社交的なブランウェルが、ハワースに住む職人の仕事を間近で観察し、彼らから直接話を聞いていたと示唆する。

2. 羊毛産業と羊毛投機

「羊毛は高騰する」に視点を戻すと、父アレグザンダーから捨てられたエドワードは羊毛の梳き手として働き、弟のウィリアムと監視役のティモシー・スティアトンと共同して羊毛梳き商会を始め、財を築いて紡績工場を買い取り、従業員を雇うまでに成功した。所謂セルフメイド・マン、叩き上げである。エドワードは Cloth Hall で開催される piece market に現れ、“Edward Percy the stuff manufacturer (毛織物製造業者)” (47) として業界で名を馳せるまでになった。⁸³

⁸¹ “A Short History on Wool Combing” *Wovember*, Nov. 13, 2013
<https://wovember.wordpress.com/2013/11/13/a-short-history-on-wool-combing/>

⁸² Barker によれば、ハワースでは 1846 年、不景気のため低賃金が続き、織機工と羊毛の梳き手たちがストライキを起こしたことをきっかけに「羊毛梳き保護協会」が結成され、10 時間労働法の施行や穀物法廃止を求める運動が再燃した (517)。

⁸³ 1700 年代初頭からヨークシャー州では、Leeds や Halifax などに Cloth Hall または Piece Hall と呼ばれる繊維会館が建てられた。“pieces” of cloth (30 ヤードの長さで、手織機で織られた羊毛繊維)を取引する他、piece (裾毛から分離した羊毛のくず) も売買されていた。Cloth Hall は産業革命が進むにつれ 1830 年頃からその役割を失っていった。なお、ブランウェルは作中において piece を peice と誤表記している。

これだけでも十分な利益が得られるのに、彼はさらに原料の羊毛の投機買い (speculation) に目を付けたのである。先の戦争後、政府の指示で紡績工場に送られた多くのフレンチ国捕虜は路頭に迷っていた。⁸⁴そのことを知ったエドワードは、羊毛の投機買いを目論んだ。捕虜の中でも最貧民を週 1 シリングで雇い、piece を持ってこさせた。僅かな羊毛の断片は次第に膨れ上がり、何千もの羊毛くずが集められた。エドワードは再び経済が動き始めたら市場に通常の半値で売り出し、原資の 2 倍の収益を上げられると見込んだのだ。

ヨークシャー州における羊毛産業の転換と産業革命の関係について 1982 年に考察を行った Derek Gregory によると、もともと国産羊毛は羊毛市場や見本市で農家から直接売買されていたが、18 世紀半ばには羊毛商人や羊毛問屋のネットワークを介して取引されるようになった (31)。流通ルートが変化するにつれ、羊毛そのものの品質が低下し、国産羊毛に対する需要が減った。毛足が短く粗悪な国産の羊毛に比べ、海外の羊毛は毛足が長く丈夫であったからである (30)。海外の羊毛に関税が課せられても、国産の羊毛価格が低迷したことから、イギリス国内でも 19 世紀初頭から長羊毛を生産する農家が増え、短羊毛の生産量は減少した (32)。以上のようなヨークシャー州の羊毛供給の歴史的背景を鑑みると、恐らくエドワードが買い集めようとした羊毛は、低価格の短羊毛であったと考えられる。

エドワードは、“a little-speculation”を“a little Judaism” (*Works* 2: 47) と呼びイスラエル人を揶揄し、ティモシーに意見を求める。ティモシーは、12 使徒のパウロの弟子であるテモテ (Themotheus) さながらに、突然部屋の真ん中で神に祈りを捧げ、マタイによる福音書の一節“lost sheep of the house of Israel” (「イスラエルの家の失われた羊」) を引用して、神からの御告げを伝える。⁸⁵

⁸⁴ フレンチ国 (Frenchyland) は、ブランウェルが造形した架空の国で、ヴェルドポリスの対岸にある沖合の島を指し、ナポレオンをモデルとした革命的英雄ノーザンガーランドを国王とする共和政国家である。フレンチ国の首都はパリであり、フランス人が入植した。ナポレオン戦争時、捕虜を自国に移送する協定が破棄され、フランス人捕虜はイギリス各地の収容所や船上に拘留されていた (MacKay)。収容所を出て繊維工場で強制労働をしていたかどうかは定かではないが、Duckett はブロンテ家の子どもたちが、フランス人捕虜を目にしていた可能性について示唆している (“Wool Is Rising” 63)。

⁸⁵ マタイによる福音書 10 章 5-6 節では、12 人の弟子を派遣するにあたり、イエスは次のように述べた。“Do not go into the way of the Gentiles, and do not enter a city of Samaritans. But go rather to the lost sheep of the house of Israel.”

...there shall have been in this wet season a plenitude of sheep and lambs of his fold found upon the pasturage seized with the rot. and that to them frail mortals death shall have come thereby now greedy and lucreloving mortals. may at first sight of this case feel caused to mourn but but. thou a ministering angel flys. and. chases misery from their soul...Lo may not my master. perchance sojourn into the far country and gather together as sheaves into a garner all the fleeces of sheep fallen through the rot. These fleeces can he take at. a small trifle and resell at and[sic] enlarged. sum. (*Works* 2: 48-9)

遠い国では長雨により腐った牧草を食べた羊や子羊が死ぬだろう。異国に出向き、これらの息絶えた羊から腐って落ちた羊毛（“the fleeces of sheep fallen through the rot”）を安く仕入れて、後に高く売りさばいて利益を得るのだ。これを聞いたエドワードは、入念に手入れし立派な敷物に加工するともちかけて、羊の毛を一頭分あたり 1, 2 シリングで買い取る計画を立てた。

Sheep—rot—a shilling or two a fleece sold to me under on my part a pretence of there being made into rugs. dressed and. combed and carded. and out comes a rare fine peice of. stuff—hem. Ill think of this. Tim! Thy hint is worth thine ears. (*Works* 2: 49)

これによりティモシーは死んだ羊からを大量に買い取る任務に赴き、倉庫がいっぱいになるほどの大量の羊毛を荷馬車に積んで港に帰ってきた。また「半狂乱、半飢餓のフランス人の大群衆」（*Works* 2: 59）が違法に得た羊毛くずも大量に買い取った。やがて経済が回復し、市場における売買が再開されると、破格の値が付けられた彼の羊毛に大量の売り注文が入り、3 日間で彼は 6 万から 7 万ポンドの利益を上げた。

...on the first great stuff and peice market. held when. from the continuance of the piece[sic] and the restoration of public credit business and manufactur[e]s had begun to flow again straight forward in the tide of improvement. — when

the buyers and sellers saw the long stacks. of peices. and great piles of wool packs. lettered “P.S.&P.” and heard the incredibly low prices and the strong rapid sale of these same piles and packages they were filled with wonder and saw the fruits of successful speculation. Edward with his unfailing sagacity brought out his sales at the just nick of time. and such was the demand for his. “rolled” wool and his hard wrung peices that on the Evening of the last of the 3 sale days. Edward Percy could write himself down with between 60 and 70000 pounds! (*Works* 2: 59)

グレゴリーによれば、ヨークシャー州は他州と比べて貧困者も多く人件費が廉価であったことから、短毛を使用した安価な布地の生産に特化していた。また地元産の羊毛は品質が悪く生産量も少なく工場からの需要に応じられなかったため、ウェスト・ライディング地区の羊毛商人や問屋はイギリス各地から羊毛を買い集めて供給していたのである。“As a result, woolstaplers, factors and merchants in the West Riding had for long been accustomed to buying packs from almost everywhere in England.” (54)「イギリス各地から羊毛を買い付けなければ、羊毛に対するウェスト・ライディング地区の高まる需要に対応できなかった」とするグレゴリーの分析は、エドワードが違法に仕入れた安価な羊毛に注文が殺到したと合致するのである。また、海賊であった父アレグザンダー・パーシーの血を引き継ぐエドワードの下には、*shearers*（刈師）や *fleecers*（仕分師）の他に、*swindlers*（詐欺師）が働き、エドワードの為なら一致団結する彼らを語り手は“a gang”と呼んだ。息子もまた父のように違法な手段を用いて、羊毛の投機買いを企んだのである。しかもその調達には、フレンチ国捕虜らが違法に集めてきたと思われる羊毛のくずや、長雨で腐った草を食べ死んだ羊の、腐った毛（*rot fleece*）である。こうして毛織物製造業者として手腕を振るうのみならず、羊毛原料のブローカーとしても多大な収益を上げ、まさに P.S.&P.商会では、あちこちから集められた羊毛が膨れ上がり、その価格も高騰したのである。

ブランウェルの羊毛原料調達における豊富な知識を示す箇所が、もう一つある。語り手は、エドワードの計画を、“his favorite rot scheme” (68) と呼び、腐った大量の羊毛

の最後の積荷が港に到着し、クレーンや滑車で倉庫に運び込まれる様子を次のように描写する。

In the yard without stood a long line of emptying waggons and up the sides of the great building were by the aid of cranes and pulleys the great brown unwieldly sheets. laden with all this mighty heap of “Deaths loathsome leavings of mortality”...to the very rafters [of the lofty room] were piled the hundreds of stone of fleeces all pinned in their coarse wool sheets and arranged and lettered...a half dozen of. suspended packs swinging upwards through wide air to their dolesome and. oily resting place. within. (*Works* 2: 68)

倉庫の垂木まで積み上げられた羊毛は何百ストーン（1 ストーンは 14 パウンド）にも上り、倉庫内部の異様な光景がシュールな筆致で描写される。「宙吊りにされた半ダースの荷物は、広い宙を揺れ動きながら、ドロドロとした油まみれの休息場所へと向かう」に表されるように、羊毛梳きのみならず、原料としての羊毛の生々しさや、どのように管理保管されていたかについても、リアルに捉え表現できるほどの知識と才能を兼ね備えていたことは、特筆に値するであろう。

エドワードは羊毛業で巨万の富を得たが、それだけでは飽き足らず、アングリア国の建国に乗じて、虎視眈々と自らの地位も向上させたいと目論む。しかし、巨額の富を羊毛で儲けたことを父ノーザンガーランドが知ったら殺されるだろうと恐れる。ここでもう一度、語り手はエドワードが生れたその日に父から廃嫡され、過酷な人生を歩んできたことについて触れる。エドワードは何とかして父に知られずに、アングリア国の通商大臣になるべくザモーナ新国王と面会を果たし、建国のために私財を投入して巨大な紡績工場を三つ建設することを申し出る。彼は父の知らないところでザモーナに取り入り、願い通りアングリア国の通商大臣にまで昇り詰める。また、スニーキー国王女の婚約者アードラー侯爵との決闘に勝ち、王女マライアと結婚してスニーキー国の皇太子となり、物語は幕を閉じる。その式典に招待を受けた語り手のフラワーは、ティモシーが居心地悪そうに真新しいスーツを着て参列しているのを確かめるが、そこに弟ウィリアムは登場しない。父親のアレグ

ザンダー・パーシーはアングリア国建国に際しては手腕を発揮するが、それ以外では常に陰鬱な精神状態（dark, black, melancholy）にあり、息子のエドワードと直接対面することはない。⁸⁶

Barker は、ブランウェルが 17 歳の誕生日に完成させた「羊毛は高騰する」は、部分的にはあるが会計事務所を舞台にし、英文学史上、繊維工場主の出世を描いた最初の物語であると述べた（237）。さらに付け加えていうならば、羊毛業における原料の投機を小説のプロットに登場させるのは極めて珍しく、ブランウェルの商業経済に対する高い知識と先見の明を表していると言えよう。グレゴリーは、ヨークシャーの羊毛業史研究において、しばしば Daniel Defoe（1660-1731）の *A Tour through the Whole Island of Great Britain*（1724-26）からの描写を引用しているが、ブランウェルの本作品も、ヨークシャーの羊毛業史研究を裏打ちする貴重な資料になりうると思われる。

3. 語り手の介入

「羊毛は高騰する」には、ブランウェルの羊毛産業に対する高い関心と知識が反映されているが、語りの構造においても看過できない特徴がある。それは、語り手による物語への介入と、読者への語り掛けである。これらは興味深いことに、同じように繊維工場やそこで働く職人たちを描いたシャーロットの『シャーリー』の語り手の特徴と酷似している。ブランウェルの語りは非常に不安定であり、過度に物語に介入をするため、読み手にとっての障害となることが多々ある。しかし、物語世界における仮想の読者（グラスタウンやアングリアに住む人々）に語りかけ、また読者の読みを付度して弁解したり、修正したりする行為は、まるで自身の文章を校閲しているかのようであり、散文を書く技術の鍛錬を積んでいた形跡と捉えられよう。

ブランウェルは作家としてのペルソナと、批評家としてのペルソナの両方の立場から創作活動を行い、自らの作品を批判し、批評する力を養っていった。⁸⁷それは、散文においても語り手の介入という形で行われた。実際、「羊毛は高騰する」の第 3 章では、語り手

⁸⁶ Neufeldt は、陰鬱でメランコリーな精神状態はアレグザンダーの無神論、ひいてはブランウェル自身の無神論に起因すると分析した。（“Alexander Rougue/Percy. Part2” 339）

⁸⁷ ブランウェルは詩の形式や韻律において実験を試み、学者のペルソナを用いて作品批評のパロディを行った。‘Young Soult’s Poems’（1829）では、詩人 Young Scoult the Rhymer が書いた詩に対し、一編ずつ学者 Chateaubriand による批評をつけた。シャトーブリアンは、スールの詩に詳細な学識あるコメントを与えつつ、過剰な表現や不規則性について批判した。

の介入が頻繁に行われる。この章では、紡績工場に隣接する会計事務所に座る二人の従業員を説明するのに、語り手が仮想の読者（spectator）に呼びかける。

But we have spent too much time in painting this figure. and . if its dingy plodding aspect may have wearied the spectator let him turn to the desk beside it. here. before an apparatus altogether newer and smarter is seated. A figure. in as striking contrast to the one just abandoned. (*Works* 2: 45)

この箇所を境に、語り手は頻繁に介入し、読者を飽きさせないように注意を払う。また、読者の推測を先回りして、読みを修正するために介入することもある。

[B]ut let not my reader suppose that because he[Zamorna] can pour forth so mighty a torrent his channel must there fore be even and unchafed. by rocks. Alas no! Zamorna and Northangerland at every step had to face a hundred difficulties and a thousand care I shall state explicitly that ...every one of the 7 kings is determinedly opposed to them all the Ministry of Verdopolis is against them all the old and vested.... (*Works* 2: 66, underline mine.)

ここでは、ザモーナの水路（行く手）を阻むものは無いに違いないという読者の予想に反し、ザモーナ新国王とノーザンガーランドはアングリア国の建国に際し、数多くの難題に直面し、殆どの国王や大臣からの反対を受けたという。⁸⁸このように先手を打って読者の読みを予想しておいてから、それを裏切る語りの展開と非常によく似た箇所が、シャーロットの『シャーリー』にも登場する。

Helstone and Moore, being both in excellent spirits, and united for the present in one cause, you would expect that, as they rode side by side, they would

⁸⁸ この引用箇所は、第1章で引用した「アングリアとアングリアの人々」のモンモレンシーの言葉と同じ単語（“torrent, channel, rocks, unchafed”）が使われており、川の流れと関係するこれらのキーワードは、ここでもブランウェルの止めどなく流れ続ける想像力を象徴する隠喩である。

converse amicably. Oh, no! These two men, of hard bilious natures both, rarely came into contact but they chafed each other's moods.... (33, underline mine.)

『シャーリー』には語り手の介入度が非常に高いという特徴がある。⁸⁹読者に語り手と同じ視点で物語を読み進めるように促す一方で、語り手はまた読者を信用しておらず、読者の「読み」を軌道修正するために介入することがしばしばある。保守派の牧師ヘルストンと急進派の工場長ムアは、ザモーナとノーザンガーランドが原型である。彼らが和やかに談笑していたものと想像する読者を語り手は牽制し、会えば互いに気持ちを逆なですると、読者の読みを軌道修正する。語り手の介入方法において酷似するこの箇所は、幼い頃からシャーロットとブランウェルが創作活動を共に行い、語りの技法を修練してきたことの証であると思われる。

しかし、「羊毛は高騰する」における語りの構造は脆弱である。なぜなら、語り手であるフラワーは、全知全能の語り手であるかのように物語全体を俯瞰して語るが、突如として物語の途中で登場人物として登場するからである。

Upon the same Evening as that whose events I have just been detailing. the bright fire of a handsome apartment in the Fiden Palace shed warmth and comfort on the social circle. gathered round its. Bright and glowing environs. That circle consisted of His Lordship the Premier of Africa. Sir R Pelham Mr Sydney the Home Secretary Col Bud Capt Tree. and myself. (*Works* 2: 50)

前章の終わりで、エドワードが二人の部下に羊毛の投機について指示を与える場面を語った直後の同じ夜、フィデナ邸に集まった要人の中に、自分自身がいたと語り手は打ち明ける。フラワーは、まるで分身の術を使って、会計事務所とフィデナ邸という二つの場所を同時に行き来して出来事を俯瞰しているような印象を与える。また反対に別の箇所では、語り手がその場に居合わせたのかそうでなかったのかを曖昧にしたまま、介入する場面がある。

⁸⁹ 『シャーリー』の語り手の介入については、拙論「労働者階級に対する眼差し——『シャーリー』と『メアリー・バートン』における語り手の比較」を参照。

These two children of the Sun both stood their eyes sparkling their minds aroused in the enthusiasm of their enterprise They seemed two noble specimens of youthful mortality I heartily wish I had been there with my own eyes to have seen I have thought how different would have proved that sight had the Duchess of Zamorna and. —why any other—Lady Julia Sydney stood opposite to each other in the first surprise of sudden acquaintance. How different then to see the two forms of grace and beauty those sylphlike and slender figures....They stood and spoke and looked very pictures of the greatness and weakness of Humanity Oh what a sermon might be preached upon the minds of Arthur Wellesly and Edward Percy. (*Works* 2: 71, underline mine.)

ここでは反対に、ザモーナ新国王（アーサー・ウェルズリー）とエドワードという二人のヒーローの初対面をこの目で見たかった、つまり対面の場に居合わせたかったと語り手は打ち明ける。⁹⁰さらに語り手は、二人の対面をザモーナ王妃とザモーナの従妹であるシドニー夫人との対面と比較しようとする。しかし、その二人の女性が初対面する場そのものも、語り手による想像である。語り手が想像力を膨らませば膨らますほど、読者は作中における現実と虚構の曖昧な境界線を行きつ戻りつする。その場に居合わせなかったことを故意に主張し、さらに語り手の想像を織り交ぜて語るスタイルが、語りの信憑性に矛盾、あるいは不信感を抱かせていることは否めない。

最後に紹介するのは、読者が斬新なプロットや絡まりの解明があると期待することを牽制し、語り手がこれから描こうとしているものについて読者に再確認する下りである。エドワード・パーシーが困難や危険を潜り抜け、活力に満ち溢れ上昇する様を描こうとしているのだと、語り手は読者に打ち明けている。

⁹⁰ ザモーナはノーザンガーランドの娘（エドワードの妹）と結婚したことから、ザモーナとエドワードは義理の兄弟である。

My reader ought to be well aware that the serie[s] of chapters which I am now engaged in inditing neither can have nor pretends to have the slightest claims so the character of a tale or Novel Plot or entanglement unravelling or denouement he is not to expect from me my simple design in the work I lay before him is to portray and describe if I can the character mind and entrance into society of a man as remarkable in my mind as any one who has within my experience risen above the Verdopolitan Horizon.... (*Works* 2: 56)

ここで地平線の彼方から昇ってくるのは、アフリカに新しく築かれたアングリア国、またその新国建国に合わせて見事に成功し、出世したエドワード・パーシーと彼が仕入れた膨れ上がらんばかりの羊毛である。語り手による介入が頻回することは、読者の集中力を削ぎ物語の世界観が損なわれている面が否めないが、その点を除けば、「羊毛は高騰する」はブランウェルが書いた初期作品の中でも最も簡潔で分かり易く、エンターテインメント性がある作品であると思われる。

* * * * *

「羊毛は高騰する」は、アレグザンダーが廃嫡した息子の一人、エドワードが様々な手を使って羊毛を入手し、巨額の富を得、それを基に新国アングリアの建国に資金援助し通商大臣にまで出世する成功物語である。combing は羊毛加工の第一工程であり、職人による分業が行われていたものと考えられる。工場の裏手に combing shop を構えていた理由はそこにあるのであろう。徐々に手作業による分業が衰退し全工程が機械化されるまでの過渡期にあり、産業革命により消えていった梳毛職人たちが現役で活躍していた最後の時期を、ブランウェルが描き留めたことには、意義があると思われる。羊毛梳きという職業の過酷な労働環境、羊毛の調達、仕入れや保管といった流通方法、また羊毛産業における比較的低品質の短羊毛に対する需要といったヨークシャー州独自の社会事情を背景にした原料投機とその具体例を、ブランウェルは描き残したのである。また、地元産の羊毛だけでは工場からの需要に応じられなかったことから、イギリス各地から羊毛を買い集めて供給していた羊毛商人や問屋の現実の姿を本作品は裏打ちしている。19 世紀初頭のイギ

リス産業社会の変革と人々の暮らしの関係を敏感に察知し、それを作品に取り入れたブランウェル少年に先見の明を感じずにはいられない。

その一方でブランウェルの語りは非常に不安定であり、彼の作品の視点が定まらない理由がそこにあり、そのことが文学作品にまで発展できなかった原因の一つであるとも推察できる。しかし、語り手が縦横無尽に語り、時として脱線するが、その脱線の中に彼の文学的才能が潜んでいるのだ。この仮説を証明する一つの例として、次章では「アングリアとアングリアの人々」の戦争小説としての側面と、語りの脱線に潜むものに迫りたい。

第5章 「アングリアとアングリアの人々」——戦争小説の模倣と家畜商に見る社会変化

1834年から1836年の3年間は、ブランウェルの執筆人生において最も多産な時期であり、「羊毛は高騰する」「閣下の生涯」を含むおよそ300,500語相当の散文と42編の詩を書いた（*Works 2: Intro. 3*）。中でも「アングリアとアングリアの人々」は、ブランウェルが書いた散文の中で最も長文の作品であり、Neufeldt 編ブランウェル全集の第2巻（1834-36）と第3巻（1837-48）に跨って収められ、5部構成の合計486頁となる超大作である。本作品は1834年5月から1839年、ブランウェルが17歳から22歳頃にかけて取り組んだが、1834年同月に並行して「羊毛は高騰する」を書き始め、約1ヶ月で書き終わるや否や「閣下の生涯」を書き始めたことから、1834年を境にブランウェルの創作意欲が飛躍的に高まり、執筆の勢いが増していたことが分かる。

この作品は、散逸されていた原稿を内容に即して時系列に並べ、一つの作品として筋書きが最も理解されうる形に Neufeldt が編纂したものである。物語の最初の数ページが現存しないことから正式なタイトルは存在しない。しかし、原稿において語り手自身が物語を数回にわたり“Angria and the Angrians”と呼んでいることから、Neufeldt が[Angria and the Angrians]と名付けた。

本作品の先行研究は作品論としてはまだなく、ブロンテ研究者の間でも国の内外を問わず、内容はまだ十分知られていないところである。しかし Butcher が、シャーロットとブランウェルの初期作品における戦争表象に関する研究書（*The Brontës and War: Fantasy and Conflict in Charlotte and Branwell Brontë's Youthful Writings*）⁹¹を2019年に出版し、姉弟が戦争に関する様々な記述を読んでいたことが、初期作品にどのような影響を与えたかについて広範囲かつ横断的な分析を行い、その影響関係を明らかにする具体例として「アングリアとアングリアの人々」からも多数引用した。Neufeldt がブランウェル全集を編纂した時に既に指摘したように、ブランウェルは、当時『ブラックウッズ・マガジン』に掲載されていた戦争に関する様々な記事や物語を読み、それを作品に取り入れていた。Neufeldt の功績の一つは、ジョージ・グレイグ（George Gleig）の *The*

⁹¹ Butcher は、シャーロットとブランウェルは19世紀初頭の戦争に関する重要な評論家であったとし、彼らの初期作品には、戦争と男性性に対する当時の社会的・文化的反応が反映されていることを明らかにした。また、彼らの著作は、イギリス戦争史において重要な文学的及び歴史的資料として考慮されるべきである、と主張した（186-7）。

Subaltern (1825) からの影響が、「イギリス人からの手紙」(1830-1832) や、「侵略戦争」(1833) において現れている痕跡を探し出したことである。さらに Butcher が、「アングリアとアングリアの人々」においても痕跡があることを指摘し、19 世紀初頭における戦争表象に関する文献分析とブロンテ姉弟の初期作品との間に関連性を見出したことは、大いに注目に値する。本稿では、Butcher の先行研究に基づき、ブランウェルの研究史においては初の試みと言える、「アングリアとアングリアの人々」の作品研究を行いたい。

本章では、先行研究を踏まえ、本作品を当時隆盛していた戦争手記小説の模倣として読み解くだけでなく、ブランウェルの戦争小説の娯楽的側面についても明らかにする。「アングリアとアングリアの人々」でも一番ページ数が多い第 1 部に焦点を当て、粗筋を紹介しながらテキストの分析を行い、戦争について語りまた読むことがイギリスの中流階級の人々にとって娯楽の一種 (entertainment, amusement) として捉えられていたことが、本作品に表出されていることを明らかにしたい。また語りの脱線についても触れ、19 世紀初頭の農業革命により社会に変革が起きた様を、家畜商の表象を通して物語に描いたこと、そしてその表象がエミリの『嵐が丘』のプロットにも影響を与えていた可能性についても示唆する。⁹²

1. 戦争表象の系譜——*The Subaltern* と戦争の娯楽化

「アングリアとアングリアの人々」I のテキスト分析を行う前に、戦争小説の系譜について概観し、その中での *The Subaltern* の位置づけについて考察する。⁹³

近年、戦争と文学との関係について研究が隆盛している。イギリス啓蒙主義とロマン主義文化における戦争表象に関する研究書を編纂した Neil Ramsey と Gillian Russell は、19 世紀初頭に戦争詩の氾濫や、フランス革命戦争やナポレオン戦争における海軍に関す

⁹² アンの作品への影響としては、『ワイルドフェル・ホールの住人』(*The Tenant of Wildfell Hall*, 1848) に登場する Arthur Huntingdon や Lord Lowborough の造形に、ブランウェルの人物像が影響していると考えられている。また Neufeldt は、ブランウェルの「閣下の生涯」に登場するパーシーの妻メアリと『ワイルドフェル・ホールの住人』のヘレンとの宗教観における類似性について指摘する (“Branwell Brontë’s Alexander Rougue/Percy. Part 1” 325)。

⁹³ タイトルの「サバルタン」(subaltern) という単語は、本稿では軍事用語で大尉の下位の将校を指すが、20 世紀半ば以降、人文社会科学の領野では「従属的な立場にある個人や集団」を示す学術的な専門用語として使われている。サバルタン研究のガヤトリ・C・スピヴァクによる論文 “Can the Subaltern Speak?” (1988) により、「サバルタン」はポストコロニアリズム批評とフェミニズム批評における学術的な研究対象にまで押し上げられた (牧 93)。

る記述の急増など、紛争をテキストやビジュアルで表現することの大規模化と多様化が起こったとして、次のように述べた。

[W]ar's modernity can be defined less by transformations in the nature of war itself, than by the expansion of media attention to war or, we might suggest, by the intersection of war-making with the reading nation created by the print trade towards the end of the eighteenth century. War circulated in Britain as both public spectacle and as a form of literacy, a habit of reading about war that both catered for and shaped that preoccupation. (*Tracing War*, Intro. 4)

文学史ではほとんど認識されてこなかったが、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて、軍人の回想録が大量に出版された。Ramsey の研究によれば、1792 年から 1835 年の間に、ナポレオン戦争の全ての戦域において、凡そ 200 もの戦争回顧録 (military memoir) が出版された (*Military Memoir*, 1)。活字文化の発展と英国軍隊の価値化によって、18 世紀の文学文化においてそれまで周縁化されていた経験や階級が可視化されたのである (Russell 121)。これらの可視化された兵士の経験は、ブランウェルの作品にも大きな影響を与えたようだ。「アングリアとアングリアの人々」I には、Butcher が指摘するように、当時流行していた兵士の自叙伝という体裁の戦争小説、『サバルタン』の影響が色濃く映し出されているからである。この作品は『ブラックウッズ・マガジン』に 1 年にわたり連載された後に出版され、版も重ねられた。Ramsey は、モイル・シェラー (Moyle Sherer) の *Recollections of the Peninsula* (1823) と並び、グレイグの『サバルタン』は戦争回顧録の伝統を一新させたとして、次のように分析する。

[Sherer and Gleig] shifted the campaign narrative tradition of military memoirs into something that was, like private soldiers' memoirs, centrally concerned with the personal experiences of the soldier at war. But rather than detailing personal experiences through a pronounced sentimental moralizing, something that dominated earlier military memoirs, Sherer and Gleig asked their readers to share their military enthusiasms. Adapting conventions of the

picturesque travelogue to their writing, they sought to cultivate their readers' appreciation of the aesthetic appeal of war. (*Military Memoir* 137)

Ramsey によれば、それまでの戦争体験記は、戦争の大義を明確に伝えることが必須であり、一兵卒の個人的な見解や体験は必要とされなかったのである (150)。また、『サバルタン』は、戦争への熱狂を駆り立てるだけでなく、戦地で兵士が目にした美しい光景を伝える「旅行記」(‘picturesque travelogue’) の側面もあり、読者を「戦争美学」(‘aesthetic appeal of war’) の鑑賞へと誘ったのである。具体的には、次のような箇所が挙げられる。『サバルタン』の語り手は、「1813 年と 1814 年の「戦線に関する通常の回顧録」(‘a regular memoir of the campaigns’) を書くつもりはないが、私の日誌を分かり易くするためには、この段階で英仏両軍の相対的な状況についていくらか説明する必要がある。」(297) として、英仏の戦線状況について概観した後に、戦いの舞台となったスペイン北部からフランス南部へと流れるビダソア川の美しい流れについて、以下のように描写した。

The scenery of the Bidaossa[sic] is, in consequence, romantic and striking in no ordinary degree; for not only are the faces of the hills steep and rugged, but they are clothed, here and there, with the most luxuriant herbage; whilst frequent streams pour down from the summits, forming, especially after the rain, cascades exceedingly *picturesque*, and in some instances almost *sublime*. (*Blackwood's Edinburgh Magazine*, March 1825, p. 298. Italics mine.)

『サバルタン』の作者は、戦いの舞台となった土地の地政学的な情報や自然の美しい情景についてロマン主義的な要素を取り入れながら描くことにより、それまでの軍事回顧録とは異なる作品を書こうとしていたことが窺える。

一方ロマン派の詩人たちは、戦争をどのように描いていたのだろうか。Russell は、サウジー、ワーズワス、コールリッジらが、若い頃に急進的な反戦の詩を書いていたことに触れ、コールリッジの詩を引用しながら戦争の娯楽性について次のように考察する。

There was a risk that war would lose the virtuality that was necessary to keep the truth of its horrors from the domestic population. Hence a recurrent theme in romantic war writing is the role of the print media and of war “news.” In “Fears in Solitude” (1798), Samuel Taylor Coleridge claimed that war had become an entertainment and commodity—“all read of war, / The best amusement for our morning meal!”—stimulating an unhealthy, even savage, bellicosity based on ignorance of war’s reality:

Thankless too for peace,
(Peace long preserved by fleets and perilous seas)
Secure from actual warfare, we have loved
To swell the war-whoop, passionate for war! (122)

しかし、コールリッジは印刷文化における戦争の娯楽化に賛同しているわけではない。コールリッジは、大英帝国が大規模な本土決戦をそれまで免れてきたことから、安逸をむさぼっていると警鐘を鳴らしたのである。ブランウェルの「アングリアとアングリアの人々」は、コールリッジの詩から約 40 年後に書かれ、その頃にはナポレオン戦争も終わっていた。幸いなことに、コールリッジが危惧したような、イギリス本土での決戦を免れることも出来た。ブランウェルの「アングリアとアングリアの人々」は、ナポレオン戦争が終わってもなお、あるいはより一層、人々にとって戦争を語ることが娯楽であったことを示す証拠の一つとして捉えられることを、次節から検証していくことにする。

2. 新国アングリアの誕生——ギボンの『ローマ帝国衰亡史』の模倣

「アングリアとアングリアの人々」 I (1834-1836) は、アングリア国の黎明期の活気と混乱を描く。⁹⁴ グラスタウン連邦国の 6 つの州 Zamorna, Angria, Arundel, Northangerland, Douro, Calabar、Etrei が統合され、新国アングリア国（新首都

⁹⁴ 「若者たちの歴史」 (1830-31) において誕生した西アフリカに位置するグラスタウンは領土を拡大し、連邦を形成した。しかし、「侵略戦争」 (1833-34) では、フレンチ国（フランス軍）との戦争で敗北を喫する。紆余曲折の末、結末ではヴェルドボリス連合軍が勝利し、その功績としてザモーナ公爵とノーザンガーランド伯爵がグラスタウン連邦の東に位置するアングリアを割譲された。「アングリアとアングリアの人々」以降、物語の舞台はグラスタウンからアングリアへと移る。

Adrianapolis) が誕生する。アングリアの新国王戴冠式から戻ってきた語り手フラワーは、自身が見てきたことについて回想し、‘a few scattered and desultory hints and observations’ (*Works* 2: 200) を述べ伝えるところから物語は始まる。ノーザンガーランド通商大臣の声掛けと共に、聖堂の内外から‘God save the King of Angria Long Live the King and Queen of the Angrians’と斉唱が起こり、トランペットやオルガンが華々しく音楽を奏で、オーケストラによる‘Sound the loud Trumpet oer Africs bright sea’が響き渡り、大斉唱が湧きおこる。新国王の退場後には、‘Anthem of the Coronation’が盛大に演奏、斉唱される。これらの荘厳な儀式の余韻に浸りながらも、語り手は貴族や高貴な階級による民主政への反発や闘争が今後勃発することを予見し、憂う。そこへ、新政府から全権大使の任命を告げる知らせが届く。

散文の途中で音楽が流れ、音が鳴り響くブランウェルの文体の特徴について研究した Julie Donovan は、『ブラックウッズ・マガジン』からの影響を指摘する。同誌には“slippage from prose to verse”（「散文から詩への滑り込み」）が巧妙に行われているとし、Jason Camlot の言葉を借り、“periodical laboratory for multi-generic experimentation”（「マルチな文学形式（詩や散文）の実験を行う定期刊行物における実験場」）（216）であると捉えた。後述する地理的描写への滑り込みと同様に、19 世紀の啓蒙主義と印刷文化とが相まって、ハワースの片田舎の牧師館に住む少年を創作活動へと駆り立て、様々な文体や作風の模倣を通して、ブランウェルは自己研鑽を積んだのである。

19 世紀と戦争を描いたロマン派文学との関係について論じた Russell は、次のように分析した。「中流階級やエリートの読者のために作られた洗練されたテキストは、バラッドや chapbook literature（通俗読物）といった大衆的な流行歌の伝統と結びついていた。それらバラッドや通俗読物によって、兵士や水兵とその家族の英雄的行為、苦しみ、喪失などを歌った、大衆的な物語や歌が流布されたのである。19 世紀まで、大衆歌謡は下層階級の戦争体験に関する唯一の重要なテキスト記録であった」（112）。Russell のこの主張を裏付けるように、‘Sound the loud Trumpet oer Africs bright sea’（「高らかに歌えアフリカの海に」）は、アングリア国の合法性を強化し、アングリアが参加する戦争を正当化するべく、高尚な文学と大衆物語との架け橋となった（Donovan, 217）。

アングリアの国歌（‘National Song of Angria’）である「高らかに歌えアフリカの海に」というタイトルの詩の最初と最後の 4 行は以下の通りである。

Sound the loud Trumpet o'er Afric's bright sea
Zamorna hath triumphed the Angrians are free
Sound for our day Star hath risen in glory
Sound that Loud Trumpet unequalled in story

Sound the Loud Trumpet o'er land and o'er sea
Join tongues, hearts and voices rejoicing to sing
Afric arising hath sworn to be free
Glory to Angria and GOD SAVE OUR KING (*Works* 2: 204)

この歌は、アイルランドの詩人 Thomas Moore の“Sound the loud timbrel o'er Egypt's dark sea”が元であり（*Works* 3: 49, n.1）、題名の通りエジプトにまで肥大するイギリスの帝国主義を謳っていることから、アングリア国のアフリカにおける拡大と容易に重ね合わせられるだろう。後に語り手として登場する従軍詩人ヘンリー・ヘイスティングスの代表作であり、ヘイスティングスを有名にした歌である。しかし興味深いことがこの歌の後に起こる。God Save Our King の大斉唱の後、アングリア新国王や統治者、その従者たちが聖堂を去った後、群衆が集まって奇妙な遊戯や出し物が始まる。

I beheld hundreds in a string playing at leap frog 2 or 3000 persons had gathered round a Frenchman just under the great Organ Gallery who was exhibiting the new and surprising entertainment of the “Sun of Angria” The play is on the feats of 2 or 3 successive “enfants” on whose skulls he clapped a lighted pitch cap. When the pain instantly caused them to spring a yard or two into the air.... (*Works* 2: 205)

何百人もが一行になって馬飛びをし、新しい奇抜なエンターテインメント「アングリアの太陽」の芝居を見るために、2, 3 千人もの聴衆がフランス人の男の周りに集まっていた。この芝居では、2, 3 人の寵児が頭の上にピッチキャップを被せられ、熱さで耐えられな

くなると1, 2ヤード飛び上がった。ピッチキャッピングは、熱いピッチまたはタールを円錐形の紙のキャップに注ぎ、それを人の頭に押し付ける中世の拷問の一形態である。⁹⁵ タールが冷めてから急速に取り除くため、犠牲者は頭の周りの皮膚と組織が失われる。この拷問は、1789年に起きたアイルランドの反乱において、英国がアイルランドの反英勢力に対して行ったことで知られており、ブランウェルの父パトリックがこの反乱について精通していたことは十分考えられる。しかし、ここで見せ物として記されているピッチキャッピングが、ブランウェルの全くの想像力から作り出されたものなのか、それとも彼が実際にそのような見世物をどこかで見聞きしたのかについては、想像の域を超えない。ピッチキャッピングというイギリスがアイルランド人に行ったこの残虐な行為が、エンターテインメントとしてハワースやブラッドフォード、またリーズなどの近郊の市町で実際に行われていた可能性を全く否定することはできないであろう。

また、もう一つ興味深いことは、子ども (enfant) にこの拷問を行っていることである。「ブランウェルズ・ブラックウッズ・マガジン」(1829年6月号)にシャーロット作の「こども」(‘The Enfant’)と呼ばれる短い作品がある。⁹⁶同1月号の登場人物一覧において紹介されるピッグテイル (Pigtail) はブランウェルの発案で、「イギリス人からの手紙」にも登場し、子どもを誘拐し虐待する一風変わったキャラクターである。⁹⁷このピッグテイルも登場する「子ども」の粗筋は以下の通りである。⁹⁸

物語の舞台はパリ。ハングヒムセルフ (M. Hanghimself) の部屋にピッグテイルという人物が若い煙突掃除の子どもと一緒に入ってくる。ピッグテイルはシャーロットとブランウェルの他の物語にも登場し、子供たちを盗み、殺害する狂人として描かれている。ピッグテイルが「アンファンを蹴り、踏みつける」のを見たハングヒムセルフは、子供を助けようと当局に駆け込む。彼はやがてナポレオンの面前に通され、ナポレオンはスールに、城内の酒場へ行ってピッグテイルとアンファンを連れてくるよう命じる。ナポレオン

⁹⁵ pitch cap は、「アングリアとアングリアの人々」Ⅲ (d) においてザモーナの義理の弟であるクオシャが、ノーザンガーランドと組み、ザモーナの息子を殺害する時にも使われる (*Works* 2: 603)。

⁹⁶ シャーロットの作品をブランウェルが筆写したと考えられるが、元原稿が残っていない。また、シャーロット自身も1829年7月に同名の作品を書き残したが、ブランウェルが筆写した原稿を基に書きかえたかどうか定かではない (*EEW* 1, 34 n.)。

⁹⁷ ピッグテイルはパリの酒場の凶悪な主人であり、その悪名高いプロイセン・バター取引と、娯楽のための子供の売買と拷問は、グラスタウン・アングリア物語における裏社会を表している (*OCB* 370)。

⁹⁸ 「ブランウェルズ・ブラックウッズ・マガジン」の「子ども」は短いため、加筆修正されたシャーロットの「子ども」を要約した (*EEW* 1, 34-6)。

は、ハングヒムセルフがなぜアンファンを助けたいのか、自分には子供がいるのかと質問する。ハングヒムセルフは、かつて自分には奪われた子供がいたことを明かす。子供を助けたいという気持ちだが、実はアンファンが自分の盗まれた子供かもしれないという事実からきていることに気づいたハングヒムセルフは、子供の腕にある噛まれた跡について言及する。スールがアンファンとピッグテイルを連れて戻ると、その子の腕にその跡があり、ハングヒムセルフの失われた子供であることが明らかになる。二人は大喜びし、ピッグテイルは二人の前から逃げ出す。ナポレオンが資金を提供し、ハングヒムセルフはアンファンと暮らすために美しい領地を購入することができた。

アンファンへのピッチキャッピングに見られるような子どもへの肉体的な虐待は、父親から廃嫡される息子と同様に、姉弟にとって関心事であった証拠となるであろう。文章にして僅かな言及であるが、第3章でも述べたように、子どもの遺棄や虐待に姉弟が関心を持って、初期作品に繰り返し取り入れていたことを示している。

何千もの群衆が付き添う中、ザモーナ新国王とノーザンガーランド通商君主は、100 マイルもの距離を歩いてヴェルドポリス（グラスタウン国の首都）から新首都へと向かう。自身も新国の全権大使に任命された語り手リチトン（Viscount Richton）は、戴冠式であった St. Michaels を後にし、早朝 3 時に新首都エイドリアナポリスへと馬車に乗って向かう。“Reader I almost fear that henceforward the pen which now writes these lines to you must act as the miserable recorder of the Decline and Fall of Africa.”（*Works* 2: 221）リチトンが Edward Gibbon の *The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*（1776–1789）に言及し、アングリシア国の勃興と衰退を描こうとしていることを仄めかす。また冒頭の St. Michael 聖堂で行われた戴冠式でザモーナは、「まるでアキレスの天の鎧⁹⁹をまとったかのように、直立し燃え上がるような鋼鉄の鎧に身を包み（‘full armour of steel Erect and blazing as if in Achilles own heavenly mail’）」（*Works* 2: 202）、その力を臣民の前に誇示することからも、ブランウェルは古代ギリシアの吟遊詩人ホメロスや、19 世紀の歴史家ギボンに自身を準えて、架空の世界で繰り広げられる戦争史を執筆しようとしていることが分かる。

⁹⁹ Homer の *Illiad* でアキレスの母テティスがヘパイストスにアキレスのために製作を頼んだ金属の甲冑。

「アングリアとアングリアの人々」 I (b) では、アングリア国建国後すぐに内部分裂が起こる。リチトンは新聞に、ザモーナ国王から国民に向けて書かれた挨拶文を見つけ、その内容を要約する。この挨拶文の全文は、シャーロットの初期作品の中にも登場しており、¹⁰⁰この時期シャーロットがザモーナ、ブランウェルがノーザンガーランドのペルソナとして、頻繁に物語を共作していたことを証している。ザモーナは演説においてノーザンガーランドが反逆を扇動していることを国民に告げ、ザモーナかノーザンガーランドのどちらを支持するか国民投票に参加するように訴える。

一方ノーザンガーランドはスタンプ島から書簡を送り、貴族政治を否定し自由主義を支持し、‘Hatred to Aristocracy and Love of Liberty’ (*Works* 2: 244) を唱える。この手紙の中でノーザンガーランドは Liberty と Vitality を何度も繰り返す。

I determined to GIVE AFRICA A SOMETHING WHICH WHILE IT
DELIGHTED HER AND WHILE SHE FOSTERED IT SHOULD BRING
ABOUT UNDER MY GUIDANCE THAT LIBERTY AND THAT VITALITY
WHICH SOULD REVIVIFY AND GIVE YOUTH TO THE WOLRD. (*Works* 2:
245)

この Vitality (活力、持続力) という単語は、「アングリアとアングリアの人々」全話を通して実に、25 回以上登場するが、ギボンの『ローマ帝国衰亡史』にも、そしてまた、姉弟の創作活動に大きな影響を与えたスコットが書いた『ナポレオン伝』(*The Life of Napoleon Buonaparte, Emperor of the French*, 1827) にも使用されていない。¹⁰¹ノーザンガーランドは繰り返し、歴史を紐解くと国家の存続には vitality が肝要であったと述べているが、「国の活力」が具体的に何を指すのかまでは、記していない。

この手紙の後リチトンは、Gazemba の Henri Fernando Enara に会いに行くまでの道中の地理について詳細に描写する。地理的描写への滑り込み (slippage) は、「イギリス

¹⁰⁰ ‘Address to the Angrians by his Grace The Duke of Zamorna’ (*EEW*: 296-301)

¹⁰¹ ブランウェルが読んだ可能性がある文献で vitality が使用されているのは、バイロンの *Childe Harold's Pilgrimage*, Canto III (1816) の出だし部分 “There is a very life in our despair, Vitality of poison—a quick root”である。

人からの手紙」の語り手ベリングラムによるものと同じである。リチトンは、Calabar 川がどれだけ広大な川について触れ、過酷な砂漠の旅路について説明する。

Upon the morning of the 17th of September I crossed the Calabar with a Guard of 50 men landing among the wild rushes on a flat sand which forms the bank of the mighty River. The morning was yet unrisen and the sky and landscape was cold raw and darkened...as the sun arose in the cloudless heaven and his beams began to warm the air the dry, hazy horizon and the intense oven like heat of the atmosphere told us we had got fairly into the deserts of Africa. (*Works* 2: 250)

先述したように Ramsey は、『サバルタン』は、それまで主流であった戦争の悲惨さに焦点を置いた反戦小説や、軍の立場や戦争の大義名分を忠実に描いた戦争記録ではなく、一兵士の個人的な経験と自然美を描写する絵画的な旅行記とが融合した、より大衆的な戦争小説として新たなジャンルを築き、中流階級の読者の心を掴んだと分析した。ブランウェルは、兵士が見たロマン主義的な美しい風景を描いた旅行記的な要素と、『ブラックウッズ・マガジン』に掲載されていたアフリカ地理に関する投稿記事から得た地政学的な知識を合わせて、想像力豊かに架空の国アングリアの風景を、地理や気候に関する細かな描写と共に描いたのである。

I (c) ではアングリア議会でザモーナが演説を行い、ノーザンガーランド首相が謀反を起こそうと扇動していることに触れ、ノーザンガーランドを退陣させるべきかどうかを議会で問う。このザモーナのスピーチの部分は、I (b) に登場したアングリア国民への挨拶文の箇所 (*Works* 2: 236) と同様、シャーロットが同時期に書いたザモーナの演説¹⁰²においても登場し、中でも次の箇所は、二人の初期作品に一字一句ほぼ同文で記されている。ザモーナは、先述した引用箇所でもノーザンガーランドが用いた *Vitality* という言葉に着目して、次のように彼を評価する。

¹⁰² 'Speech of His Grace the Duke of Zamorna: At the opening of the first Angrian parliament' (*EEW* 2: 304-9)

...but said the Duke when he spoke of VITALITY I pondered over it I
comprehended it Vitality is the errant light the wandering sun the flame
which in turn has glowed and vanished on every empire that War has founded
and Science polished The pyramids o[f] Egypt beheld it smile it shone upon the
cities of Assyria it gilded the Courts of Judahs temple Persia felt it and spread
her boundless dominion then like fire it ran along the hills of Greece and
Athens and Sparta and Macedon brought forth their mighty men...and
England felt its beams centurys past and extinguished in Europe it was
rekindled in Africa. (*Works* 2: 257)

ザモーナは冒頭で、ノーザンガーランドが主張した Vitality は「逸脱した光 (the errant light)」であるとし、彷徨う太陽の炎のように、あらゆる大国の上に光輝いては消えるものであると主張した。ローマやイスラム国、ペルシア、インドを支配した民族、古代国の黎明期に活躍した民族の軌跡やその輝かしい歴史を辿り、何百年も前にヨーロッパで消滅した光が再びアフリカ（アングリア）で灯されたと熱く訴えた。ノーザンガーランドが vitality に国力の存続に対する期待を込めて用いているのに対し、ザモーナの vitality は燃え上がるような活気に満ちた国力も、やがてその光が消うせ、繁栄と衰退が繰り返されてきた点に着目している。後にノーザンガーランドが行った演説でも同じ内容が繰り返されていることから、ブランウェルとシャーロットが世界史に対する関心と知識を共有していたことが如実に示されている。先述したリチトンの言葉やノーザンガーランドの次の言葉から推察されるように、この時点では、ギボンの『ローマ帝国衰亡史』を模倣してアフリカの繁栄と衰退について記録しようとしている。“I can see all the causes of the rise decline and fall of empires where that rise exists what has been their summit what their end I know when. The world was at its zenith and where it is now.” (*Works* 2: 264)

リチトンはカラバーの駐屯地に赴くため、しばらく首都を離れるが、その後再びエイドリアナポリスに到着し、そこで国会の建物の前に人だかりがしているのを目にする。そこにいたのは、‘Sound the loud Trumpets’ を作詞した詩人のヘイスティングスであっ

た。¹⁰³ヘイスティングスは群衆に向かって、投票の結果ノーザンガーランドが票を勝ち取り、首相に留任したことを告げる。ヘイスティングスは、アングリア国のために新たに作詞してそれを群衆の前で披露する。ノーザンガーランド首相の名前がアングリアの歴史に刻まれることを謳う *History stood by her pillar of fame* で始まるこの詩は、ノーザンガーランドが元は海賊であったことを讃え、ザモーナとノーザンガーランドの二人の君主が一つの国を共有することを拒む運命について次のように歌う。

She[History] thought of that Empire. so bright and divine
She thought of its Monarch its ruler in war
Angria two Monarchs and rulers like thin
Hath fate then refused to one empire share (*Works* 2: 277)

最後の4行では、ザモーナと共にノーザンガーランドの名前がアングリアの名声に刻まれることに、歴史が歓喜しながら筆を握むと締めくくる。

History seizes her pencil of light
And again in rejoicing she bends to indite
High on the top of the column of fame
She blends with her Angria[Zamorna] Northangerlands name (*Works* 2: 277)

この後 I (d) の冒頭でリチトンは、次の語り手ヘイスティングスにバトンを渡す。ヘイスティングスへと語り手が移ってからは、血なまぐさい戦闘シーンとともにブランウェルの筆が一気に加速していく。

3. 従軍詩人の語り手ヘンリー・ヘイスティングス——戦争手記小説の模倣

¹⁰³ シャーロットの中編小説「ヘンリー・ヘイスティングス」では、ジェイン・エアの原型であるエリザベス・ヘイスティングスのロマンスが描かれる一方で、ブランウェルをモデルにしたエリザベスの弟で兵士のヘイスティングスは、ザモーナ国王殺人未遂の罪で裁判にかけられる。

兵士で詩人のヘイスティングスは、彼自身の経験や視点から一兵士としての軍隊の生活を日々記録した。クオシャ¹⁰⁴とアシャンティ人との決戦に向けて、40000 人もの兵士の一人として、ガゼンバの手前にあるエトレイ川に向かって馬に跨り軍服を着たヘイスティングスが意気揚々と進む。期待に胸を膨らませて戦地へ向かうものの、語り手は複雑な心境を次のように語る。

I had left my parents my acquaintance. my very life and feelings for a new father a new companion a new existence and new actions. These all lay before me. and what was there before me? a wide sandy desert. A faroff unknown River. Burning wastes which I knew nothing off and where I must plunge without knowing how I might return or whether I might ever return and the limits of this days journey must be....my Heart beat higher and my blood boil within me I was Now a SOLDIER. and I was going to WAR. war had always [given] to me a glorious and mighty feeling.... (*Works* 2: 279-80)

ここには、故郷に家族や旧友を残して戦地へ向かう青年、これから何が待ち受けているか想像もつかないものの、戦争という言葉が持つ響きに胸を高まらせながら戦地へ赴く兵士の高揚感が伝わってくる。入隊したばかりの兵士の、期待と不安が入り混じった感情は、グレイグの『サバルタン』にも描かれている。¹⁰⁵

約一万人の兵士が駐屯するガゼンバ基地に到着したヘイスティングスは、司令官ハートフォード（Hartford）が管轄する第21連隊に配属され、「我が軍隊の荘厳さに国民としての誇り」（*Works* 2: 285）を抱く。パレードとラップが何度も登場し、先述した聴覚的効果が、多分に使われる。ガゼンバ基地には荒れた黒い家々がアングリア帝国の険しい防壁の周りを取り囲んでいた。胸壁から白い煙が立ち上るのを目にしたヘイスティングスは、

¹⁰⁴ クオシャ・クオミナ（Quashia Quamina）はアシャンティ国の王子であり、国王サイトゥートゥー・クオミナ（Sai-Too-Too Quamina）が敗れてからは、ウェリントン公爵の養子となり、ウェリントンの二人の息子と一緒に育てられる。

¹⁰⁵ “I thought of my home—of my father, my mother, and my sisters. I thought of the glorious mountains, and the fertile plains, of my native country, and could not help asking myself the question, whether it was probable that I should ever behold them again. The chances were, that I should not....On the other hand, curiosity, if I may call it by so feeble a term, was on full stretch respecting the future. Now at length I was about to learn what war really was; ho hostile armies met, and battles were decided[.]” (*Blackwood's Edinburgh Magazine*, March 1825, 280)

アングリアの大軍が基地に到着したことを知る。20 もの軍の楽隊からラッパやドラムの音が鳴り響き、アングリア国軍の兵士たちは真紅と光り輝く金色の軍服に羽根をつけ、マスケット銃を抱えて行進する。しかし、肝心のザモーナを見た者はいなかった。ヘイスティングスは、月明かりにザモーナの居室の前で楽隊が‘Sound the loud Trumpet oer Afric’s dark sea’を奏でるのを耳にし、「音楽より自身が作詞した歌詞が勝っていれば（“Oh how I wished the words had been more worthy of that music.”）」（*Works* 2: 287）と、言葉（歌詞）に勝る音楽の優越を讃える。また、ザモーナの姿は描かれず、煙や月、川、防壁や胸壁、黒い屋根、ラッパや太鼓、行進と音楽、といった視覚及び聴覚的描写から、読者に想像させようとしている。

この後、主筋とは関係のないエピソードが語られる。ヘイスティングスはハートフォード司令官に会いに行くためにアングリア国軍の防壁の中の迷宮に入る。その際に、17 歳くらいの悪党のような小姓にハートフォードの部屋に案内してくれと頼むが、チェック柄の綿のシャツに白いズボン、黒い帽子をかぶった色黒の男に聞くように言われる。しかしこの男も案内をしてくれない。やがて別の召使から案内された豪華絢爛な部屋には、軍事文献などが机の上に所狭しと広げられていた。ここでヘイスティングスは、ハートフォードと思わしき信仰の熱い男性と宗教談義で盛り上がる。しかし、仲間がやってくる音を聞くとこの士官は窓から逃げ出た。実はこの若い士官こそがザモーナであった。再びチェック柄のシャツを着た男が部屋に入ってくるが、その時には青い刺繍のベストを着て兵士というよりは山賊のような格好で現れる。彼はヘイスティングスがハートフォードの部屋に案内されていないことを知って、ザモーナの若い小姓を呼びつけ、一発ぶん殴る。ハートフォードのところに連れて行くように、別の士官に「綿のシャツ改め青い刺繍のベスト男（“Blue chintz vest alias cotton shirt”）」（*Works* 2: 297）が指示する。この時初めてヘイスティングスは、5 分間ほど話をした若い士官が実はザモーナ君主であったことを知る。アングリア軍の要人たちが集まる要塞の中の聖所（sanctum）に迷い込み、ハートフォードには会えなかったものの、期せずしてザモーナ君主と面会を果たした、という、謎に満ちたアングリア軍の中核部分に分け入る冒険物語が、過分に詳細な人物設定と共に挿入されている。

この後、ドンゴラの基地と町が 15000 人のアシャンティ人に奇襲され、町が焼き尽くされ住民と兵士が皆殺しされたとの一報が入り、怒れるアングリア軍は 10 倍返し of 報復

に挑む。ドラムやトランペットの音が鳴り響き、夥しい数の兵士が Castle Square 前の指定地に集結する中、ヘイスティングスの目を最も引いたものは、兵士たちの頭上で風にたなびく何旗もの“ARISE”と書かれた旗、また Enara's Bloodhounds と呼ばれる、エナラ卿直属の戦闘集団である白い軍服と黒いヘルメットに紅い肩帯をした歩兵連隊。その上には DEATH とだけ書かれた横断幕。そして筋骨隆々とした一頭の馬と、8 匹の赤い目をした巨大な茶褐色のブラッドハウンド犬の傍らには、アングリア軍の副長官、ヘンリー・フェルナンド・エナラ大佐が立っていたが、この人こそがチェック柄の綿シャツを着た男であった。以上のような語りの脱線が挿入された意図は計り知れないが、ザモーナやエナラ大佐が仮装していた点は大変興味深く、これもまた娯楽的要素の一つとして見なすことも可能であろう。

この後、エナラ卿はドンゴラの大虐殺の復讐心に燃え上がり、アシャンティ人が二度と起き上がらないまでに壊滅させるよう兵士たちを駆り立てる。ヘイスティングスは、この時こそが、本物の軍人生活が始まる前夜であると確信した。“I felt that this minute only this moment was the eve of my real Military Life.” (*Works* 2: 300) 虐殺が行われたドンゴラまでの陰しい道のりの描写において注目すべき点は、地理や気候に関する描写である。ガゼンバの寒冷地を抜け、湿地や葦に覆われたエトレイ川の河口まで辿り着いたと思いきや、そこは見渡す限り水面が広がる海であった。日が暮れ、足元まで水につかる中、風と共にアングリアの雨季を知らせる雨が降り出し、遠くでは稲妻が恐ろしく光り、悪夢のような状況にヘイスティングスは孤独の恐怖を感じる。¹⁰⁶“The rain was pouring in impetuous torrents all was dark and stormy where cried I where are the Army.” (*Works* 2: 301)

その時、先に出立していたザモーナが踵を返し、兵士を救助するためにエナラ川の対岸から戻ってきた。ザモーナと共に、エトレイ川を小艦に乗って渡り、翌朝ドンゴラで目にしたのは、残虐極まりない大惨事の爪痕であった。

¹⁰⁶ Butcher は、ブランウェルがスコットの “fog of war” の技法を取り入れたと指摘する。「戦場の霧」は、元は軍事用語（指揮官から見た戦闘の不確定要素）であるが、読者を戦闘の渦中に引きずり込むことで、戦争の混沌とした本質を描こうとする文学技法を指すものとして、Samuel Baker が命名した (Butcher 54)。立ち込める煙や嵐などの悪天候により一時的に視界が悪くなることで、戦場の恐ろしさを描く「戦場の霧」の手法はスコットを始め *The Subaltern* などの同時代の戦争小説に多く見られ、ブランウェルもそれを模倣した。

From a pole which had been an inn sign and which stuck out of the Gable of a House beside me. Hung suspended almost over my head a raw and bloody corpse. the skin flayed off. the gore blackened over the carcase and the throat served with a ghastly gash stretching from ear to ear...a heap of several hundred carcases their heads chopped off and piled at random among them and all burnt and blackened by fire which had been kindled round them. diffused through the air a dreadfully signed and putrid smell.... (*Works* 2: 303)

宿の看板だったポールに吊るされた皮を剥がされた生々しい血まみれの死体や、喉には耳から耳まで伸びる無惨な傷後。数百の死体の山は、頭を切り落とされ、無造作に積み上げられていた。火にくべられ黒焦げになった死体からは、ひどい腐敗臭が漂っていた。戦争の生々しい悲惨な光景が、まるで映画のワンシーンのように描写される。

現地人以外には致命的な疫病を招くとされるベングエラ（Benguela）川の湿地帯に、6, 7 千人のアシャンティ人が潜伏しているとの情報を入手したアングリア軍は、決戦に挑む。カラバー川の東側にあるアングリア国の全ての川は海へと流れ出ており、中でもカラバー川、エトレイ川、ベングエラ川、カメルーンズ川には、竹林や葦に覆われた恐ろしい沼地が存在した。これらの川の名前は、マックイーンが『ブラックウッズ・マガジン』に掲載したアフリカの地図から取り入れられたと考えられている（*Works* 2: 305）。アングリア国軍兵士として初めて戦闘に向かうヘイスティングスは、不安に押しつぶされそうになり、ポプラの葉のように震えた。銃剣でアシャンティ人を刺し殺すことに成功するも、使用されたマスケット銃の弾が頭に当たり、一時気絶する。¹⁰⁷彼の周りでは兵士たちが次々に倒れ息途絶える。アングリア軍は一路、アシャンティ国王が潜伏するロアンゴに向かう。ヘイスティングスはザモーナの従軍作家として、ドンゴラでのアングリア軍の勝利を伝える戦況報告を書く。

ロアンゴの大決戦でザモーナとクオシャは一騎打ちとなるが、エナラ卿ら大佐がザモーナに加勢し、クオシャを撃ち殺しアシャンティ軍は退散する。この決戦で、負傷したザモーナ国王の手当てをしたヘイスティングスは、その手柄が認められ隊長に昇格する。こ

¹⁰⁷ この箇所も、「戦場の霧」の手法を示す箇所である。

の後、再び議会でザモーナはノーザンガーランドがクォンティン・アッシュンティン国やアードラー提督を始め、アングリア国の敵陣と同盟を組んで謀反を繰り返してきたことを非難し、首相を退任することを迫る。このザモーナのスピーチをシャーロットが (*EEW* 2, 369-77)、また反撃するノーザンガーランドのスピーチをブランウェルが書き記している (*Works* 2: 350-53)。しかし、総選挙でアードラー率いる改革党が勝利し、アングリアは連合国から追放され、ザモーナとノーザンガーランドは再び同盟を組みアングリアを保守しようとするが、その後の市民戦争で首都が陥落し、ザモーナとノーザンガーランドは追放される。ヘイスティングスは、それでもなお、我々の国王はザモーナであり、首相はノーザンガーランドであると高らかに叫び、「アングリアとアングリアの人々」 I は終わる。¹⁰⁸

ブランウェルはギボンの『ローマ帝国衰亡史』に影響を受け、歴史的大国の黎明期に準え、アフリカの土着の民族を啓蒙し、共和政国家を建設する過程を描こうと物語を書き始めた。アングリア国という物語の空間において、ザモーナが支配する専制君主的、中央集権的な国家に対して、ノーザンガーランドはアメリカのような共和政国家を目指そうと反逆を繰り返した。しかし、ブランウェルは専制君主政国家、共和政国家のどちらにも軍配を上げず、国家の繁栄と栄華、安寧を描くよりは、混乱と転覆を描くことに主眼を置いた。戦いは決して終わることはなく、延々と物語が続いていく構図である。そこに、『サバルタン』のような新しい戦争小説の模倣が加わり、娯楽的な要素を帯びていったのである。

4. 語りの脱線——家畜商のモチーフ

前章でも考察したように、ブランウェルの初期作品では主筋と関係の無い、一見したところストーリーの展開を阻害する印象を与えかねない語りの脱線がしばしば起こる。この脱線について Neufeldt は、「閣下の生涯」における詩に関する脱線部分について考察する際、「ブランウェルは彼自身が考える美の哲学について定義するために、本物の詩（‘true poetry’）を構成するものが何かについて、再び脱線（‘another digression’）に入

¹⁰⁸ その後も大小様々な衝突は続くが、最終的には、ノーザンガーランドはザモーナに対して圧倒的勝利を収める。ザモーナは処刑を免れ、アセンション島への流刑に処される。その後ザモーナは再びエイドリアナポリスへの帰還を許され、ザモーナが催した宴会に長年の敵ノーザンガーランドが妻と姿を現し、二人のライヴァルは互いに敬意を示す。一方語り手であるヘイスティングスは酒に溺れ、冒頭の潑刺とした語りの彩光は消え失せる。これが、「アングリアとアングリアの人々」（I～V）の結末である。

る」(“Alexander Rougue/Percy. Part 2” 321、強調筆者)と述べた。単なる思い付きで書いているかのように見える脱線にも、その存在意義が込められているのである。そのことを示す別の箇所を見てみよう。「閣下の生涯」において語り手は、次のように述べる。

This melancholy train of events has formed the staple the main plot of my Narrative but what is it that constituted the by play the under plot that portion which is usually by far the most interesting and important portion of a Novel or tale. (*Works* 2: 129)

ブランウェルはここで、主筋(main plot)よりもむしろ副筋(by plot, under plot)こそが小説や物語にとって最も面白く重要である、と述べている。この箇所は、ブランウェルが意図的にメイン・ストーリーから脱線し、そこに彼が最も伝えたいメッセージが込められている可能性があることを読者に示している。本節では、そのことを示す家畜商に関する脱線部分について考察する。

「アングリアとアングリアの人々」には、drover, cattle dealer, jobber といった、家畜商を表す単語が何度も登場する。リチトンは、「アングリアとアングリアの人々」の導入部分で全権大使として新首都エイドリアナポリスに移動する途中で Hartford House を通りがかったとき、17, 18 年前にエドワード・ハートフォード卿が住んでいたところを回想する。ハートフォードは、ザモーナ州の広大な牧場地(grazing district)の中心であった。そこで毎年開かれる cattle fair (家畜市場)はとても有名で、多くの人々で賑わった。5, 6 日間の開催期間中に、牧牛業者(graziers and cattle dealers)が家畜を連れて、ザモーナ州のあちこちから集まってきた。この中に、家畜商に似つかわしくない、一際美しい馬に乗って 6, 7 人の紳士がやってきた。

You know at that time Hartford was the very centre of. the whole wide and luxuriant grazing district of Zamorna. And its yearly cattle fair was the most celebrated and best frequented in all the east side of Verdopolis....the beasts [Gentlemen on Horseback] rode were as exquisite animals as I had ever beheld

and the riders most of them looked very unlike graziers and cattle dealers....

(*Works* 2: 224)

一行の中に、“a very tall Gentlemanly figure. in deep mourning black. with a walking cane and white kid gloves gathered in one hand” (225)がいた。彼こそがロウグであり、彼とその仲間たちは、宿屋で乱暴をふるまい、決闘用の拳銃を振りかざす。彼は名声を博し、多くの顧客を集め一躍有名になり、ハートフォードの上流階級の最上流へと身分を上げた。

ロウグはエドワードに最高値の付いた家畜を売り、高配すると見せかけて、彼を賭け事に深入りさせる。彼はたった 2 週間の間に、複雑な家畜商売を持ちかけて騙し、何度も水増し株や小切手を渡し、借金を膨らませ元金の 2 倍にして請求した。エドワードには息子がおり、ロウグは彼を夢中にさせ、“Rougues Riders only the Arch Feind[sic]”（「ロウグ悪魔商会」）に誘い込もうとした。エドワードには高貴でプライドも高いアメリアという娘がおり、ロウグは彼女に好意を寄せる。その後、ロウグと彼の一行はエドワードの全財産を奪い、ハートフォードを去った。アメリアは、グアディマの岸から戻る途中、アフリカ人にさらわれた。リチトンはこの後、哲学の島へ行き 3 年間過ごす、ある時深い森で Alexander Percy（ロウグの新しい名前）とアメリアに遭遇する。そして 14 年前に島からハートフォードへ戻った時、そこで荒れ果てた屋敷を目にするのだ。パーシーへの多額の借金により逮捕され、ヴェルドポリスに移送されていたエドワードは、牢獄で家族を思い、熱病で亡くなる。パーシーは屋敷をすぐさま押収し、賃貸しして得た収入を執事のスティアトンに受け取らせた。悪漢であるパーシーは今やノーザンガーランドとして、アングリア新国の首相であり、国家は彼を嫌っている。ここで、リチトンの回想は終了する。

また、「アングリアとアングリアの人々」Ⅲ（e）においても家畜商人（drover）という言葉が 4 回登場する。ここでヘイスティングスはノーザンガーランドの父親の代に遡ってノーザンガーランドの生涯について説明をする。“Percy of course became King and Emperor among all the Drovers Cow Jobbers Cattle dealers pasturers and farmers of Africa they could not tell what to make of him but they worshipped him and wondered at him[.]” (*Works* 2: 662, underline mine.) ここで非常に興味深いことは、畜産農家を生業とする職業が羅列されている点である。18, 19 世紀イギリスの drover の歴史につい

て研究を行った Kenneth J. Bonser によると‘drove roads’と呼ばれる家畜が通る道は 6000 年前まで遡る。ウェールズやスコットランド、イングランド北部から都市部、最終的にはロンドンに向かって数多くの家畜道が存在し、牛の他羊や豚がこれら何百マイルもの家畜道を歩いた。drover は家畜追いで、家畜を市場（cattle fair）あるいは農家に連れていく職業である。家畜道を通して旅をする家畜追いは、過酷な旅路から牛を生き長らえさせるため、その道中で pasturer または grazier という牧場主（牧牛者）に手数料を払って家畜に餌や休息を与えた。また jobber は家畜の仲買人であるが、投機家であり、市場に集められた牛の需要や価値を見定め投機して儲けた。

鉄道時代直前の家畜取引と農業の変化について考察した Janet Blackman は、史実に基づき当時の家畜市がどれほどの規模のものであったかを示す一例として、エディンバラとグラスゴーの中央に位置する Falkirk Trysts で行われた家畜の見本市について詳解した。18 世紀末にはスコットランドで最も重要な市となっていたこの見本市では、最盛期には 15 万頭もの牛、羊、馬がスコットランド各地から押し寄せ、およそ 2 千人にも上る家畜商が野原に寝泊まりし、イギリス全土から集まった何百人もの買い手と取引を行った。このフォルカークの見本市は、1830 年代か世紀半ば以前にピークに達したと考えられており、その頃には、輸送手段の変化がスコットランドとイングランド間の牛の取引構造に影響を与え始めていた（60）。また Thomas Gisbourne は *Essays on Agriculture*（1854）の中で、1849 年のフォルカークの見本市について、「イギリス全土、また世界中でも類を見ない光景」と記した。¹⁰⁹

つまり、ブランウェルが「アングリシアとアングリシアの人々」に取り組んでいた 1834 年から 1839 年は、鉄道全盛期幕開けの直前であり、蒸気船や蒸気機関車が産声を上げていたものの、それらが家畜の輸送手段として確立される前段階にあり、drove roads を通って家畜を移動させる家畜追い全盛期の最後の時代であったのである（図 5）。Blackman が述べるように、1839 年は未だ家畜追いが大活躍し、イギリス版カウボーイが存在していた。家畜取引は投機的な要素が大きく、「特に赤身牛（lean cattle）として購入する時点での家畜の価値、スタミナ、肥育の可能性を判断するには、ある程度の技術、経験、さら

¹⁰⁹ “All Roads Lead to Falkirk: Gaelic Heritage and the Falkirk Tryst.” *ourstoriesfalkirk.com*, <https://ourstoriesfalkirk.com/story/all-roads-lead-to-falkirk-gaelic-heritage-and-the-falkirk-tryst>

には運に左右された。家畜の価値とその肥育特性を正しく判断できるかどうか、小金持ちになるか破産するかの分かれ目だった」(60) ののである。



図 5. “Drovers and their flocks in the north of England,” T. S. Cooper, 1837.

文学において drover をいち早く描いたのはスコットであり、彼の祖父も drover を生業としていた。スコットの小説『2 人の家畜追い』(*The Two Drovers*, 1827) では二人の家畜追いの衝突を通して人間模様が描かれる。ブランウェルがスコットのこの小説を読んでいたかどうかは定かではないが、初期作品を通してスコットの引用が多いことから、その可能性は否定できない。『2 人の家畜追い』は、ハイランドの家畜追いがヨークシャーの家畜追いと決闘をし、殺人の罪で自首し、裁かれる物語であり、スコットが実際に聞いたイングランド人家畜追いの殺人事件に基づいている。この作品は、19 世紀初頭の家畜追いの実態を知る上で貴重な資料となっており、Bonser の研究書 *The Drovers: Who they were and how they went* (1970) においても多数引用されている。語り手は、家畜の見本市では「ハイランドの農民の心を喜ばせるほど、イングランドの金が陽気に飛び交った」と述べ、家畜追いは「牛を購入した市場から、その牛を肥育するための畑や農場まで、何百マイルもの道のりを走らせた」と説明する。1827 年執筆当時、家畜取引がスコットランドの人々に多くの財をもたらしていた状況、また家畜追いが重要な責務を負い、過酷な重労働を担っていたことを物語っている。

Bonser によれば、家畜追いの衰退は 1840 年代に始まった。その頃には鉄道の家畜輸送が加速し始めたが、それだけでなく、農業革命（輪作と囲い込みによる農業生産向上と農

村社会の構造変化)により、スコットランドでは年間を通じて牛を飼うことができるようになり、牧草地の質も向上したため、肥育のためにイングランドに送らずとも、良質の牛を育てることができた。と同時に、多くの土地が耕作地に転化されたり、広大な土地がライチョウ狩りのための湿地帯に指定されたり、ターンパイク・ロードの通行料が値上げされたりといった社会変化も起こり、家畜迫いの衰退に拍車をかけたのである。

ブランウェルは、家畜迫いの全盛期とその衰退の過渡期に、「アングリアとアングリアの人々」を書いていた。この職業は次章で扱う‘Thurstons of Darkwall Manor’ (1837) や‘and the weary are at rest’ (1845) においても、主人公パーシーの肩書として描かれる。ブランウェルは産業革命のみならず、農業革命が人々の生活にもたらした変化も敏感に察知し、姿を消しつつあった家畜迫いに光を照らし、物語に取り入れたのである。何より興味深いのは、ロウグがエドワード・ハートフォードに最高値の付いた家畜を売り、複雑な家畜商売を持ちかけて騙し、何度も水増し株や小切手を渡し、借金地獄に陥らせて屋敷を押収し、賃貸して収入を得る点である。どこかで聞いたことがあるようなエピソードである。『嵐が丘』で宿敵ヒンドリーをギャンブルに依存させ金を巻き上げ、挙句の果てに屋敷を手に入れたヒースクリフの悪行と見事に重なり合うのである。また、「高貴でプライドも高いアメリア」というエドワードの娘は、キャサリン・アーンショウを彷彿させる。ここまでの分析を考慮するならば、ヒースクリフが嵐が丘を飛び出してから就いた職業はひょっとすると家畜商であり、しかも家畜投機で一儲けし、成功したのではないか、という説も浮上するのである。

* * * * *

以上、「アングリアとアングリアの人々」を当時隆盛していた戦争手記小説の模倣として読み解き、ブランウェルの戦争小説の娯楽的側面について明らかにした。19世紀初頭のイギリスでは、戦争小説は一つのジャンルとして流通し、印刷文化と技術の発展を土台に、人々の戦争への関心が高まっていった。冒頭で引用したコールリッジの詩(“all read of war, / The best amusement for our morning meal!”)にもあるように、戦争を語ることは人々の間で娯楽となり、ハワースの牧師館において戦争に関する出版物を読むことにより、ブランウェルは自らも戦争小説を書くことに挑んだ。作品としては不完全であるが、

『サバルタン』を模倣した箇所が随所に見られ、戦争小説の系譜として位置づけることが出来る。戦争について語りまた読むことがイギリスの中流階級の人々にとって娯楽の一種として捉えられていたことは、ブランウェルの「アングリアとアングリアの人々」においても自明の理であろう。

実際、彼は戦争詩人でもあった。ブランウェルは、アングリアの世界から脱却し、詩人を目指すべく地元紙に詩を投稿したが、その一つに 1842 年 *Leeds Intelligencer* に Northangarland の筆名で掲載された“The Afgan War”がある。英国軍が大敗を喫した第一次アフガン戦争（1838-42）において、遠く離れた戦地で寒さに凍えながら死にゆく多くの兵士を弔う詩である。その詩の最後は、英国軍を鼓舞する言葉（‘England! keep it streaming vanward; / Conqueror over age and clime.’ *Poems* 224）で閉じられている。ここにははっきりと、植民地主義を推し進める英国を賛美するナショナリズムが表れている。「アングリアとアングリアの人々」のペルソナである戦争詩人ヘンリー・ヘイスティングスは、アングリアという仮想空間を抜け出し、ブランウェル・ブロンテという現実世界に生きる戦争詩人へと変身を遂げたのである。

また、語りの脱線部分において、19 世紀初頭の農業革命により社会に変革が起きた様子を、家畜商の表象を通して描いたこと、そしてその表象がエミリの『嵐が丘』のプロットにも影響を与えている可能性についても示唆した。この家畜商のモチーフは、ブランウェルが最後に取り組んだ散文においても描かれているが、そこでもまた新たに、主筋とは関係のない偽説教師による説教風刺が描かれる。最終章では、語りの脱線がブランウェルの創作活動において非常に重要な部分であり、そこに作品の文学的価値があることを明らかにしたい。

第6章 アングリアの先を目指して——「そして疲れし者は眠りについた」

「アングリアとアングリアの人々」第1章においてリチトンが語りの脱線で描いた家畜商のプロットは、その後再び断章である‘Thurstons of Darkwall Manor’（1837、本稿では以後「サーストン」と呼ぶ）において描かれる。¹¹⁰断篇「サーストン」においてブランウェルは戦争色を消し、姉より先にアングリアの世界と決別するべく、物語の舞台をアフリカからイギリスに移した。¹¹¹この断篇を基に3巻本の小説に挑戦しようとした作品が、ブランウェルが取り組んだ最後の散文「そして疲れし者は眠りについた」（本稿では以後「疲れし者」と呼ぶ）である。伝記作家たちは、執筆された時期がちょうどロビンソン家から解雇された後であることから、この未完の作品の前半部分におけるロマンス劇を、ブランウェルとロビンソン夫人との関係に重ね合わせ、そこにロビンソン夫人への報われぬ愛を読み取った。¹¹²しかし、本作品において看過できないのは、中盤に挟み込まれた、原始メソジストを揶揄した茶番劇（farce）である。原始メソジストの説教師に扮装したノーザンガーランドとその仲間たちによる、原始メソジスト派の牧師と説教を風刺する説教劇が、何ページにもわたり描かれている。実は、パーシーは既に「アングリアとアングリアの人々」第2章6節において、Ashworthの名でメソジスト牧師に扮して登場し、何ページ分もの説教を延々と述べる。また同時期にシャーロットも‘Passing Events’（「現在の事件」1836）において、メソジストチャペルで行われる礼拝の様子を風刺しており、この時に登場したメソジスト牧師と教会の名前が、ブランウェルが最後に取り組んだ未完の散文「疲れし者」においても登場する。「現在の事件」は、シャーロットが本格的な小説を執筆する移行期に最初に取り組んだ中編小説（novelette）と考えられているが、この時期にはまだ、二人が互いの作品を読み合いながら共作していた可能性があることを示していると言えるだろう。

本章ではまず初めに、原稿を時系列に分析する。「疲れし者」の草稿ともいえる断章「サーストン」の中に、文学作品へと生まれ変わる可能性を秘めたアイデアの萌芽を読み

¹¹⁰ ブランウェル全集第3巻に[Angria and the Angrians] IV (1) として収録されている（Works 3: 186-193）。

¹¹¹ シャーロットは1839年に、グラスタウンとアングリアに言及した最後の原稿を書き、その内容から通称‘Farewell to Angria’（「アングリアよさらば」）と呼ばれている。

¹¹² Gérin や du Maurier は、それぞれの書いたブランウェル伝において、ブランウェルとロビンソン夫人との関係がパーシーとサーストン夫人との関係に投影されていると考察した。

取り、彼が作り出した散文世界の断篇が後に『嵐が丘』においてエミリによって描き継がれ、彼女の作品の中で輝き続けていることを明らかにしたい。そして、この断篇を基に書かれた「疲れし者」において、ロマン主義的な要素を持つ散文に挑戦しようとした軌跡を辿る。しかしここでも原始メソジスト派の風刺という、本編に直接関係の無い語りの脱線が認められる。メソジストの礼拝風景はブランウェルのみならず、シャーロットやエミリが書いた小説においても痛烈な風刺と共に描かれている。したがってこの脱線についても考察を試み、国教会牧師を父に持つブロンテ姉弟妹にとって、非英国国教会派（dissenter）の風刺を描くことが一体何を表しているのかについても、明らかにしたい。

本論に入る前に、『嵐が丘』の作者を巡る論争について説明を付す。ハワース近郊の酒場クロス・ロード・インでブランウェルが『嵐が丘』の一部を朗読したと主張する William Dearden によって、『嵐が丘』の作者に関する興味深い論争が巻き起こった。¹¹³ 新しい詩の発表をするつもりだったブランウェルが自分の帽子の中から別の原稿を持ってきてしまったことや、原稿が不完全であったことなどから、Dearden はブランウェルが『嵐が丘』の作者であることを確信したという。この Dearden の他、その場に一緒に居合わせた Grundy も同様に確信し、ブランウェルの親友 Leyland も Grundy の回顧録に触れて、『嵐が丘』はエミリとブランウェルの共作であると推察した。Wise は *The Brontës: Their Lives, Friendships and Correspondence* において『嵐が丘』作者についてはエミリ以外の何者でもないと断定するものの、創作過程におけるブランウェルの何らかの影響については否定できないとし、その鍵を握る『嵐が丘』の原稿が現存しないことから、客観的証拠が不十分であるとした（2: 55-57）。Gérin は、伝記 *Branwell Brontë*（1961）において、証拠不十分の上に信憑性が無いとして補遺においてわざわざ全容を詳説し、論争に決着をつけた。しかしその一方で、du Maurier は、あくまでクロス・ロード・インでブランウェルから『嵐が丘』とよく似た物語の一説を聞いたとするハリファックスの仲間たちの証言に固執し、物語の全てを書いたのがエミリであることは間違いないが、兄妹が共に作品の構想を練り、またアイデアの断片が弟から沸き起こった可能性について否定しない（149）。¹¹⁴ 現在では、ブランウェルが何らかの形でエミリの作品に

¹¹³ これは、1832年に *The Halifax Guardian* に1867年6月15日に掲載された記事“WHO WROTE “WUTHERING HEIGHTS”?”に端を発している。この記事は、*Brontë Society Transaction*（vol. 7, no. 2, 1927, pp. 97-102）にて全文掲載された。

¹¹⁴ du Maurier は、『嵐が丘』が書かれた時期を1842年と推定し、その根拠としてロックウッドの語り口とその内容が、ブランウェルの語りと経験に類似していると分析した（110）。

寄与したとする見解に一理あることを認める論調にある。¹¹⁵Neufeldt によるブランウェル全集の中に、それまで入手が困難であった断篇「サーストン」が収録されたことから、ブランウェルがエミリに与えた文学的影響について、本稿でも根拠を提示しながら分析を試みたい。

1. アングリアとの決別——断篇「サーストン」

断篇「サーストン」は、もともとは3種類の断章を一つにまとめて‘Percy’というタイトルが付けられていた。¹¹⁶「アングリアとアングリアの世界」で見られたような戦争や紛争といった熱狂は無く、文体もガラリと変っている。その始まりを見てみよう。

Among all the descriptions I have read I do not recollect one to me more beautiful than that in the commencement of the Tales of my Landlord which describes the Burial place of the Covenanters at the Valley Head among the lonely Lowland Hills and I like it so much because there is not about it that selection of the sublime or beautiful in Nature where with to seize the mind independently of power in the writer or of sentiment in his subject For ex[c]eption in the Grave stones themselves half buried it is only the picture of one among many “long vales of green Bracken” with a rude ill cultivated country below and a brown fern Hidden brook within and dull stony swells around and a marshy monotonous Moor beyond But I born and bred upon the Hills side want no more of the great or striking to make me adore that description for I feel enough of the Associations called up at sight of those Linnet peopled Hills and well indeed the quiet nook of Grave stones tells me of

¹¹⁵ Duckett の *Brother in the Shadow* (1988)、Flintoff の “Branwell at the Heights: an Investigation into the Possible Influence of Branwell Brontë upon *Wuthering Heights*” (1994) や、Carolyn A. Van Der Meer の “Branwell’s Role in the Creation of Heathcliff” (2000) など。

¹¹⁶ du Maurier がブランウェルの伝記を書くために初めて筆写し、それをもとに Mary Butterfield は修正し、1988年に出版した。Butterfieldによれば、ブランウェルは作中において“Mr Heaton’s Pondens at Yorkshire”に線を引いて打ち消し、HeatonをThurstonに、またPondensをDarkwallに入れ替えた(*Brother in the Shadow* 43)。『嵐が丘』のスラッシュクロス邸のモデルにもなったPonden Hallは郷紳階級のヘアトン家が住し、牧師館から近いこともあり、ブロンテ家はヘアトン家と交流があった。ブロンテ家の子供たちはPonden Hallにあるコレクションから多くの本を借り、それぞれの作品世界にそれらの書物が影響を与えたと考えられている。

times when the perils of Life and the sternness of man fitly accorded with the
Moors and Mosses of their Mountain Land I will never believe that our minds
can be so well awakened by the poetry of distant and unknown Images as by
that of things we have long been used to know I would doubt the genius of that
writer who loved more to dwell upon Indian Palm Groves or Genii palaces than
on the wooded manors and cloudy skies of England. (*Works* 3: 186)

語り手が「私がこれまで読んできた描写の中で、コヴェナント派の埋葬地の描写ほど美しいものはない。」と述べる、スコットの『宿屋主の物語』 (*Tales of my Landlord*) は第4シリーズまであり、合計7作品からなる。¹¹⁷“long vales of green Bracken” (「緑のワラビが生い茂る孤独な谷」) は、第1シリーズ2作品目の *Old Mortality* (1816) の冒頭に登場する。ここでブランウェルは、「遠い未知のイメージ」と決別し、イングランドを舞台とした初の試みに挑もうとしている。この「遠い未知のイメージ」とは、アングリアの世界であり、その世界にまだ留まって創作をしているシャーロットを「イングランドの森林に覆われた荘園や曇り空よりも、インドのヤシの木立や精霊の宮殿に思いを馳せることを愛した作家」と評し、批判した。ブランウェルがスコットの『宿屋主の物語』に影響を受け、広大な川や砂漠、また灼熱やモンスーンといったアフリカの気候や風土から離れ、湿原や苔、墓石といったスコットランドの荒涼とした自然、即ち自らが属する現実世界の北部イングランドの風景に創作対象を近づけてきたことが分かるであろう。

物語の舞台は、Carnac のアードモア (Airdmore) 教区¹¹⁸であり、広大な牧草地と放牧地の中心地であるアードモアで毎年開催される大規模な牛の品評会の前日である。シーズン中ずっと、有名な家畜商人であるアレグザンダー・パーシー氏が参加するという噂が流れていたが、フェアの前日、彼は仲間と一緒に、ダークウォール邸にやってくる。このダークウォール邸に住むサーストン氏は、普段は遠く離れたヴェルドポリス近郊のエドワーズトンに住んでおり、身元の知れない令嬢と結婚した以外は、彼の先祖を含めて素性

¹¹⁷ 1 作品目の *The Black Dwarf* では初めに、ウォレス・インという宿屋の主人から集めた物語を、ピーター・パティersonが編集し、出版社に送ったものと語り手が説明する。舞台は1708年のスコティッシュ・ボーダーズの丘陵地帯で、連合法後にジャコバイトが試みた最初の反乱を背景にしている。主人公ホビーは領主とのいさかいで父親を殺された隠遁者パトリック・アーンスクリフに出会い、反乱やロマンスなどのプロットが展開していく。

¹¹⁸ Carnach (カーナック)、スコットランドのハイランド地方北西岸に位置し、Aird (エアード) はカーナックの対岸の島に位置する町。

が知られていなかった。ただ、サーストン邸に出没する Gytrash¹¹⁹は、「老ドワーフ風の醜い男の姿で知られており、しばしば頭部を持たず、邸の周囲に広がる裸の野原に沿って暗闇の中を移動する姿が目撃されていた」(*Works* 3: 187)。

主人公アレグザンダー・パーシーは、メイドから「異国で名を馳せ、長い間アフリカの炉辺の話題となっていた有名な家畜商人」と称されるように、ここでも職業は *cattle dealer* である。また、彼の従僕 Robert King、通称スデスはパーシーにとって「私的な使用人であると同時に、彼の大規模な馬取引における仲介人の頭 (“the chief agent in his extensive Horse trade”) でもあった。ヨークシャー生まれの老盗賊であり、騎手としての教育を受けたスデスにとって、この職務はまさにうってつけであった」(*Works* 3: 191)。家畜商人は、17 世紀頃からイギリスの各地で催されていた家畜の品評会 (*fair*) において馬や牛、羊といった家畜の売買を仲介するブローカー、或いは家畜を投機買いして荒稼ぎする投資家など、その定義は幅広い。家畜の多くはスコットランドやアイルランドで飼育され、*drover* と呼ばれる牛追い人によって家畜市まで移動され、売買されたが、鉄道や蒸気船の普及によって、それら家畜市や品評会の需要が減っていく。すでに前章で詳述したように、*drover* という職業から、*cattle dealer* という職業へと微妙に変化していることは、特筆に値する。鉄道の普及により、19 世紀初頭から徐々に *drover* という職業が衰退をし始め、農業や畜産も産業革命によって変動を余儀なくされていた。その過渡期であったということを、ブランウェル自身が敏感に察知していたということであろう。

狩猟に招かれたパーシーとその一行が、サーストン氏の帰宅より先にダークウォール邸に到着し、主が不在であることを知ってサーストン夫人と面会を果たす。パーシーとサーストン夫人のやり取りはとても短く、ここでは断片的な情報しか与えられない。サーストン夫人は 27 歳くらいで、13 年前に最後に会ったときはまだ 14 歳であった。それ以降サーストン夫人は、悲しみに暮れ危険な状態にあるパーシーの噂を耳にするたびに、幸せだった頃の彼の姿が脳裏によぎった。この二人の関係については、「疲れし者」において詳解することから、後述する。

その後サーストン夫人が準備をした食事を囲みモンモレンシー、ジョージ・ゴードン (George Gordon)、アーサー・オコナー (Arthur O'Connor)、そしてスデスを含めた客人

¹¹⁹ ガイトラッシュに纏わる迷信は、ヘアトン家の Ponden Hall にあった (*Brother in the Shadow* 47)。ガイトラッシュが文学史上初めて描かれたのは『ジェイン・エア』(1847) であると *OED* は解説するが、姉より先にブランウェルが描いていたと Neufeldt は指摘する。(*Works* 3: 186, n. 9)

5 人が酒を煽りながら行う会話から、彼らの素性が断片的に明かされる。先述したパーシーの馬取引において主要なブローカーであるスデスは、ニューゲート刑務所で名をはせたかなりの悪党である。彼らは、出くわした商人たちから流血の末、500 ポンドを強奪した。そんな放蕩ぶりにも関わらず、サーストン夫人はパーシーに強く心を惹かれる。

The strange union which formed Percy's character of Debauched profligacy and impassioned feeling and restless Ambition and which then was but beginning to be over clouded by his after embittered melancholy but always excited the interest in Mrs Thurstons mind which it had done in the minds of many thousands besides and the story of his life its ceaseless wanderings and rumored crimes only added to that interest and kept awake the Romance which his present employment might have tended to destroy.... (*Works* 3: 192)

サーストン夫人にとって、パーシーの「人生、すなわち絶え間ない放浪と噂される犯罪の話は、現在の営みによって失われがちなロマンスを呼び覚ましてくれた」のである。ここでは確かに、アングリアの世界で描かれた、墮落したパーシーの人物像が引き継がれており、Neufeldt が、それまでの戦争小説の趣とは相容れない「サーストン」を「アングリアとアングリアの人々」に含めた理由が理解できる。ブランウェルは、冒頭においてスコットの『宿屋主の物語』を称賛し、現実世界を描くべくヘアトン家の Ponden Hall という身近な素材に取材しつつ物語を書き始めたものの、長年こよなく愛し描き続けてきたアレグザンダー・パーシーを超えるヒーローを描くことは出来なかった。しかし、ダークウォール邸内部を描写する箇所では、『嵐が丘』の第 1 章で描かれるワザリング・ハイツを取り巻く自然環境とその内部に関する情景が、実に見事に鏤められている。ここでは特に内部の様子について、『嵐が丘』の該当箇所と共に紹介する。¹²⁰

That Kitchen in the decline of November Daylight seemed Ruddied all over by the glow of the Roaring fire that flashed all its radiance upon the mighty

¹²⁰ 筆者は Neufeldt 版の「サーストン」を初めて読んだ時に気づいたが、Mary Butterfield も同様に、「突然『嵐が丘』の冒頭を彷彿させる描写が始まる」と指摘していた (*Brother in the Shadow* 43)。

Dresser of Ancient and Burnished pewter In so much that far opposite from the else darkened end of the Room that front of polished metal reflected in every plate and dish a bright and bickering blaze The Dark Oak Settles themselves glistened and the faces of the Neat Aproned Servant Maids shone brighter than either while they bent to their duties over the Hissing Roast and fragrant steaming Ovens Hardly at any bidding would the 2 great Spaniels quit such a[n] Elysian Hearth and when they were forced to leave it for the darkening passage the change so pressed upon their hearts that pricking both ears at the social roar from the Drawing Room they barked till all the House rung Hollow with the Echoe. (*Works* 3: 188-9)

...I distinguished a chatter of tongues, and a clatter of culinary utensils, deep within; and I observed no signs of roasting, boiling, or baking, about the huge fire-place; nor any glitter of copper saucepans and tin cullenders on the walls. One end, indeed, reflected splendidly both light and heat from ranks of immense pewter dishes, interspersed with silver jugs and tankards, towering row after row, in a vast oak dresser, to the very roof.... In an arch, under the dresser, reposed a huge, liver-coloured bitch pointer surrounded by a swarm of squealing puppies, and other dogs haunted other recesses. (*Wuthering Heights* 5)

台所から聞こえてくる音、暖炉の火に照らされる食器、ピューター、犬、といった一つ一つの情景が見事に重なり合っていることが分かるだろう。また、この断片の締めくくりでは、サーストン夫人が用意した食事の席で客人たちが大酒を飲み、騒ぎ始めたのち、サーストン夫人がパーシーに次のように語る。“It was much my fear that this wild moorland and ancient House would oppress you with lassitude and ennuye[.]” (*Works* 3: 193) 先述した通り、ハワース近郊に実在した Ponden Hall はブランウェルの描いたダークウォール邸のモデルであり、またエミリが描いたスラッシュ・クロス邸のモデルでもあるが、ここに示されるようにむしろワザリング・ハイツの内部と酷似しているのだ。また、

後述するように、『嵐が丘』もスコットの『宿屋主の物語』シリーズからの影響を受けていることも付け加えたい。

アングリアの世界で物語を書き続けている姉を揶揄し、「イングランドの森林に覆われた荘園や曇り空」を舞台に現実世界に物語を近付けようと試みたものの、変わったのは風景だけで、そこに描かれている登場人物や彼らの職業は、アングリア世界の延長線上にあった。スコットの『宿屋主の物語』に対する称賛で始まった「サーストン」には『嵐が丘』の原風景となるものが潜在するものの、ダークウォール邸で繰り広げられるロマンス劇はこれといったプロットが無いまま終了し、ステスやモンモレンシーを始めとした「アングリアとアングリアの人々」でブランウェルが愛し描き続けてきた悪党のキャラクターが依然として存在感を出している。そしてこの断片を元に書かれた「疲れし者」では、彼らにメソジストの偽説教師という役割が与えられ、5人の偽説教師による風刺劇が描かれるのである。

2. 戦争小説からの脱皮——「そして疲れし者は眠りについた」

1845年9月10日、ブランウェルは親友レイランドに宛てた手紙の中で、三巻本の小説に取り組んでおり、その第1巻が完成したと告げた。¹²¹この未完の小説を執筆する約2年前に書かれた原稿が、前節で詳解した「サーストン」である。「疲れし者」の特徴は、何といっても、初期作品の中でも、誤字脱字、パンクチュエーションの誤りが比較的少ない点にあり、ブランウェルが出版を意識して執筆したことが如実に表れている。物語の内容は、「サーストン」の場面設定を踏襲しつつ、パーシーとサーストン夫人の長いセリフに何ページも割き、二人のロマンスに焦点を当てている。物語はいきなり、寢床で回想するパーシーの心理描写で始まるが、レイランドへの手紙でブランウェルが体の不調（“downright illness”）について言及したように、自身の身体の衰えに対する不安が述べられる。

When this firm foot can no longer tread the heather this warm blood no longer
thrill to a womans touch this working brain no longer teem with thick coming

¹²¹ “I have, since I saw you at Halifax, devoted my hours of time snatched from downright illness, to the composition of a three volume *Novel*—one volume of which is completed—and along with the two forthcoming ones...” (Francis A. Leyland, *Brontës: Their Lives* 2: 60)

fancies this omnivourous stomach no longer bear its three bottles or twenty tumblers—then what the devil is Alexander Percy to do? (*Works* 3: 420)

執筆された年にはロビンソン家の家庭教師を解雇されており、心も体も不安定になってきていたことが表出されているだろう。医師や看護師に看護されながら朽ち果てる病人の生活を危惧して、次のように続ける。

The Vicar or his curate the gate posts to flank me in an Harlequin jump into the life to come No Mary—No, not Thee Maria—to remind me by their voice and presence that earth has had its ‘Paradise lost’; no Ezekiel or Zechariah or Habbakuk or other hero with a name as rough as his beard to give me a shoulder hitch into ‘Paradise regained.’ Well as honest Nym has it “things must be as they may....” (*Works* 3: 420)

ここでは、旧約聖書に登場する予言者たちを揶揄しながら、追放された樂園、即ち神の国に再び戻ることはできない、と最後の審判に対する諦念と、開き直りが示されている。この後パーシーは、「私があれほど忌み嫌った身体の破滅に向かってまた一歩前進してベッドから起き上がり」、サーストン邸にライチョウ狩りの客人として招かれた男性陣に加わるべく、馬番のロバートに話しかける。「サーストン」で馬商のブローカーで悪党として描かれていたパーシーの従僕のスデスは、ここでは馬番として登場し、その言い回しは、『嵐が丘』のジョゼフを彷彿させる。

“Wheel Maister” said the old man liberated from the gripe of his gigantic young Master....Aw hev been yaw’re sarvent and the sarvent o’ yaw’re father—and knew him that wor th’ owd maister of all....Naw Maister Aw tak the blessed book or owd John Wesley’s hymns or ought else yaw like to witness that Aw wor there and then filling yawr hampers and feeding yawre dogs—for

Me—me that's gotten to age Aw hev gotten to—to be called a folloer o'woem nis
raily—nay—beyond reason!" (*Works* 3: 421-22)¹²²

パーシーに仕えるスデスが話す英語は、『嵐が丘』でジョゼフが話す英語と同じである。ジョゼフの訛は、英文学史上でも数少ない、Yorkshire Dialect、厳密には Worth Valley dialect と呼ばれている。¹²³ヨークシャー言葉をなぜエミリが正確に書き写せたかについて、Flintoff は緻密な分析を行い、ブランウェルからの影響があったことを論証した。さらに Flintoff は、エミリはスコットの *The Black Dwarf* と *Old Mortality* をモデルにして、作品に方言を取り入れたと考察した。これら 2 作品は、先述したように「サーストン」の冒頭において語り手が称賛した『宿屋主の物語』の第 1 シリーズの 2 作品でもある。Flintoff はさらに、ブランウェルの「羊毛は高騰する」や「閣下の生涯」において、ヨークシャー訛を話すキング・スデスが誕生し、その彼に少しずつ「似非宗教心（“religiosity”）」（329）が加えられていき、その進化されたスデスを、『嵐が丘』のジョゼフが継承したと分析する。ジョゼフは、『嵐が丘』において終始毒舌を吐き、アーンショウ家の似非牧師の役割を果たしていることから、その相似性は明白であろう。先に引用したパーシーのベッドでの独白にもあったように、「疲れし者」の冒頭においてすでに、宗教に対する風刺の兆しが見られるのである。

パーシーとサーストンの他、アングリア物語ではお馴染みのパーシーの 4 人の仲間、モンモレンシー、オコナー、クオシャ、ゴードンと共に狩猟が始まる。しかし早めに切り上げたパーシーは、一行を残して一人館へと戻る。パーシーはここで、かつて好意を抱いていた女性、サーストン夫人と再会し、大袈裟で誇張された表現を用いて彼女の心を惹きつけようとする。一方夫人は、サーストン氏から愛情を受けず寂しい思いをしており、パーシーへの愛に答えたい気持ちを必死でこらえる。¹²⁴この二人の会話の断片を見ていくことにする。

¹²² ジョゼフの話すヨークシャー訛りは難解なので、拙訳を付す。「巨大な若い主人の掌から解放され、その老人は言った。「ご主人様、私はあなた、そしてあなたの父の使用人であり、その父をよく知っている。...いやご主人様、聖書かジョン・ウェズリーの讃美歌か、あるいは他のものに誓って証言するが、お前さんの食料籠を満たし、馬の世話をしてきたこの年老いた男が、女の信奉者と呼ばれるのは、本当に、いや、道理を超えたことだ！」」

¹²³ ヨークシャー訛りが使われた文学作品としては外に、Charles Dickens（1812-70）の *Nicholas Nickleby*（1839）がある。

¹²⁴ 伝記作家たちが、夫から十分な愛を享受していなかったと考えられているリディア夫人とブランウェルとの関係に準える所以である。

[D]oes [Mrs. Thurston] dislike me more or less than the dozens or scores of country boors that alone have awaked her silver voice since the day she left Euston Square Station?—She knows God has not blighted me with the thunderbolt of personal deformity or the Typhoon of repulsive manners...Look at this Old Hall Maria Thurston—is it a hypocrite? Look at what that mirror reflects—Is it an image qualified to shine only in a London crowd of fashionables or over the benches of a Methodist conventicle? You KNOW you are a lady and that a man if worthy of the name can neither dislike or even feel indifferent to you. (*Works* 3: 433-4)

「ユーストン・スクエア駅を発って以来」、「メソジストの秘密集会よりも、ロンドンの華麗なる群衆」とあるように、サーストン夫人はロンドンの中上流階級に属していることが分かる。また、「神は私を個人的な奇形という雷鳴や、嫌悪すべき行いという台風で貶めたのではない」とパーシーは自らを卑下し、サーストン夫人との身分の差を強調する。この箇所は、語り手が介入することなく、二人の会話で進む。これは『嵐が丘』で家政婦ネリーが二人の会話を直接聞いて、ロックウッドにその内容を回想し伝えた方法と、描かれ方が似ている。さらに続けてパーシーのセリフが続く。

When I leave Darkwall and return to Percy Hall shall I not feel a sad vacancy when my lonely evenings after dinner are spent in studies where a weary head misses sadly the little hand used to stroke its hair or the soft lap that used to ease its aching—where my little girl alone will give all that childhood can of affection but where I shall leave among northern clouds and heather the polar star of love—Oh do not start Maria Thurston for you too will think of me when I am gone—You will know too well what place you will fill now—What place I would have you to fill to feel indifferent to Alexander Percy. (*Works* 3: 436)

ここで、“the little hand”、“my little girl”、また“childhood”とあるように、この二人は幼馴染であることが分かる。前節で詳解した「サーストン」で得られる断片的な情報と突き合わせると、サーストン夫人とパーシーはユーストン・スクエア駅で 13 年前に最後会った。その時夫人は 14 歳だった。その後彼女はヨークシャーで結婚し、夫から十分な愛を受けず、寂しく過ごしていた。かつてパーシー・ホールで夫人が見たパーシーは幸せそうだったが、今は悲しみにくれていることを知り、憂いている。パーシーの悲しみとは、最愛の妻メアリを亡くしたことである。「サーストン」では、サーストン夫人がパーシーの放蕩ぶりに心を奪われ虜になりそうな予感を感じさせるが、「疲れし者」では、内面をひた隠しにし、心を奪われないように冷静さを保ちながらも、パーシーへの想いに今にも屈する女性が描かれている。

以下の引用は、パーシーが募る思いを吐露し、激昂へと変わっていく箇所である。サーストン夫人が、パーシーの亡き妻もまた、夫にのみ愛を誓っていたのではないかと尋ねると、次のように高揚して訴える。

Maria Thurston—You distress me....What if that goal [of my forthcoming life] be yourself? Why should you shrink from intercommunion with myself whose every sinew would rouse to save your little finger from harm—Who besides me would make his life a secondary consideration to yours? Who besides me would forsake mans idol pleasure to worship what is too often womans idol pain—Who would, though you call him indulged, bear the pains of a prison to see you enjoy the pleasure of a palace. (*Works* 3: 436)

この畳みかけるような激しい求愛に晒され、苦痛に耐えながらも夫への忠誠を保とうとするサーストン夫人に対し、苛立ったパーシーは、「マリア・サーストンはサティーをするつもりなのか？」と尋ねる。この *suttee* (夫の殉死) は、『ジェイン・エア』においてロチェスターがジェインに求婚する際に、ジェインが口にした言葉である。¹²⁵パーシー

¹²⁵ 「私は、夫と一緒に死ぬつもりはありません。・・・私も夫と同じように、時が来れば死ぬ権利がある。でも、私はその時を待つべきで、急ぎ殉死すべきではない (“not be hurried away in a suttee”, *Jane Eyre* 273) 。」とジェインはロチェスターに答える。ヒンドゥー教徒の旧習である *suttee* は、英領インドでは 1829 年に禁止された。サティーは、『ジェイン・エア』における他の植民地主義的な表

が巧妙に口説き文句を言い換えながら、サーストン夫人の心を射止めようとやっきになる
ところで、一旦二人の逢引のシーンが終わる。原始メソジストの偽牧師の長い語りを挟ん
だ後、語り手はサーストン夫人とパーシーの秘密の会話の続きを描く。夫のいない部屋で
二人は愛を確かめ合うように抱擁し、その後戸外を散歩し、髪を乱したサーストン夫人と
怪しげな目つきのパーシーが戻ってくるところを、狩猟から帰ってきたモンモレンシーが
目撃する。パーシーとその一行がダークウォール邸から去るのを見守るサーストン夫人は、
「ああ神よ、私の人生は変わってしまった」と罪を告白する。夫の非情な暴虐よりも、愛
のあるパーシーの元に行きたいと思う気持ちに神への許しを請いつつ、妻の務めを果た
すために部屋を出たところで、原稿は終わる。

本節では、Flintoff の先行研究を援用し、『嵐が丘』のジョゼフが話すヨークシャー訛
りには、ヨークシャー訛りをマスターし、スデスに語らせていたブランウェルからの影響
が表れていることを明らかにした。前節で論じたことを合わせ鑑みると、「サーストン」
と「疲れし者」の中には、『嵐が丘』のアイデアの断片が潜在していることは否めないで
あろう。本論文は、ブランウェルがシャーロットのみならず、エミリの作品にも影響を与
えたことだけを根拠に、彼に文学的才能があったと結論付けるものでは決してない。しか
し、姉妹らへのアイデアの供給源であったことに、彼の文学的意義を十分見いだせるので
はないだろうか。

3. 偽メソジスト牧師のプロット¹²⁶

パーシーとサーストン夫人とのやり取りに続く部分では、ダークウォール邸から一転し
てホテルに舞台を移し、パーシーとその一行が偽牧師に扮装し、アードモア家畜フェアで
説教イベントを計画し、実行するところまでが描かれる。パーシーとスデスは朝から酒を
煽り、原始メソジスト（primitive Methodist）の讃美歌を大声で歌いまくる。客室係の

象（三角貿易をなすマデイラ諸島やトルコのスルタン）と並び、Gayatri Spivak に代表されるようなポ
ストコロニアリズム批評においてキーワードとなっている。筆者の調べた限りでは、ブランウェルが
『ジェイン・エア』に先駆けて“suttee”（妻の殉死）のトロープを作品に取り入れていたことを指摘し
た先行研究は、Eryn Nyborg の博士論文 *The Brontës and Masculinity* (2016) だけであった。

¹²⁶ ウェスレアン・メソジストは、ジョン・ウェスレーの死後、英国国教会から分裂し、イングランド
で多数派となったメソジスト運動である。ウェスレアンという名前からも、ウェールズのカルヴァン主
義メソジストや、1807 年にウェスレアンから分離した原始メソジスト運動とは区別されていた。また、
原始メソジストは主要メソジスト団体の中で、最も労働者階級に属していた。ブランウェルは、
Wesleyan Methodist と Primitive Methodist をそれほど区別はしていないが、特に原始メソジストに対
しては風刺の度合いが強く表れている。

メイドに、家畜市が開催される間、長腰掛椅子と説教壇のある部屋を用意するように頼んだパーシーは、ライチョウ狩りをする名士の格好から、黒い聖職服、首元には幅広のスカーフを巻き、フロックコートを羽織り、アレグザンダー・パーシー「牧師」(Rev Alexander Percy)に変身する。さらにパーシーは使用人に、ホテル内でウェスレー派または原始メソジストの牧師を探し、class leadersを連れてくるように依頼する。このクラス・リーダーというのは、メソジストでは組会のリーダーを指す。

かの有名な富豪が会いたがっていると使用人から伝言を受けたサイモン牧師は、朝食テーブルからひっくり返るほど驚き、頭の中には様々な計算が渦巻く。「チャペルの負債、年4回の定期出資金、十数種類の基金への寄付、国立校を粉砕するような新校舎の構想。大理石の石版には、創立者の名前「アレグザンダー・パーシー殿」と、自らの肩書である福音の説教者サイモン・スラグ牧師、¹²⁷そしてその下には貴族の翼の下に慎ましく隠れる評議員たちの名が刻まれている」(*Works* 3: 443)。サイモン牧師は直ちに、二人のクラス・リーダーを連れて、パーシーの部屋を訪ねる。パーシーは仲間である4人の牧師、モンモレンシー、オコナー、クオミナ、ゴードンを紹介し、悪事を行ってきた罪深い彼らが説教をすると知った3人のウェスレー派牧師は歓喜する。パーシーに依頼され10ソヴリンを渡されたサイモン・スラグ牧師は、ウェスレー派宣教協会による会合のチラシを作成し、それを町中に宣伝する。この後、サイモン牧師が司式を執り、集まった会衆の前でパーシーから順番にリレー形式で、かつての罪人がどうやって救われたかについて、大袈裟な説教が語られる。パーシーの説教の冒頭部分を見てみよう。¹²⁸

“My brethren and Sisters in Christ—I feel so much oppressed with the weight of a duty which a higher power has laid upon me that I request from you a song of prayer and praise ere we open forth the business of this evening—My brother Slugg I shall give out an hymn and accompany it to the Organ myself so it will be quite unnecessary for my christian friend to make any use of the instruments I see in the music seat.” (*Works* 3: 450)

¹²⁷ Simon Slugg 教会と説教師 Mr Bromley は、これより前にシャーロットが書いた「現在の出来事」(1836)に登場した。

¹²⁸ du Maurier は、以下に描かれるパーシーの似非説教の箇所を称賛し、「サーストン」におけるパーシーの描かれ方と比べ、ブランウェルの文体技術に向上が見られ、パーシーの人物像に説得力が増していると分析した(152)。

説教を語る前に楽隊の伴奏を辞退し、自らがオルガンを弾きながら讃美歌を歌うと言い出すパーシーに、モンモレンシーはハンカチで顔を覆い、肋骨を震わせながらこみ上げてくる笑いを必死で隠そうとした。大真面目かつ強情で御し難い性格である最愛の友人、パーシーが、この茶番劇をやり遂げようとする断固とした決意を見たのである。パーシーが弾き語る讃美歌に続いて、説教が始まる。

“My brethren God hath opened out a path through this worlds wilderness, and as to those who ask, much will be given, so to you who seek much will be found. We are nothing ourselves and by ourselves we can do nothing but guided by that Star which shone over Bethlehem more than eighteen hundred years ago and which now, if our dimmed eyes could see it, shines over Ardmore...I plead my brethren for Africa...for Asia...for America...for EUROPE....And now my brethren must I not plead for the Island which gave me birth? For the land wherein lies all I have most loved on earth—among whose hills and vales my sorrowing body walks; beneath whose soil my weary head must rest—Must I not plead for our England—for our father land?” (*Works* 3: 452-3)

ここでは、後述する Mr Ashworth に扮するパーシーの説教と比べて、言葉遣いも丁寧であり、感情も抑えられ、熱狂性が薄らいでいる。同じく偽説教師ではあるが、アングリヤの世界とは一線を画そうとしていることが窺える。パーシーが説教を終え一礼して着席すると、500 人もの興奮冷めやらぬ聴衆はハンカチを出して涙を拭いていた

The Rev A Percy with a general bow to the enraptured audience took his seat amid a flourish of five hundred white handkercheifs. The Male portion of the assembly groaned deeply but the female portion felt deeply, and if a keen observer had noticed the odd half smile on Percys mobile lips as he looked round after taking his seat he would have known at once that the Orator had

known to whose feelings he ought to address himself and to whom he meant to feel indifference.

When the tempest of groans, sobs, sighs, and screamings had somewhat subsided the Revd Hector. M.M. Montmorency rose and with his blacksmith arms folded across a breast as broad as Ben Caunt's and his wild Irish eyes glinting like black diamonds in a coal mine he burst forth in tones like the bass of La blache[.] (*Works* 3: 454)

着席したパーシーの唇にこぼれる薄笑いの中に、誰に対して語り掛けるべきか、また逆に誰に対して無関心を装うべきかを、牧師が熟知している様子が窺える。うめき声、すすり泣き、ため息、叫び声の嵐の中、次の説教師、モンモレンシーがボクシングの選手さながら登壇するのである。¹²⁹Neufeldt の注釈によれば、その後に続くモンモレンシーやクオシャらの説教には、聖句や讃美歌、『天路歷程』からの引用を用いたパロディ、また古代ローマ史上、またイギリスやアイルランドの宗教史上の人物が数多く登場する。ブランウェルは 1836 年にも、パーシー扮する牧師 Mr Ashworth が行うメソジストの説教を揶揄する内容の原稿を書いており、「アングリアとアングリアの人々」第 2 部 6 章 (*Works* 2: 518-23) に収録されている。これと時を同じくして書かれたシャーロットの「現在の出来事」でも、Slugg Street Chapel¹³⁰で説教が行われる。語り手が通うチャペルの説教師 Mr Bromley は熱弁を振るい、信者も牧師の説教に大袈裟に応唱するといった、メソジストの礼拝が風刺される。ブランウェルと、シャーロットがそれぞれ描いた説教の中身を比較してみよう。

Start not my Bretheren start not. start not though I shall say that I hate you
all I Hate you as filthy and Abominable Sinners—as such I abhor you. but
there is a Hope of your Salvation and while that hope lasts I will strive to
make it a certainty...Through thy Holy Spirit give unto these wretched sinners

¹²⁹ Ben Caunt はボクシングの選手で、1845 年 9 月 9 日に行われたボクシングのイングランド大会に出場し、その時のスケッチをブランウェルはレイランドに宛てた手紙と一緒に送ったとされている (*Works* 3: 454, n. 62)。

¹³⁰ chapel は非国教会派の礼拝堂を指し、英国国教会の church (教会) と区別されている。また、非国教会派の牧師は preacher (説教師) と呼ばれた。

a knowledge of their state—a burning blasting and consuming vision of their sin—hunt them into the dust that they may cast ashes upon their heads and in howling and gnashing of teeth behold the frightful life they have dragged on...so heartily and truly repent of their transgression as to shout loud for VENGEANCE VENGEANCE against their blaspheming and accursed heads[.] (*Works* 2: 519-21)

“Filthy rags are we, potsherds were with the leper has scraped himself, bowls of the putrid blood of the sacrifices, sweepings of the court of thy temple, Straws of the dunghill, refuse of the kennel, Thieves, murderers, slanderers, false-swearers.” “Amen, Amen!” groaned every hearer from innermost soul. “Cheats, Usurers” added I, looking at my right-hand neighbours Tim & Surena. (*Five Novelettes* 52)

ブランウェルが描いたアッシュワスによる説教は、「疲れし者」に比べてかなり毒舌かつ攻撃的であり、罪人に対する敵意さえ露わにしている。また、シャーロットが描くブロムリーの説教も、信者に対して乱暴な表現を用いて恐怖心を煽っている。¹³¹ブロムリーはこの後、パーシーが扮する説教師 Mr Ashworth を登壇させる。シャーロットの描くアッシュワス偽説教師も、「救いではなく破壊のためにやって来た (“I came not to save but to destroy.”)」(*Five Novelettes* 53) と支離滅裂な話をした上に、自分の説教を愚弄する。¹³²姉弟が共に、好んでメソジストの説教風刺を描いていたことは大変興味深く、非国教会派の中でもとりわけメソジストに注目していたことを示していると言えよう。¹³³

¹³¹ Winniffrith は、シャーロットのメソジストの似非説教には、ブランウェルのようなメソジストに対する敵意は無いと述べる (*The Brontës and their Background* 49)。

¹³² シャーロットの最後の初期作品に数えられる「アッシュワス」においても、主人公アッシュワスは「無謀な放蕩を何週間か続けた結果、振戦譫妄の発作 (“delirium tremens”) に襲われた時、狂信的な熱狂をもって説教し祈ることを思いついた。彼の教義は、アルメニア教からカルヴァン教までさまざまだった」(Monahan 93-4)。また、長編作『シャーリー』において、非国教会派の批判や風刺を文学作品にまで完成させた。

¹³³ Gérin は、シャーロットがこの時期宗教に対して高い関心を示していたと指摘する。シャーロットはこの頃、カルヴィニズムの予定説について懸念を示しており、そのことについて作品やエレン・ナッシーへの書簡においても言及していた (*Five Novellettes* 34)。

The Brontës and the Religion (1999) を執筆した Thormählen は、英国国教会牧師を父に持ちながらも、ブロンテ家の子どもたちは「驚くべき精神的、霊的自由 (“the astounding mental and spiritual liberty”）」(16) を享受し、そのことが文学的才能や宗教観の発達に影響したと分析する。子どもたちの「霊的成長への非介入 (“non-interference with children’s spiritual progress”）」(16) をパトリックが実践していたとし、その結果、幼い頃から子どもたちはメソジストや福音主義派 (Baptist) を揶揄するようになった。¹³⁴その理由として Thormählen は、メソジストや福音主義派が単に野蛮で、煩く怒鳴り散らした (“vulgar, ranting, noisy people”) からであり、教義や信条に問題があったからではないとした (18)。一方非国教会派は当時ハワースの教区内でも数多く存在していたが、パトリックはメソジスト派に一番信頼を置いていたと Barker は述べる (251)。母であるマライアや伯母のエリザベスも国教会の会員ではあったが、ペンザンスではメソジストの家庭に育った。にもかかわらず、メソジストにブロンテ家の子どもたちが反感を抱いたのは、メソジストの偽善的なところに嫌悪感を抱いていたからだとして Barker は分析した。

英国国教会と非国教会諸派の一つであるメソジストとを比較して、「疲れし者」の語り手は次のように読者に語り掛ける。(教会建築に関する専門用語が多用され、内容が分かり辛い箇所であるため、拙訳を引用する。)

読者の中には、わが国の宗教が神への奉仕のために捧げてきた、高い屋根と気高い窓のある類の建築を除いては、公共の礼拝所についてほとんど知らない人もいるかもしれない。しかし、簡素でありながら風格のある典礼、パーセル、タリス、ギボンズ、ブル、ケント、グリーン¹³⁵の墓から私たちに語りかけてくる聖歌や頌歌は、半円アーチの窓が2段に貫かれ、派手に塗装された会衆席や回廊のように立派な内装のある、未加工のレンガや石からできた立方体、つまり「礼拝堂」と称される建物には匹敵しない。

¹³⁴ 非国教会派 (Dissenters) の風刺が描かれる作品の筆頭としてシャーロットの『シャーリー』が挙げられるが、出版された姉妹の全ての作品において、程度の差はあるものの描かれている。詳細については、Tom Winnifrith の *The Brontës and their Backgrounds* (1973)、Marianne Thormählen の *The Brontës Religion* (1999) を参照。

¹³⁵ 16, 17 世紀の教会音楽の作曲家

これらの古典的建築の宝石は、高価なオルガンを所有し、マホガニーのケースに安置されているかもしれないが、残念なことに、その音楽はまるで魂を天国に踊り入れるかのように、振戦譫妄のワルツを奏でる。説教壇は見事なビロードで飾られているが、その上に置かれた聖書は、「私は怒りのためではなく、悲しみのために語るのだ」という即興の戯言に合わせて、太鼓のようにドンドンと叩かれる。私は、かつて「秘密集会所」と呼ばれたものを十分に見てきたので、今描いたわずかなスケッチや、これから描こうとしているより完成度の高い絵が、人間が実際よりも聖なるものに見せようとするときに陥る愚かさを誇張したものではないことを認識している。(Works 3: 449)

ここでは、非常に回りくどい表現を用いて、メソジストの礼拝堂の建築的価値を称賛する一方で、その礼拝音楽や説教を揶揄している。ブランウェルはウェスレー派メソジストと、原始メソジストを微妙に使い分けているが、恐らく両方とも原始メソジストを指すものと考えられる。1812年に誕生した原始メソジストは、ステスが“**Primitive Methodists—commonly termed Ranters**”(Works 3: 439)と言い換えるように、大声で説教や賛美を行うことから、**ranters** (怒鳴りたてる人、大言壮語する人)と呼ばれていた。ここには、原始メソジストに対する風刺が込められているが、彼らに対して批判的な眼差しは向けられていない。英国国教会牧師の息子でありながらも、これだけ詳細に鋭い観察眼でメソジストの風刺が出来たということは、父パトリックの教区にも多くのメソジスト信者が存在し、国教会牧師として彼らとの関わりが多分にあったからであろう。ブランウェル自身がメソジスト信者や説教師との交わりがあり、また集会にも参加した可能性があったことを示しているのだ。

あまり知られていないことであるが、1830年当時、英国国教会派は非国教会派の総数に比べて少数派であった。その後、国教会の弱体化から起こった一連の教会改革やオックスフォード運動などの推進力により、新しい国教会の教会や学校が建設され、それに伴い資金も必要となった。パトリックも運動に貢献し、ハワース日曜学校と全日制学校の設立を支援した。また1834年と1835年、パトリックは好戦的なバプテスト派の信者と口論をしたとされている(OCB 423-4)。勢いを増すプロテスタントやカトリックの非国教会

諸派に危機感を覚えて英国国教会が改革に迫られた 19 世紀初頭において、宗教対立というテーマはブロンテ姉弟妹にとって、非常に身近な題材であったのである。

語り手が “farcical were it not blasphemous” (439) と呼ぶこの茶番劇もまた、語りの脱線であることから、このメソジストの偽牧師の説教パロディにも、ブランウェルの文学的要素を見出すことが出来よう。大言壮語するメソジスト牧師は、ブランウェルの文体とも重ね合わされる。「気紛れで難解 (“wayward and intractable”）」(450) とモンモレンシーから評されるパーシーの性格は、そのままブランウェルの文体にもあてはまるのである。彼方此方へと話が飛び、洗練されておらず難解な文章は、ブランウェルの文体の特徴である。彼自身が、語り手を通して物語世界において ranting している様である。しかし、この大言壮語の中に、後に姉妹らによって文学作品にまで高められる様々な原石が散りばめられているのだ。

4. 『嵐が丘』におけるメソジスト風刺

『嵐が丘』第3章でロックウッドの夢に登場する「七の七十倍の赦しと七十一番目の罪」と題した説教を行った Rev. Jabes Branderham は、メソジストの牧師である。ここでも、メソジストの風刺がロックウッドの回想を通して語られる。夢の中でジョゼフと共に、ジェイベス・ブランダラム牧師の説教を聞きに行くために向かった礼拝堂について、ロックウッドは次のように説明する。

The roof has been kept whole hitherto, but as the clergyman's stipend is only twenty pounds per annum, and a house with two rooms, threatening speedily to determine into one, no clergyman will undertake the duties of pastor, especially as it is currently reported that his flock would rather let him starve than increase the living by one penny from their own pockets. However, in my dream, Jabes had a full and attentive congregation: and he preached — good God! what a sermon! — divided into *four hundred and ninety parts* — each fully equal to an ordinary address from the pulpit — and each discussing a separate sin! (*Wuthering Heights* 23)

ロックウッドが見た実際の礼拝堂は、屋根は残ってはいるものの部屋は一つしかなく、信者は年収 20 ポンドの貧しい牧師の生活を支えるために 1 ペニーさえ渡さないという噂があるほどだ。しかし夢で見た礼拝堂は、ブランダラム牧師の説教を聞くために集まった熱心な信者で溢れかえっていた。この後、490 種類の罪について 490 のパートからなる説教を延々と聞かされ、堪えられなくなったロックウッドが牧師を大声で糾弾し、牧師と信者を相手に乱闘が繰り広げられる。

『オックスフォード・ブロンテ辞典』によれば、ブランダラム牧師のモデルは、実在した Jabez Bunting (1779-1858) と考えられている。¹³⁶彼は、メソジストの第二の創始者と呼ばれることもあり、1799 年にウェスレアン・メソジストの牧師として認められ、巡回牧師としてリーズやハリファックスを含む、多くの地域で説教を行った。また、メソジスト派を英国国教会から分離させ、ウェスレアン・メソジスト教会の立役者と言われる一方、一説では熱狂的かつ独裁的であったことから、内部分裂を引き起こし、多くの人々が教会を去ることになったとも批判されている。姓と名の頭文字が同じであることや、彼が礼拝中に起こった騒動を鎮めたというエピソードなどから有力視されていたが、Thormählen は、Jabez Burns 説を浮上させた。福音主義派のバーンズは、19 世初頭に聖職に関する書物で人気のあったジャンルである ‘Sketches and Skeletons of Sermons’ (「スケッチや説教の骨子」) の編纂者であり、彼が書いた *The Pulpit Cyclopaedia; and Christian Minister’s Companion* や *Four Hundred Sketches and Skeletons of Sermons* が『嵐が丘』より先に出版されていることから、バーンズに軍配を上げた (18)。

ブランダラム牧師のモデルについての憶測は後を絶たないが、ロックウッドの日記の出だしが 1801 年であることから、財政難に窮していた地方のメソジスト教会が浮き彫りにされている。ここには、教区に住む信者たちが、説教師の給金を一銭たりとも払おうとしない、危機的状況が描かれている。¹³⁷ウェスレーの死後半世紀にわたり、メソジスト運動は一連の分裂や原始メソジストなどの分派を経ながら急成長を遂げた。1801 年はその過渡期であったと言えよう。ブランウェルの「疲れし者」では時代設定は特定されていないが、執筆年が 1845 年であることから、メソジストの人口が急成長し *dissenter* と呼ば

¹³⁶ Flintoff は、スコットの *Old Mortality* (1816) に登場する Kettledrummy 牧師の説教がモデルであると唱える (324)。

¹³⁷ Thormählen は、ロックウッドの夢の中に描かれるこの僅かなメソジスト風刺の中に、国教会が危機的な財政難にあり、国教会内での改革に揺れ動く教会事情が反映されていると分析した (175-76)。

れる非国教徒の中核をなしていた時期であり、ブロンテ家の周りにも多くのメソジスト信者がいたことを示している。母マライアまた叔母のエリザベス・ブランウェルが共に愛読者であったことから、牧師館には *Methodist Magazine* の全巻があった。ブロンテ家の子どもたちは、幼い頃からそれらの雑誌を通して、メソジストの超自然的な奇跡や予言などに触れていた。また Nyborg によれば、当時『ブラックウッズ・マガジン』にはメソジストの説教を揶揄する記事が掲載されたほか、牧師館には露骨にカトリックやメソジストを批判する書物 *An Earnest Address to the Working Classes of Old England ... by a Poor Man* (1836) があり、パトリック自身がその書物を絶賛していた (Nyborg 56)。Nyborg は、シャーロットが「現在の出来事」で描いたメソジスト牧師の風刺と違い、ブランウェルが描いた 5 人の偽説教師による説教イベントは、メソジストの牧師が語る説教の揶揄のみならず、雑誌や書物といった当時のメディアが行った辛辣なメソジスト批判までをも風刺している点で、二重の風刺が込められていると分析した。¹³⁸ Thormählen が指摘するように、ブロンテ家の子どもたちが、牧師を父に持ちながらも霊的自由を享受していたことから、メソジストを初めとした非国教会派の風刺を作品に数多く書き残したことは、非常に興味深く、また類稀なことであったと言えよう。

* * * * *

本章では、ブランウェルが、アングリアの世界に別れを告げるべく書いた「サーストン」と「疲れし者」を比較考察し、特に前者においては、『嵐が丘』の原風景となるものが数多く存在し、スコットの『宿屋主の物語』からの影響が認められることを明らかにした。

「疲れし者」のスデスと、『嵐が丘』のジョゼフが語るヨークシャーの方言には明白な類似性が見られていることも、ブランウェルのエミリへの影響の一つ証拠として、捉えられるだろう。また家畜商については、アングリアの世界からヨークシャーの現実世界にまで及ぶブランウェルの作品における重要なモチーフであり、19 世紀初頭の社会的・歴史的背景と深く結びついている。特に産業革命や農業革命による職業の変化について、ブラン

¹³⁸ Nyborg によれば、*An Earnest Address to the Working Classes of Old England ... by a Poor Man* は、「メソジストは偽りの宗教であり、牧師は大いなる詐欺師であり、その奉仕は単なる茶番劇である」と酷評した (*Brontës and Masculinity* 57)。

ウェルが具に観察し、とりわけ家畜業に携わる様々な職種について多大な関心を持っていたことが明らかになった。

さらに、「疲れし者」では、偽牧師によるメソジスト説教の語りの脱線が物語の重要部分を占め、メソジスト宗教運動が社会に与えた影響と、ブラウエルがそれをどのように風刺の対象として扱っていたかについても明らかにした。シャーロットのみならずエミリ、またアンについても、程度の差こそあれ、メソジストの風刺を物語に取り入れていたことは、ブロンテ家がメソジストをどのように見ていたかを示す一例であろう。¹³⁹この風刺は、非国教会派の台頭により、ブロンテ家が属していた英国国教会を取り巻く環境が変化を余儀なくされたことを背景に、新興の宗教運動の一つとして広がったメソジストの独特な説教や礼拝形式が社会現象として浸透し、人々の生活に深く印象を残していたことを示すものである。ブランウェルの作品が 19 世紀初頭の激動する社会や宗教の変化、また他の文学作品から如何に影響を受けたかが、「サーストン」と「疲れし者」に示されているのだ。とりわけ、「サーストン」の冒頭において『宿屋主の物語』を称賛する際に、「自然の崇高さや美しさといった、作家の力強さや主題の情緒とは無関係に心をとらえるようなものが、この物語にはないからだ」と述懐する部分は、ブランウェルの真骨頂と言えるだろう。なぜなら、この言葉は、『嵐が丘』がもつ作品世界にも当てはまるからである。エミリの作品にブランウェルの文学的遺産が確かに引き継がれていることにもまた、彼の文学的意義を見出すことができるだろう。

¹³⁹ アンの『ワイルドフェル・ホールの住人』に登場するヒロインの叔母 Aunt Maxwell の言葉にも、メソジストの説教風刺が認められる。

結論

Alexander は、ブランウェルが初期作品物語の創作過程において如何に姉をリードし、牽引してきたかについて評価しながらも、ブランウェルの生誕 200 年を記念して書かれた論考で、次のように評した。「彼の熱狂的な文学作品は、初期の芸術的才能の顕著な証であり、作家としての自己表現をエネルギーに実験していたことを示唆する。しかし、彼のパラコスミックな世界は、過剰な想像力と誤った創造性が、将来有望な若い作家にハンディキャップを負わせる可能性をも記録している。」¹⁴⁰Alexander は、ブランウェルがシャーロットと共に紡いだ小宇宙的世界（microcosmic world）を、子どもであった彼らが排除されていた、より大きな大人の世界を表象するものとして読み解くために、最近作られた造語である「パラコズム（paracosm）」という概念（「子供たちが作り出す長期的で本格的な空想の世界」）を用いた。この長期的かつ本格的な空想の世界に SF 小説の萌芽を見ることが出来よう。2011 年に大英図書館で SF 小説の系譜について大規模な企画展示が行われた際、ブロンテ姉弟が作り出したグラスタウン・アングリア世界も SF 小説の一つであると紹介され、特にブランウェルが作り出した空想世界の地理を表した地図は、19 世紀初頭にすでにヴァーチャルな空間を二次元の世界で表現したということで注目を浴びた。¹⁴¹

Alexander が評したブランウェルのハンディキャップについて別の観点から考察した研究もある。年代別にブランウェルの作品の筆跡鑑定を行った筆跡学者 Diane Simpson は、ブランウェルの集中力の欠如、薬物依存、強迫観念的な行動や躁鬱は、ブランウェルがアスペルガー症候群に罹患していた可能性を示していると結論付けた。その一方で彼は創造性の塊（“*massively creative*”）であったとし、20 代のブランウェルの創造性は多面的かつ多次元的だったと分析した。¹⁴²ブランウェルが音楽、絵画、文学の多領域において才能に恵まれていた一方で、その「過剰な想像力と誤った創造性」を制御することが出来ないというハンディを負っていたことは、彼の人物像を語る上でコインの表裏をなしていたと考えられる。

¹⁴⁰ “In Search of the Authorial Self: Branwell Brontë’s Microcosmic World” 5

¹⁴¹ 本論文 40 頁、注釈 39 参照。

¹⁴² 40 Branwell, *The History of Young Men*, Appendix B, 62-63

一方 Neufeldt も、ブランウェルの生誕 200 年の節目の年に、作品に描き継がれた主人公アレグザンダー・パーシーの変遷を時系列に辿った論文を、2 回に分けて発表した。この中で Neufeldt は、シャーロットの初期作品と照らし合わせ共作の軌跡を辿りながら、ブランウェル自身が無神論者であったことを証明するべく、パーシーの無神論を裏付けるテキスト分析を徹底的に行った。パーシーおよびブランウェルの悪魔的な側面を無神論に帰すことによって、ブランウェルの作品と彼自身を擁護していると読み取ることができる。しかし一方で Neufeldt は、ノーザンガーランド伯爵になる前のロウグ／エルリントン卿時代の初期の物語においては、多くの点で少年時代に特有の冒険物語に対する憧れ（“a boy’s ‘adventure yearn’”）の特徴を有していたと述べる。日本では、戦争要員として教育された子どもに対して軍国少年／少女という言葉がある。ブランウェルは決して戦争要員として教育されたわけではないが、彼の物語には英国の植民地主義やナショナリズムに対する鼓舞が描かれていることから、広義の意味での軍国少年と捉えられるのではないだろうか。当時のメディア、雑誌や新聞が産んだ時代の産物、寵児であったブランウェルは、ハワースからイギリス社会、また植民地社会を観察し続けたのである。

本論文で扱った散文は、ブランウェルが書き残した散文作品（劇と詩を除く）全体の約 3 分の 2 であり、限られてはいるが先行研究があるものに厳選した。しかし本論文が示すように、結果としてそれらの作品に共通していたものは、作品が当時の社会を映し出す鏡として捉えられる点にあった。今回扱わなかった他の散文作品についても、同様の結論、あるいは新たな解釈が導かれるかどうか、更なる研究が待たれるところである。また英国『ブロンテ・スタディーズ』では 2000 年以降、詩に関する論文が 3 本、芸術や音楽に関する論文が 7 本掲載された。ブランウェルは詩人や画家を目指していたことから、彼が残した数多くの詩や絵画について、より多角的かつ学術的な研究が期待される。また、研究者の間ではその評価が分かれているところではあるが、ブランウェルに関するバイオ・フィクション、バイオ・ピクチャーについても触れておきたい。2000 年以降、ブロンテに関連した伝記、また伝記小説の出版は後を絶たないが、ブランウェルに関しては、Wendy Louise Bardsley の *Branwell Brontë’s Creation: A Novel* (2007. 2017.)、Robert Edric の *Sanctuary* (2014)、Finola Austin の *Brontë’s Mistress* (2020)、Dean de la Motte の *Oblivion: the lost diaries of Branwell Brontë* (2023) の 4 冊が出版された。またバイオピクチャーでは、ブランウェルが主役ではないが *To Walk Invisible* (2016)、

Emily (2022) が公開された。特に *Emily* は、エミリとブランウェルの兄妹間の友愛また近親愛を描く他、ブランウェルとエミリが『嵐が丘』を書いたことが示唆されており、*To Walk Inbisible* とは対照的な新しいブランウェル像を浮かび上がらせた。今後、より様々な視点からブランウェルの作品や人物像が論じられ、また様々な芸術媒体やジャンルにおいて彼の才能が発掘されることを期待したい。

ブロンテ姉弟妹は、牧師館の図書室あるいはヘアトン家にある Ponden Hall にあるコレクションや巡回図書館その他から膨大な量の書物や雑誌、新聞などを借りて読み、知識を蓄え、それらを基に創造力の賜物で作品を書き綴った。¹⁴³なかでもブランウェルは、父からラテン語やギリシア語を教わり、古典主義のホラティウスやヴェルギリウスに幼い頃から興味を抱いた。知識を書物から得るという啓蒙主義と、ケンブリッジで学んだ父から受けた古典主義、そして現実世界で繰り広げられている戦争、世界のあちこちに拡大するイギリス植民地主義、アメリカ独立戦争、奴隷制度。これらの激動する 19 世紀初頭の世界及び社会において、子どもながらに必死で世界の情勢に目を向け、耳を澄まし、それらを物語の創作において消化していたのである。Alexander の言葉を借りるならば、遠い世界で繰り広げられている戦争や出来事といった現実の大人世界を、姉と一緒に築いた想像の世界に取り込み (transport)、場所を移し替え (relocate)、書き換えた (rewrite) のである (“Research in Juvenilia” 15)。ブランウェルは詳細な地理的情報を基に地図を描き、グラスタウンやアングリア国の自然や風土、社会といった仮想空間をリアルにするための肉付けを行い、自身が想像世界における脚本家、批評家、雑誌編集者、地理学者、歴史家として、物語や詩を書き続けた。ハワースの荒涼とした自然界に身を守られ、遠くから具に観察し、自分たちの外側にある大人社会を反映したもう一つのパラレルワールドを頭の中で構築し、それを糧に生きていた。それは、母を早くに無くし、ハワースの過酷な自然環境と牧師館という特異な空間で父、叔母、3 人の姉妹と暮っていたブランウェルが取った、生き残る術であったともいえる。

また彼は、自分の作品について第三者がどのように評価するかを常に意識し、作家として身を立てるために指導を仰ぎたいと切に願っていた。そのことは、後に彼がブラックウッズ社や偉大な詩人らに何度も手紙を書いていたことにも裏付けられる。ブランウェルは架空の雑誌世界から飛び出し、現実世界の雑誌に自分を売り込み、また自分の作品に対

¹⁴³ Bob Ducktt, “Where did the Brontës get their Books?” 193-206

する批評を求めるべく、詩人に原稿を送った。しかし、彼が自分を売り込みまた指導を乞うために送った手紙や詩は、独りよがりな若気の至りととれる文体や内容であり、実を結ばなかった。唯一面会を果たせたハートレイ・コールリッジが認めた手紙も、返信されずに書類の山に埋もれた。現実世界において彼の作品を評価したのは出版社でも偉大な詩人たちでもなく、彫刻家 Joseph Bentley Leyland を始めとする地元ヨークシャーで活躍する芸術家仲間であった。つまりブランウェルは、シャーロットにとっての Constantin Heger のように、彼女に創造力を制御する方法を教えた指導者、また William Smith Williams のように出版に対して助言する出版者にも出会えなかった。ブランウェルは初期作品において膨大な量の作品を生み、3 姉妹に先駆けて新聞紙面に詩を発表し、姉妹らに勝るとも劣らず、作家として身を立てたいと切望していた。しかしながら姉妹らの出版計画からは疎外され、彼が書いた作品の価値について「審議されず、指導されない (unchecked, unguided)」(Neufeldt, “Writings of PBB” 153) まま書き続けるしかなかったのである。

彼の初期作品は、新聞や雑誌に掲載された一部の詩を除き全て未発表作品の生の原稿であるため、スペルなどの体裁や文法上の齟齬はおろか、文体も粗野であるが、そのことを以って彼の作品を過小評価するべきではない。それらの難を受け入れた上でテキストを丁寧に解きほぐすと、彼の作品の中に、当時の社会情勢や変化する人々の生活について描きこまれていることが明らかになり、彼の豊かな才能がそこに見ることが出来るのである。即ち、ニジェール川の流路解明が英国植民地主義にもたらす意義や、海賊表象の過渡期にあった海上情勢、ヨークシャーの羊毛産業がもたらした労働環境と羊毛への投機熱。戦争小説の変革期における戦争小説の娯楽化。農業革命がもたらした新しい家畜取引と家畜商の役割と、新興のプロテスタント運動の隆盛期におけるメソジスト派の風刺。換言すると、19 世紀初頭、イギリス領土の拡大と共に高まった異国への関心、また多様化する経済活動とその波及効果、また産業革命や農業革命の広がりと共に失われつつあった職種や業種、反対に新たに誕生した宗教運動といった主題が、作品の副筋において豊かに描かれているのである。

「アフリカの大小さまざまな川が一つになり、最終的に大西洋へと流れ出るニジェール川 (“the NIGER, rolling to the Glass Town the collected waters of Africa”)(*Works* 1: 276) の流路のように、ブランウェルの想像力が入り組んでおり、一筋縄ではいかないも

のがある。しかし、その水源は決して枯渇することなく、文学的想像力は流々と大海に注がれた。まるで「豪雨（“the torrents of rain”）」（*Works* 1: 157, 212; 2: 317）のような速さと勢いで綴られたかのような彼の筆致は、彼の頭から猛烈な勢いで沸き起こるために、それを言語化する作業が追い付かなかったことを如実に表している。ブランウェルの初期作品を研究することは、言語化されたものを通して彼の頭の中を覗き込み、解きほぐし、彼に代わって、それらの表象や価値について整理することである。本研究は、その果てしない作業の一端を担ったと言えるだろう。

初出一覧

本論文では以下のように、第 1 章については口頭発表、第 2 章から第 4 章については論文を加筆・修正している。第 5, 6 章は新たに書き下ろしたものである。

第 1 章

「ブランウェル・ブロンテと地図の翻案——ブラックウッズ・エディンバラ・マガジンへの信用」日本英文学会関西支部第 16 回大会，2021 年 12 月 18 日。

“My love of geographical and topographical knowledge continues so strong”: what Branwell Brontë’s map and saga tell us of his distrust and trust in James MacQueen’s map and his article,” Seventh International Literary Juvenilia Conference（第 7 回国際初期作品学会），2022 年 7 月 22 日，ニューサウスウェールズ大学。

第 2 章

「母マリアとペンザンスの残影——ブランウェル・ブロンテの「海賊」『言葉を紡ぐ——英文学の 10 の扉』渡千鶴子，橋本史帆編，音羽書房鶴見書店，2023，pp. 68-89.

第 3 章

「シャーロット・ブロンテの小説における兄弟間の確執のモチーフ——育児放棄された子どもへの強い関心」、『神戸英米論叢』第 36 号，pp. 15-28.

第 4 章

「ブランウェル・ブロンテの先見の明——『羊毛は高騰する』における羊毛投機の表象」『英文学研究支部統合号』，第 13 号，2021，pp. 109-117

引用文献・参考文献

一次資料

- Brontë, Charlotte. *An Edition of the Early Writings of Charlotte Brontë*. 3 vols. Edited by Christine Alexander, Basil Blackwell, 1987-1991.
- . “*Ashworth: An Unfinished Novel by Charlotte Brontë*.” Edited by Melodie Monahan, *Studies in Philology*, vol. 80, no.4, 1983, pp. 1-133.
- . *Charlotte Brontë: Unfinished Novels*. Alan Sutton, 1993.
- . *Jane Eyre*. 1847. Edited by Margaret Smith, Oxford UP, 2008.
- . *Five Novelettes*. Edited by Winifred Gérin, The Folio Press, 1971.
- . *The Letters of Charlott Brontë: With a Selection of Letters by Family and Friends*. Edited by Margaret Smith, 3 vols, Clarendon, 1995.
- . *The Professor*, 1857. Edited by Margaret Smith and Herbert Rosengarten, Oxford UP, 2008.
- . *Shirley*. 1849. Edited by Margaret Smith and Herbert Rosengarten, Oxford UP, 2008.
- . *Tales of Angria*. Edited by Heather Glen, Penguin, 2006.
- , Branwell Brontë, Emily Brontë and Anne Brontë. *Tales of Glass Town, Angria, and Gondal: Selected Writings*. Edited by Christine Alexander, Oxford UP, 2000.
- Brontë, Patrick Branwell. *Branwell's Blackwood's Magazine*. Edited by Christine Alexander and Vanessa Benson, Juvenilia Press, 2010.
- . *Brother in the Shadow: Stories & Sketches by Branwell Brontë*. Transcribed by Mary Butterfield, Edited by Duckett, R. J., Bradford Libraries and Information Service, 1988.
- . Map of “Glass Town Federation,” in Branwell Brontë’s ‘The History Of The Young Men From Their First Settlement To The Present Time,’ 1830-31, British Library, Ashley MS 2468.
- . *The History of the Yong Men*. Edited by Christine Alexander with Joetta Harty, Juvenilia, 2010.

- . *The Hand of the Arch-Sinner: Two Angrian Chronicles of Branwell Brontë*. Edited by Collins, Robert. G., Oxford UP, 1993.
- . *The Pirate*. Edited by Christine Alexander, Joetta Harty and Benjamin Drexler, Juvenilia, 2018.
- . *The Poems of Patrick Branwell Brontë*. Edited by Victor A. Neufeldt, 1990. Routledge, 2015.
- . *The Works of Patrick Branwell Brontë*. 3 vols. Edited by Victor A. Neufeldt, 1997-1999. Routledge, 2015.

二次資料

- Ashley, Mike. *Out of This World: Science Fiction But Not as You Know It*. The British Library, 2011.
- Alexander, Christine. "Experimentation and the Early Writings." *A Companion to the Brontës*. Edited by Diane Long Hoeveler and Deborah Denenholz Morse, Wiley Blackwell, 2016, pp. 11-29.
- . "Imagining Africa: The Brontës' Creations of Glass Town and Angria." *Africa Today: A Multi-Disciplinary Snapshot of the Continent in 1995*. Edited by Peter Alexander, Ruth Hutchison and Deryck Schreuder, Humanities Research Center, 1996, pp. 201-19.
 - . "In Search of the Auhorial Self: Branwell Brontë's Microcosmic World." *Journal of Juvenilia Studies*, vol.1, 2018, pp. 3-19.
 - . "Introduction." Charlotte Brontë, Branwell Brontë, Emily Brontë and Anne Brontë, *Tales of Glass Town, Angria, and Gondal: Selected Writings*. Edited by Christine Alexander, Oxford UP, 2000, pp. xiii- xliii.
 - . "Introduction." Branwell Brontë, *Branwell's Blackwood's Magazine*. Edited by Christine Alexander, Juvenilia, 2006, pp. vii-xiii.
 - . "Readers and Writers: *Blackwood's* and the Brontës." *The Gaskell Society Journal*, vo. 8, 1994, pp. 54-69.
 - . *The Early Writings of Charlotte Brontë*. Basil Blackwell, 1983.

- . "Research in Juvenilia Studies: Speech of Acknowledgement and Thanks." *Journal of Juvenilia Studies*. vol. 6, no. 1, 2023, pp. 11-18.
- , and Jane Sellars, editors. *The Art of the Brontës*. Cambridge UP, 1995.
- , and Joetta Harty. "Introduction." Patrick Branwell Brontë, *The Pirate*. Edited by Christine Alexander with Joetta Harty and Benjamin Drexler. Juvenilia, 2018, pp. xi-xxxvi.
- , and Juliet McMaster. editors. *The Child Writer from Austen to Woolf*. Cambridge UP, 2005.
- , and Juliet McMaster. "Introduction." *The Child Writer from Austen to Woolf*. Edited by Christine Alexander and Juliet Macmaster, Cambridge UP, 2005, pp. 1-7.
- , and Margaret Smith. *The Oxford Companion to the Brontës*. Oxford UP, 2003.
- Arms, Drew Lamonica. "The Brontës' Sibling Bonds." *The Brontës in Context*. Edited by Marianne Thormählen, Cambridge UP, 2012, 91-97.
- Azim, Firdous. *The Colonial Rise of the Novel*. Routledge, 1993.
- Barker, Juliet. *The Brontës*. St. Martin's Press, 1994.
- Barnard, Robert, and Louise Barnard. *A Brontë Encyclopedia*. Wiley-Blackwell, 2013.
- Blackman, Janet. "The Cattle Trade and Agrarian Change on the Eve of the Railway Age." *The Agricultural History Review*, vol. 23, no. 1, 1975, pp. 48-62.
- Bock, Carol A. ---. "Authorship, the Brontës, and *Fraser's Magazine*: "Coming Forward" as an Author in Early Victorian England." *Victorian Literature and Culture*, vol. 29, no. 2, 2001, pp. 241-66.
- . *Charlotte Brontë and the Storyteller's Audience*. U of Iowa P, 1992.
- . "Our Plays': The Brontë Juvenilia." *The Cambridge Companion to the Brontës*. Edited by Heather Glen, Cambridge UP, 2002, 34-52.
- Bonser, Kenneth J. *The Drovers: Who They Were and How They Went: an Epic of the English Countryside*. 1970, Macmillan.
- Brontë, Patrick Branwell. *The Poems of Patrick Branwell Brontë*. Edited by Tom Winnifrith, New York UP, 1983.

- Brontë, Anne. 1848. *The Tenant of Wildfell Hall*. Edited by Stevie Davies, Penguin, 1998.
- Brontë, Charlotte, and Emily Brontë. *The Belgian Essays: A Critical Edition*. Edited and translated by Sue Lonoff, Yale P, 1996.
- Brontë, Emily. 1847. *Wuthering Heights*. Edited by Pauline Nestor, Penguin, 2003.
- Brown, Jim. "Branwell Brontë's Latin and his Translation of Horace." *Brontë Studies*, vol. 42, no. 3, 2017, pp. 174-89.
- Butcher, Emma. "Napoleonic Periodicals and the Childhood Imagination: The Influence of War Commentary on Charlotte and Branwell Brontë's Glass Town and Angira." *Victorian Periodicals Review*, vol. 48, no. 4, Winter 2015, pp. 469-86.
- . *The Brontës and War: Fantasy and Conflict in Charlotte and Branwell Brontë's Youthful Writings*, Palgrave Macmillan, 2019.
- . "War Trauma and Alcoholism in the Early Writings of Charlotte Brontë and Branwell Brontë." *Journal of Victorian Culture*, vol. 22, no. 4, 2017, pp. 465-81.
- Byron, Lord. *The Corsair: A Tale*, 1814. *Selected Poems*. Edited by Susan J. Wolfson and Peter J. Manning, Penguin, 2005, pp. 248-307.
- Collins, Robert G. Introduction. *The Hand of the Arch-Sinner: Two Angrian Chronicles of Branwell Brontë*. Oxford UP, 1993, pp. ix-xliii.
- . "Bringing Branwell in from the Cold: Retrieving the Prose Chronicles." *Brontë Study Transactions*, vol. 21, no. 6, 1996, pp. 253-59.
- Conover, Robin St John. "Creating Angria: Charlotte and Branwell Brontë's Collaboration." *Brontë Society Transactions*, vol. 24, no. 1, 1999, pp. 16-32.
- Cooper, T. S. "Drovers and their flocks in the north of England," from Cooper's Thirty-four Subjects of Cattle, 1837, in Kenneth J. Bonser's *The Drovers: Who They Were and How They Went: an Epic of the English Countryside*, 1970, Macmillan, opposite p. 192.
- Denenholz Morse, Deborah. "Queer Charlotte: Homoerotics from *Mina Laury* to *The Professor*." *Charlotte Brontë from the Beginnings*. Edited by Judith E. Pike and Lucy Morrison, Routledge, 2017, pp. 111-25.

- Dinsdale, Ann, Barbara Heritage, and Emma Butcher. *Charlotte Bronte: The Lost Manuscripts*. Brontë Society, 2018.
- Donovan, Julie. "The Poetry and the Verse Drama of Branwell Brontë." *A Companion to the Brontës*. Edited by Diane Long Hoeveler and Deborah Denenholz Morse, Wiley Blackwell, 2016, pp. 213-27.
- Downing, Clement. *A History of the Indian Wars*. Edited by William Foster, C.I.E. Humphrey Milford Oxford UP, 1924.
- Duckett, Bob. "The Wool Is Rising by Branwell Brontë." *The Bradford Antiquary: The Journal of the Bradford Historical and Antiquarian Society*, vol. 82, 2021, pp. 60-72.
- . "The Library at Ponden Hall." *Brontë Studies*, vol. 40, no. 2, 2015, pp. 104-49.
- . "Where did the Brontës get their Books?" *Brontë Studies*, vol. 32, no. 3, 2007, pp. 193-206.
- . "Branwell Brontë, *BST* and Brontë Studies: an Annotated Bibliography." *Brontë Studies*, vol. 42, no. 3, 2017, pp. 261-72.
- du Maurier, Daphne. "Second Thoughts on Branwell." *Brontë Society Transactions*. vol. 23, no. 2, 1998, pp. 155-58.
- . *The Infernal World of Branwell Brontë*. 1960. Virago, 2006.
- Fanning, Sarah E., and Clare O'Callaghan. "Bad or mad? Branwell Brontë, mental health, and alcoholism in Sally Wainwright's *To Walk Invisible*." *Diagnosing History*. Edited by Katherine Byrne, Julie Anne Taddeo and James Leggott, Manchester UP, 2022, pp. 225-42.
- Flintoff, Everard. "Branwell at the Heights: an Investigation into the Possible Influence of Branwell Brontë upon *Wuthering Heights*." *Brontë Studies*, vol. 36, no. 4, 2011, pp. 322-35. (This is a reprint of the article first published in the *Durham University Journal*, July, 1994, pp. 241-51.)
- Frohock, Richard. "Satire and Civil Governance in *A Genrerel History of the Pyrates* (1724, 1726)." *The Eighteenth Century*, vol. 56, no.4, 2015, pp. 467-483.

- Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. 1857. Edited by Angus Easson, Oxford UP, 2009.
- . "The Reverend Patrick Brontë and Mrs. E. C. Gaskell." *Brontë Society Transactions*, vol. 8, no. 3, 1934, pp. 125-38.
- Gérin, Winifred. *Branwell Brontë*. T. Nelson, 1961.
- Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. Yale UP, 1979.
- Gill, Stephen. "A Manuscript of Branwell Brontë with Letters of Mrs. Gaskell." *Brontë Society Transactions*, vol. 15, no. 5, 1970, pp. 408-11.
- Gleig, George. *The Subaltern*. chap. I-IV. *Blackwood's Edinburgh Magazine*. March 1825, pp. 279-99.
- Glen, Heather. "Introduction." Charlotte, Brontë, *Tales of Angria*. Edited by Heather Glen, Penguin, 2006, pp. vii-xlvii.
- . editor. *The Cambridge Companion to the Brontës*. Cambridge UP, 2002.
- Goldsmith, Reverend J. *A grammar of general geography for the use of schools and young persons with maps & engravings*. Longman, Rees, Orme, Brown and Green, 1827.
- Gregory, Derek. *Regional Transformation and Industrial Revolution: A Geography of the Yorkshire Woolen Industry*, Macmillan, 1982.
- Griffiths, Sarah Elizabeth. "Branwell Brontë, Agnes and Mary Riley." *Brontë Studies*, vol. 36, no. 4, 2011, pp. 358-362.
- Grundy, Francis H. *Pictures of the Past: Memories of Men I have Met and Places I have Seen*. Griffith and Farran, 1879.
- Hardie, Melissa. *Brontë Territories: Cornwall and the Unexplored Maternal Legacy, 1760-1860*. EER, 2019.
- Harty, Joetta. "Playing Pirate: Real and Imaginary Angrias in Branwell Brontës Writing." *Pirates and Mutineers of the Nineteenth Century: Swashbucklers and Swindlers*. Edited by Grace Moore, Routledge, 2016, pp. 41-58.
- "History of the Angria, the pyrate." *Gentlemen's Magazine*, vol. 26, 1756, pp. 619-22.

- Hoare Nell, and Kathryn Sutherland, and Joan Winterkorn. editors. *The Blavatnik Honresfield Library: saved for the nation*. Friends of the National Libraries, 2023.
- Ingham, Patricia. *The Brontës*. Oxford UP, 2006.
- Johnson, Charles. *A General History of the Robberies and Murders of the Most Notorious Pirates: from their first rise and settlement in the Island of Providence to the present year*. Edited by Arthur L. Hayward, Routledge, 2002.
- Keay, John. *The Honourable Company: A History of the English East India Company*. Macmillan, 1991.
- Lambert, David. *Mastering the Niger: James MacQueen's African Geography and the Struggle over Atlantic Slavery*. 2013, U of Chicago P.
- Lamonica, Drew. *"We Are Three Sisters": Self and Family in the Writings of the Brontës*. U of Missouri P, 2003.
- Lewis, Linda. "Branwell Brontë: A Parallel in *Wuthering Heights*." *Brontë Society Transactions*, vol. 19, no. 5, 1988, pp. 221-22.
- Leyland, Francis A. *The Brontë Family with Special Reference to Patrick Branwell Brontë*. 2 vols, 1886. Routledge/Thoemmes, 1997.
- Lodge, Sarah. "Masculinity, Power and Play in the Work of the Brontës." *The Victorian Novel and Masculinity*. Edited by Phillip Mallett, Palgrave, 2015, pp. 1-30.
- MacEwan, Helen. *Biographer of the Brontës*. Sussex Academic Press, 2016.
- MacQueen, James. "Geography of Central Africa: Denham and Clapperton's Journal." *Blackwood's Edinburgh Magazine*. June 1826, pp. 687-709.
- . Map of "Africa North of the Equator Showing the Course & Direction of the Principal Rivers and Mountains Particularly of the Niger and its Tributary Streams From the Best Authorities," in "Geography of Central Africa," *Blackwood's Edinburgh Magazine*. Jun 1826, opposite p. 687.
- . "The River Niger: Termination in the Sea." *Blackwood's Edinburgh Magazine*. June 1826, pp. 687-709.
- Maloni, Ruby. "The Angres and the English: Contenders for Power on the West Coast of India." *Proceeding of the Indian History Congress*, vol. 66, 2006, pp. 546-51.

- Map of "The Glass Town Federation and the Kingdom of Angria (based on Branwell Brontë's frontpiece to 'The History of the Young Men' (1831), with Angria added)," in *The Oxford Companion to the Brontës*, Oxford UP, 2006, p. li.
- Map of "The World; Drawn and Engraved by Sidy. Hall, Bury Strt. Bloomsbury," in Reverend J. Goldsmith's *A grammar of general geography for the use of schools and young persons with maps & engravings*, Longman, Rees, Orme, Brown and Green, 1827, opposite p.6.
- Maynard, John. "The Brontës and religion." *The Cambridge Companion to The Brontës*. Edited by Heather Glen, Cambridge UP, 2002, pp. 192-213.
- McKay, Anna. "British and French Prisoners of War, 1793-1815." Royal Museums of Greenwich, 2017. <https://www.rmg.co.uk/explore/blog/british-and-french-prisoners-war-1793-1815>.
- McLoughlin, Kate. editor. *The Cambridge Companion to the War Writing*. Cambridge UP, 2009.
- Monahan, Melodie. "Ashworth: An Unfinished Novel by Charlotte Brontë." *Studies in Philology*, vol. 80, no. 4, Autumn 1983, pp. 1-133.
- Moore, Grace. editor. *Pirates and Mutineers of the Nineteenth Century: Swashbucklers and Swindlers*. Routledge, 2016.
- . "Introduction." *Pirates and Mutineers of the Nineteenth Century: Swashbucklers and Swindlers*. Edited by Grace Moore, Routledge, 2016, pp. 1-10.
- Moorhouse Marr, Edwin John. "'Cut from life': The Many Sources of Branwell Brontë's 'Caroline'." *Brontë Studies*, vol. 44, no. 2, 2019, pp. 218-231.
- . Review of *To Walk Invisible*, by Sally Wainwright. *Brontë Studies*, vol. 42, no. 4, 2017, pp. 366-68.
- 'Noctes Ambrosianae.' *Blackwood's Edinburgh Magazines*, April 1830, pp. 659-94.
- Neufeldt, Victor A. "Branwell Brontë's Alexander Rougue/Percy Part 1." *Brontë Studies*, vol. 42, no. 3, 2017, pp. 190-210.
- . "Branwell Brontë's Alexander Rougue/Percy. Part 2." *Brontë Studies*, vol. 42, no. 4, 2017, pp. 321-340.

- . "Branwell Brontë's Alexander Rougue/Percy. Part 2." *Brontë Studies*, vol. 43, no. 1, 2018, pp. 100-100.
- . "The child is parent to the author: Branwell Brontë." *The Child Writer from Austen to Woolf*. Edited by Christine Alexander and Juliet Macmaster, Cambridge UP, 2005, 172-187.
- . "The Writings of Patrick Branwell Brontë." *Brontë Society Transactions*. vol. 24, no. 2, 1999, pp. 146-160.
- Nyborg, Erin. "From Angria to Thornfield: Charlotte Brontë's cross-period development of the Byronic hero." *Charlotte Brontë from the Beginnings*. Edited by Judith E. Pike and Lucy Morrison, 2017, pp. 141-54.
- . *The Brontës and Masculinity*. 2016. Oxford U, PhD dissertation. Oxford University Research Archive, <https://ora.ox.ac.uk/objects/uuid:3d1d0ee1-f3f8-43cd-9fdd-5d44cfae2a83>. PDF downloaded.
- Pike, Judith E. and Lucy Morrison, editors. *Charlotte Brontë from the Beginnings: New Essays from the Juvenilia to the Major Works*. Routledge, 2017.
- Oliphant, Margaret. *Annals of a Publishing House Volume 2: William Blackwood and His Sons, their Magazine and Friends*. 1897. Cambridge UP, 2010.
- Quarm, Joan. "Arming Me From Fear Branwell Brontë's Contribution to "Wuthering Heights"." *Brontë Society Transactions*, vol. 17, no. 4, 1979, pp. 278-86.
- Ramsey, Neil. *The Military Memoir and Romantic Literary Culture, 1780-1835*. Ashgate, 2011.
- , and Gillian Russell. editors. *Tracing War in British Enlightenment and Romantic Culture*. Palgrave Macmillan, 2015.
- Ratchford, Fannie Elizabeth. *The Brontës' Web of Childhood*. 1941. Russel and Russel, 1964.
- Reany, James. "The Brontës: Gothic Transgressor as Cattle Drover." *Gothic Fictions: Prohibition/ Transgression*. Edited by Kenneth W. Graham, AMS, 1989, pp.227-44.

- Russel, Gillian. "The Eighteenth Century and the Romantics on War." *The Cambridge Companion to the War Writing*. Edited by Kate McLoughlin, Cambridge UP, 2009, pp. 112-125.
- Sanders, Valerie. *The Brother-Sister Culture in Nineteenth-Century Literature: from Austen to Woolf*. Palgrave, 2002.
- , and Emma Butcher. "'Mortal hostility': Masculinity and fatherly conflict in the Glass Town and Angrian Sagas." *Charlotte Brontë from the Beginnings*. Edited by Judith E. Pike and Lucy Morrison, Routledge, 2017, pp. 59-71.
- Scott, Walter. *Old Mortality*, 1816. Edited by Jane Stevenson and Peter Davidson, Oxford UP, 1993.
- . *The Pirate*, 1822. Edited by Mark Weinstein and Alison Lumsden, Edinburgh UP, 2001.
- . *The Two Drovers, and Other Stories*. 1827. Edited by Graham Tulloch. Oxford UP, 1987.
- Shears, Jonathon. "An allusion to *Don Juan* : reappraising Branwell Brontë's Byronic self-fashioning." *Brontë Studies*, vol.47, no. 1, 2022, pp. 30-46.
- Sheerman, Lucy. "'Gross flattery': The Search for the Worth of Words in Branwell Brontë's 1837 Letter to William Wordsworth." *Brontë Studies*, vol. 44, no. 1, 2019, pp. 95-108.
- Simpson, Diane. "Appendix B: Graphology." Patrick Branwell Brontë, *The History of the Young Men*. Edited by William Baker, with others, Juvenilia, 2010, pp. 62-4.
- Smith, Margaret, and Herbert Rosengarten. "Introduction." Charlotte Brontë, *The Professor*. Edited by Margaret Smith and Herbert Rosengarten, Oxford UP, 2008, pp. vii-xxiii
- . "Appendix: Introduction to 'Emma.'" Charlotte Brontë, *The Professor*. Edited by Margaret Smith and Herbert Rosengarten, Oxford UP, 2008, pp. 225-7.
- Stoneman, Patsy. Review of *The Pirate*, by Patrick Branwell Brontë, edited by Christine Alexander, Joetta Harty and Benjamin Drexler. Juvenilia Press, 2018. *Journal of Juvenilia Studies*, vol. 2, no.1, 2019, pp. 59-61.

- Sutherland, Kathryn. "Honresfield: Imagining One Man's Collection." *Brontë Studies*, vol. 48, no. 1-2, pp. 115-25.
- Thormählen, Marianne. "The Brontë Novels as Historical Fiction." *Brontë Studies*, vol. 40, no. 4, 2015, pp. 276-82.
- . *The Brontës and Religion*. Cambridge UP, 1999.
- . editor. *The Brontës in Context*. Cambridge UP, 2014.
- Van Der Merr, Carolyne. "Branwell Brontë's Role in the Creation of Heathcliff." *Brontë Studies*, vol. 42, no. 3, 2017, pp. 211-19.
- Wagner, Tamara Silvia. "Charlotte Brontë's *Ashworth*: From adapted Angrian villains to recurring sibling pairs." *Charlotte Brontë from the Beginnings*. Edited by Judith E. Pike and Lucy Morrison, Routledge, 2017, pp. 126-40.
- "Was Branwell a Granddad?" *The Brontë Society Gazette*. Issue 90, 2023, pp. 7-9.
- Winniffrith, Tom. "Branwell and Ponden Hall." *Brontë Facts And Brontë Problems*. Edited by Edward Chitham and Tom Winniffrith., Macmillan, 1983, pp. 77-83.
- . "Introduction." *Charlotte Brontë: Unfinished Novels*. Alan Sutton, 1993, pp. vii-xi.
- . *The Brontës and Their Background: Romance and Reality*. 1973, Macmillan, 1988.
- Wise, Thomas James and John Alexander Symington. editors. *The Brontës: Their Lives, Friendships and Correspondence*. 4 vols. 1932. Porcupine Press, 1980.
- Withers, Charles W. J. "Mapping the Niger, 1798-1832: Trust, Testimony and 'Ocular Demonstration' in the Late Enlightenment." *Imago Mundi*, vol. 56, no. 2, 2004, pp. 170-93.
- Wright, Sharon. *The Mother of the Brontës: When Maria Met Patrick*. Pen and Sword, 2019.
- 稲本守「欧州私掠船と海賊——その歴史的考察——」『東京海洋大学研究報告』第 5 号, 2009, pp. 45-54.
- 岩上はる子「初期作品に見る植民地的要素」『シャーロット・ブロンテ論』中岡洋編, 開文堂出版, 2001, pp. 105-122.
- . 「ブランウェル・ブロンテ初期作品研究（1）——「若者たちの歴史」を中心に——」『滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学』52 号, 2001, pp. 117-30.

- . 「ブランウェル・ブロンテ初期作品研究（2）——「侵略戦争」を中心に——」 『滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学』 52 号, 2002, pp. 125-35.
- . 『ブロンテ初期作品の世界』 開文社, 1998.
- 片山美穂 『陸軍元帥アレグザンダー・パーシー閣下の生涯』 における天使と悪魔の構図」
『ブロンテ・スタディーズ』 第 6 巻, 第 3 号, 2017, pp. 47-61.
- 加藤憲市 『イギリス古事物語』 大修館書店, 1994.
- 兼中裕美 「21 世紀の Branwell Brontë——2 つの展覧会」 *Brontë Newsletter of Japan*. no. 95, 2017, p. 2.
- 瀧川宏樹 『シャーロット・ブロンテの生涯』 における男性像——ブランウェル・ブロンテ
に対する曖昧な姿勢——」 『ギaskell 論集』 第 32 号, 2023, pp. 73-85.
- . 「ブランウェル・ブロンテの詩作品における海の表象」 『ブロンテ・スタディーズ』
第 6 巻, 第 3 号, 2017, pp. 33-46.
- . 「『ブロンテ・スタディーズ』 におけるブランウェル像の変遷——1895 年から 1999
年まで——」 『大阪工業大学紀要』 第 64 巻, 第 2 号, 2019, pp. 25-36.
- 廣野由美子 「ブランウェル・ブロンテ——一家の希望の星、あるいは敗北者」 『ブロンテ姉
妹と 15 人の男たちの肖像——作家をめぐる人間ドラマ』 岩上はる子, 惣谷美智子
編, ミネルヴァ書房, 2015, pp. 23-43.
- . 「ブランウェルは第四の小説家になりえたか？その可能性と不可能性をさぐる」 『ブロン
テ・スタディーズ』 第 6 巻, 第 4 号, 2018, pp. 1-25.
- 古野百合 「シャーロット・ブロンテの小説における兄弟間の確執のモチーフ——育児放棄
された子どもへの強い関心」 『神戸英米論叢』 第 36 号, 2022, pp. 15-28.
- . 「母マリアとペンザンスの残影——ブランウェル・ブロンテの「海賊」」 『言葉を紡ぐ
——英文学の 10 の扉』 渡千鶴子, 橋本史帆編, 音羽書房鶴見書店, 2023, pp. 68-
89.
- . 「ブランウェル・ブロンテの先見の明——『羊毛は高騰する』 における羊毛投機の表
象」 『英文学研究支部統合号』, 第 13 号, 2021, pp. 109-117.
- . 「労働者階級に対する眼差し——『シャーリー』 と『メアリー・バートン』 における
語り手の比較」 『ブロンテ・スタディーズ』 第 6 巻, 第 5 号, 2019, pp. 65-78.

牧杏奈「サバルタン研究——概念的な特性と意義——」『明治大学社会科学研究所紀要』第
59 卷, 第 2 号, 2021, pp. 93-108.

渡千鶴子「「言葉」から探る多様な性——シャーロット・ブロンテの『教授』出版の苦渋」
『言葉を紡ぐ——英文学の 10 の扉』渡千鶴子, 橋本史帆編, 音羽書房鶴見書店,
2023, pp. 3-23.